14.5-355
1200700349551

産業對策資料
第四輯

4

獨逸勞働奉仕制度資料

勞働奉仕の精神
勞働奉仕義務制度への基礎問題
勞働奉仕制度への道
勞働奉仕制度とは何ぞや

東京府學務部社會課

立憲民政黨政務調査館
叢A 27 4
10.1.

始

国立国会図書館蔵書
I種
W
1200700349551

はしがき

本書は、獨逸に於ける勞働奉仕制度を極めて簡易に解得するに足る、必要なる文献を四つ輯錄したものであるが、獨逸勞働奉仕局書記長コンスタンチン・ヒールル氏の『勞働奉仕の精神』は一般基本的問題を取扱ひ、同じく『勞働奉仕義務制度への基礎問題』には勞働奉仕制度の確立及びその經濟的社會的基礎問題を闡明せるものである。尙、フリツツ・エーデル氏の『勞働奉仕制度への道』及びブランデンブルク・ミュラー氏の『勞働奉仕制度とは何ぞや』に於ては、同制度の比較的具體的問題を取擧げて一般國家政策問題にまで論及したものであるが、矢張り本書に輯錄せる諸論文は大體の梗概に過ぎぬ嫌があるので、他の專問的研究は、別冊第五輯及び、第六輯として別に之を刊行する次第である。

本譯は忽卒の間に企てられたため多少の誤譯及び用語の不精確なるもの及び誤植も多々あるにも不拘一部關係者の參考に資するため謄寫に代へて玆に印刷に附した次第である。

昭和九年十二月

東京府學務部社會課

目　次

一、勞働奉仕の精神……コンスタンチン・ヒール…（一）
Der Geist des Arbeitsdienstes.

二、勞働奉仕義務制度への基礎問題……コンスタンチン・ヒール…（七）
Grundsätzliches zur Arbeitsdiestpflicht.

三、勞働奉仕制度への道……フリッツ・エーテル…（二三）
Der Wng zum Arbeitsdienst.

四、勞働奉仕制度とは何ぞや……フランツ・メンター（四五）
Was ist Arbeitsdienst ?—Was soll er?—

以　上

勞働奉仕の精神

Der Geist des Arbeitsdienstes

von Konstantin Hierl

Staatssekretär für den Arbeitsdienst

序

工場勞働者の子弟たると、學者の子弟たるとを問はず、其の貧富の如何を問はず、各獨逸人を一度び勞役に從事せしめ、從つて、各人に服從を學ばしめ、依つて以つて、容易に命令統制をも實行せしめんとする企圖、これは吾々の斷固たる決心の所産である。

一九三三年五月一日　　アドルフ・ヒツトラー

勞働奉仕制度實施指導者

勞働奉仕書記長乃至書記官長たるコンスタンテイン・ヒルルは、一八九五年、バイエルン歩兵第十一聯隊の將校となり、間もなく、其の多才と燃える鐵の如き熱心さの御蔭を蒙つて、全部下の信頼を一身に收めるに至つた。一九〇八年參謀本部付となり、大戰中、前線と參謀本部間に於て交互に種々なる重要任務乃至地位に立つたのである。一九一五年アラの五月戰役に際しての重大なる危機に臨み、特に一九一六年ソンム河畔の防禦戰に際し、當時少佐としての彼は、特に多彩な役割を演じた。敗戰後、彼は既に大佐として國防省内に活動し、其の間、彼の最初の著作を公表した。該書は大戰の推移狀況を明徹なる視力を以つて書き上げたものであつた。當該著作の主旨は、これに依つて、

當時の前線勇士の偉大なる功績を全國民に眼の邊り知らしめ、依つて以つて、國民の自覺と犧牲的精神を發揚することにあつた。吾々國民に對する斯くの如き責任感は、彼を獨逸自由解放の大運動へと固く結合せずには置かず、從つて、一九二三年の彼の職務放棄も亦やむを得ないことであつたと云はねばならぬ。

アドルフ・ヒツトラーの最も實行力に富める協力者の一人として、彼、コンスタンテイン・ヒルルは、指導者としての信頼を獲るに及び、一九二九年第二機關指揮者に任命された。この第一機關には凡ゆる建設事業が屬し、而して第二機關には「勞働奉仕」部門が附屬してゐる。この奉仕部門に彼の興味が最も強く結び付けられてゐるのである。眞に彼は、青少年に對して有する勞働奉仕精神の實現を目して社會主義への一大敎化發展、これを換言すれば、獨逸全國民の一大敎育課題と見做してゐる。社會的龜裂、階級憎惡、階級豪慢、これらを青少年の爲に排除する手段として、貧富如何に不拘、同質の衣服を纒ひ、均一の賃銀を以つて、平等の勞務への服從、換言すれば、國家及國民に對する名譽ある奉仕、を措いて他に如何なる方法手段も

二

有り得ない。經驗ある組織者のもつ見識を以つて、彼は總ての事務を確實に把握し、無數の公表書、或は數々の演說場を利用して、勞働奉仕制度の解明に最善の努力を拂ひつゝある。彼が特に國家社會主義運動團體を超えて、遠く祖國以外の國家間に著名となつたのは、彼の著書「勞働奉仕制度機構と其意義」の爲である。

國家社會主義革命遂行に依り獨逸支配權獲得後、頭腦明徹、並びに自己の意志實行に際しての絕大なる自信力を有する人材に勞働奉仕の施行が委ねられたのは、毫も不思議とするところでなく、むしろ當然のことであつたのである。ヒールルの心の裡には、勞役の最前線に立つ全國民の毅然たる統率者としての人格が存してゐて、この人格こそ吾々全國民の眼前で活動作用をなし、その活動は常に國家及國民の爲の勞役に他ならなかつたのである。

斯樣に我々は、勞役制度の指導者に滿腔の信頼を置くものである。何故かならば、彼の全力を捧ぐる目的は、我々の最高指導者アドルフ・ヒツトラーの意志に基き、勞役制度を通じて向上する獨逸の青少年をして、國家社會主義的國家觀の自覺ある支持者たらしむるところにあるからである。

フリツツ・エーデル

勞働奉仕の精神（本文）

勞働書記長大佐　ヒールル

非達見者は、勞役奉仕を目して、單に、失業難と云ふ時代病に對する爭鬪の經過的、應急的補助手段と看做してゐるやうである。

ところが、勞役奉仕制度の意圖は遙に遠大なるものであつて、非達見者の到底豫測し得ないものである。

勞役義務思想こそ、新時代を代表する最も適切にして著名なる時代精神の表現であり、刻下社會運動の出發點である。該改革運動の本體は、夫れ自體の意慾に於て、勞役觀念に對するその解釋に於て、或は又、土地への結合度に於て、正にその影を沒せんとしつゝある自由主義者的時代（この時代にこそ、猶太主義の刻印が絕へず印せられてゐた）の精神に對して、最も嶮惡なる對立を示すものである。

自由主義者的勞働觀に依れば、勞働は單なる財貨の獲得手段に過ぎず、從つて、その必要度の强弱の差こそあれ、一の心的懊惱である。依つて、他をして自己の利益の爲に勞役せしめ、自己勞働の最大制限量を以つて、最大量の財貨を獲得することを最も良く了解せる者を目して、所謂利功者となす見解を生ぜしめてゐるのである。

これに反し、吾々の側より見れば、勞役は如何なる懊惱苦澁をも意味せず、反つて、吾々生活の內容をこそ形成するものである。吾々は、勞働の中にこそ、爭鬪の友を見出す。勞働なく、生活爭鬪なき存在は、吾々にとつて、薄暗い

病室であり、從つて、凡そ無意味な存在である。

勞働價値に對する自由主義者的見解の出發點は「勞働は個々人に利益を齎らす」と云ふ思想であり、吾々の對勞價値は、國民公共團體を土臺とした勞價に出發してゐる。自由主義時代の自負漫々たる主智主義乃至合理主義は、豪慢なる態度を以つて、肉體勞働を見下ろしたのである。「單に勞働者一匹が……」と云ふのは、庶民階級思想の對勞働者見解乃至態度であつた。吾々は、獨逸勞働者に勞働者としての名譽を冠せんとするものである。この名譽こそ、勞働者にとり、協定賃銀にも增して一層必要であり、且つ必要缺く可からざるものである。何故ならば、彼等勞働者も又間違ひなく獨逸人であるからである。依つて吾々は、「勞働者」と云ふ言葉を、各獨逸人に對する尊稱となすであらう。故に、各獨逸青年は、或る一定期間、肉體勞働者として、名譽奉仕を彼等勞働者の國民に對して遂行す可きである。反動思想に對し、最大確心を以つて强調出來ることは該勞役は武器を伴ふ名譽ある奉仕であるのみならず、勞役器具を以つてしてもその名譽を毫も毀損しないと云ふことである。凡ゆる非自己的國民奉仕こそ卽ち名譽ある奉仕に他ならぬ。

吾々は猶他の各階級に對しての唯だ單なる相對的階級榮譽をも認めるものである。とは云へ、これは發生し、軈て階級任務の忠實なる履行を俟つて消滅するものである。

個人間に容認されてゐる個人的尊敬の生起原因は、個々人の働き振りには全く無關係で、むしろそれは、如何に彼が彼の義務を充たすかに存してゐる。

自由主義者的時代の物質的商人精神は、皆凡ゆるものを「商品」と見做し、剩さへ、勞働人及鄕土にさへその觀念を及ぼしてゐる。

吾々側より見れば、勞働人は創造の王者であり、鄕土は神聖なるものに屬し、從つて、これこそ吾々母國の實體である。

吾々の祖先、吾々の無限なる過去は、現在吾々が住居を構へてゐる土地の一片から始めて、遂に、現今の獨逸耕作地に迄仕上げたのである。吾々には任務が負はされてゐる。吾々はこの開墾事業の繼續を進めねばならぬ。吾等は、吾々の感する第一の義務は、全獨逸の土地を改良、以つて、吾が國民全體を自己の生產物に依り自活せしむるにある。

換言すれば、吾等は自給自足の政策を遂行せねばならぬ。總べての自由解放の基礎をなすものは、食糧の自給であり、この自給を俟つて始めて、吾々の他の拘束が解かれるであらう。糧道を他國權力に依つて開塞せらるゝ限り、その全國民は、既に、脫し得ない束縛を甘受せねばならぬ。

ヴエルサイユの平和條約の所謂國際的條文は、吾々農耕地の大部分を奪ひ去つた。依つて、今後吾々の採る可き道は、殘存土地を出來得る限り有効に利用すると云ふことにある。フリードリツヒ大王以後、大企畫に基く土地改良工作は殆んど皆無と云つてよい。その理由とするところは、吾々が何もする仕事を持たなかつたと云ふが如き單純なる理由からではなく、吾々の目的への目標が一時他に指し向けられてゐたからである。未だ完全に着手の域に到達しない土地改良工事の結果は、フリードリツヒ大王以來、引續き實行され來つた事績を、その事業の擴張度と相俟つて、一層効果的になすものと豫想されてゐる。獨逸國內に於ける未開土地にして、開拓可能なる土地の改良作業の結果は吾が農產物の增加を招來し、その額に於て年々二十億マルクを生ぜしめるであらう。該土地改良工作の遂行に際しての剩餘勞働力は相當程度に上るであらう。尙又、吾々經濟界の殷盛なる再生を見ても、工業及手工業のみは、現下の失業狀態から見れば、到底失業群の大量を吸收し得ないのである。土地改良工事に依れば、約五十萬の人々が、國民經濟的に最も有効なる勞役に從事出來るであらう。吾々が輸入食糧の代償として支拂はれてゐた海外爲替は、今後、吾々工業に必要にして未だ充されざりし原料購入に善用されるであらう。

吾が國の工業を徒らに不健全なる膨脹へ導き、國民を慢然と大都市並びに工場地帶に追ひ込み、尙且不健康に育て上げたもの、夫れは、自由主義者的經濟觀念時代以外の何者でもない。

依つて、現今國民生活問題の重心となつた問題は、國民の地方的分散化並びにその職業的配分化問題であり、必然的に煉獄を招來する都市化からの解放問題及多數國民の耕作地への復歸問題である。

上述國民の分散化並びに配分の條件を提供するもの、特に、青少年を肉體的にも精神的にも、その目的に從つて向上せしめるもの、これこそ勞働奉仕制度の登場夫れ自體で

ある。

自由主義　的時代こそ國民を、市民と貧乏人に、物持ちと貧乏人に、學者と無學者に、と云ふ如く、完膚なき迄に引き裂つて了つたのである。

一般國民及祖國への協同的にして、嚴肅且つ名譽ある勞役を骨組みとして、青少年を鍛錬する目的の下に該勞役制度がその制定を見たのである。

勞役制度の國民教育に及ぼす著名なる價値も、該制度に對し、その獨逸青少年の必要度迄は許容されず、單にその一部分に制約されるに於いては、十分なる効果を發揮し得ないのであつて、悲しむ可き事には、現今の自由意志的勞役奉仕は正にこの場合の條件を充すものである。

正に可及的速にその教育完成を希ふ者は、現在の自由意志的勞役奉仕制度を通じては決してその望みを達し得ないであらう。卽ち、自由意志に基く勞役奉仕制度の蔭には、勞働嫌惡と卑怯が潜在してゐるからである。

吾々國民の一小部分が、自由意志的に、國民及鄕土への義務を遂行してゐる間は、必要なる遂行任務の他の部分は間違なく他の一隅に押し込められるであらう。斯くの如きは、國家社會主義の一刻も堪へ得ざるところである。

故にこそ、吾々國家社會主義者は、その根本に於いて一般的、平等原則に叶ふ奉仕義務を強く主張するのである。

斯くして吾々は、上述義務の遂行、卽ち、全國民を國家社會主義に固有なる精神的、靈的　勞役及勞働階級地位への善導に必要なる確固不動の手段を擇ぶに至るのである。

各國民は、身分權的權利を享有する從つて、個々人はその內的生活を自身に特有なる事象と必要に應じて形成し得るものである。

余が勞役奉仕の幕舍の訪問を許可した多數の外國人は、その訪問に依つて漸く、吾が獨逸勞役奉仕制度が平和工作であり、先づ第一に着手さる可き文化工作であることを知る機會を獲たのである。

一般的、平等的勞役義務の要請は、自由主義　的時代精神への鋭角的挑戰布告に他ならぬ。

是に依つてこれを見れば、內外自由主義者の代表者連が該要請實施の前に、出來得る限りの大障碍を用意せんと身構へてゐるのは、何等不思議とするに足りない。

併し乍ら、吾々の行手に斷えず岩石が崩壞しやうとも、或は、行手を遮ぎる陷穽が用意されてゐやうとも、これらに依つて吾々の目的への行進は毫も妨げられぬであらう。若し不幸にして、偶々吾々の進路が閉塞されるならば、その障碍線と並行した新たな進路を開拓するであらう。目的への方向は、吾々の眼から決して消失しないであらう。吾々は、勞役奉仕思想をして飽く迄立派に成長せしめ、決して他に遺棄しないであらう。

時代の新傾向を辿り、外的に波瀾多き思想は、如何なる種の思想にせよ、無理解と不惠に對する困難なる爭鬪の下に於いてのみ、その思想の念願が達せられる、と云ふことを吾々は知悉するものである。

吾々の恐るゝは爭鬪に非ず、恐るゝに足るものは獨り國家社會主義者であるか、どうかと云ふことである。何故ならば、眞の國家社會主義者であれば、彼は既に鬪士でなくてはならぬから。

吾々は、吾々の出發點の信賴するに足ることを固く信ずるものである。吾々は必勝を齎らす奉仕思想の力を信じ、吾々意志の强靱性に滿腔の信賴を置くものである。

勞役奉仕思想は獨逸國土の隅々に迄、その勝利を謳歌し乍ら透泌し、尙進んで、他の文明國にも及ぶであらう。

既に數多の國、特に、ゲルマニヤ系統諸國では、獨逸國家の政策を踏襲するに至つた。

思想の具象化に際しても尙、思想の基調を繼續せんと注意を拂ふところに、現今吾々に與へられた問題が存してゐる。

勞役奉仕制度の實施は決して容易なものではなく、殊に該制度中の指導局の任務は、蓋し最も困難なるものゝ一つである。而して勞役奉仕制度は高度の要求をなすものである。その要求とは、曾つて存在せし如く、俸給は功績に對する報酬としては支給され得ない、と云ふことである。勞役奉仕制度は、祖國及改革運動の老ひたる功勞者に對する救護機關であつてはならぬ。夫れは、工作に對する作業場となる可きであり、その工作の結果は、將來必ずその實を結ぶであらう。勞役制度は、唯だ以上の點に關してのみ與へられてゐるのである勞役制度の指導者連も決して、心地良い日常生活を慢然と送つてゐるのではない。彼等を招くものは、野心でもなく、富でもない。彼等は、彼等が理想主義者である限り、名譽ある勞役の中に、十分なる滿足

を心の裡に獲るものである。勞役奉仕者達は、彼等の物質的要求については、極く低い程度の夫れしか持つてゐない。併し乍ら、彼等の希む所は、彼等に內部的尊敬が與へられるのみならず、外部的名譽も又認められると云ふことである。何故ならば、この名譽は、國家及國民への名譽奉仕としての勞役に當然與へられねばならぬものであるからこの名譽確認こそ、斷乎として要求さる可きものである。彼等勞役者はこの名譽確認に依つてのみ、彼等の從事する冷徹なる奉仕を喜びと獻身を以つて遂行し得るのである。

依つて、私は、二十五萬の勞役同輩の名に於いて、獨逸全國民に以下の數言を固く誓ふであらう。

我々は、獨逸勞役奉仕を、我々最高指導者、アドルフ、ヒトラーの格言「我等の國家及國民の再建を擔ふ一小支柱」に從ひ、我々の全力を以つて完全に生育せしめるであらう！

（完）

勞働奉仕義務制度への基礎問題

Grundsätzliches zur Arbeitsdienstpflicht

von Konstantin Hierl
staatssekretär für den Arbeitsdienst

本書は一九三四年一月二十日獨逸學生大會に於て爲したる勞働奉仕制度書記長コンスタンテイン・ヒールル氏の演說を譯せるものであるが、今や論難の俎上に上れる强制勞働（勞働奉仕義務）の確立及び其の經濟的社會的基礎を闡明せるものである。

——譯　者——

勞働奉仕義務の理念は國家社會主義的世界觀に立脚する。

既に一九二八年國家社會主義議會フラクションは正當なる國家社會主義感から出發して勞働奉仕義務の樹立を提議したのである。之の要請を如何に實現す可きかの點に就ては其の當時は世人がサホド頭を惱ましなかつたのである。蓋し當時の狀勢は之の提議が提案者の投票諸共水泡に歸する事を證明して居たからである。

余は一九三〇年に指導者（玆に指導者とは謂ふ迄もなくアドルフ・ヒツトラーの事であり、〔總統、首長とも譯さる〕ヒツトラーは黨員をして自己を斯く呼ばしめるのである。——譯者）に對し、眞先に勞働奉仕の諸問題を詳細に提示したのである。之の提議に勞働奉仕制度の意義及其の目的が始めて鮮明に力强く表示されたのである。

余は敢て其の時の鞏固なる基礎的な考へを手許にある記錄から拔萃して提示するであらう。卽ち勞働奉仕制度は非常時が釀成せる失業防止に對する經過的な應急事業とは其の間多大なる距離の存するものである。勞働奉仕義務なる理念は一般的な敎育義務及一般的な國防義務思想への論理一貫せる前進であり、同時に必然的補充でもある。

獨乙民族は戰時に武器を執る許りでなく、平時には諸勞働用具を持つて獨乙母國に仕へなければならぬ。獨乙人は彼我の區別なく彼が屬する民族の爲めの勞働者であり、戰士でなければならぬ。

勞働奉仕義務は獨乙青年の擔ふ可き名譽ある義務であり民族への寄與たらしむるを要す。（其以外の何物でもない）其は個人企業の爲め低廉なる勞働力を供給するのでもなく且勞働賃銀を壓迫する爲の公的國家的競爭企業ではない。

勞働奉仕義務制度は重大なる公私任務遂行、卽ち高度の國民經濟的、文化的約言せば國策的目的に寄與する公的任務遂行の爲に國家管理に關し勞働の主人公を參與せしむ。

既に一九三〇年以來公共的性質を帶べる勞働は第一次的に勞働奉仕制度に依つて成就せしむると云ふ事實は明かとなつたのである。同時に靑年を勞働奉仕制に編入する事は偉大な而も急迫せる勞働任務遂行の爲めに必然的であるとの議論も漸次世人に認めらる處となり、且つ高調されたのである。

世界大戰の苦い經驗は吾人に、最も安全な、而も豐富な

食糧供給地を持つ事の必要を如實に敎へたのである。而して之の經驗から演繹されたものは、輸入を恃まずに吾等の生活必需品及農業生產品を充足させんが爲めには、分割を免れた獨乙の土地を豫備勞働力の助けを藉りて利用すると云ふ事であつた。

爾來、研究と勞作の結果特に私の協働者トーレン氏は、吾等の食糧供給地の改善の必要は爾餘の一般的な任務に比し深刻なものがあり、且つ余が一九三〇年に調べたのよりも程度が高いと云ふ確信を得たのである。

大戰の終末は吾等から多くの州を掠奪し去つたのであるが勞働奉仕制度の大量的編成に依つて國境地方に新しい州を獲得し得るであらう。

之の勞働奉仕制度の重大なる任務と並行して其と相互依存の關係にあるもう一つの任務がある。卽ち、吾が民族を四離分散せしめざる事、換言せば民族の移住は國內の收容力ある地方に誘致せしむる事之である。

獨乙國の急速なる工業化は十九世紀中葉以降、我が民族をば大都市と工業地帶とに押し込めたのである。此の前例なき煙幕の有毒なる作用は國民保健及道德的諸部面に急速

に顯著となつたのである。平坦な地方、卽ち東部地方に人煙稀薄なる部落が出來、異端的國民性が浸潤して來たので、ある。斯くて吾が獨乙農民の特性及吾が民族性は顚落の危機に瀕したのである。

故に一九三〇年以來、我が民族を毒する都市集中から解放し、且つ多數の人民を過度に膨脹せる工業から耕地整理へと地域的、職業的に復び轉換せしむる事の重要性が將來の國家主義國に課せらる可き最も重大なる任務として認識さるに至つたのである。

而して之の不斷の移住は勞働奉仕制度の援助を求めねばならぬと云ふ事も必然に理解された。勞働奉仕制度は內國移住に必要な新しい、　改善された耕作地を創り、同時に新しい交通路の開設にも寄與した。何よりも勞働奉仕制度は內國移住に適應さす可く人民を敎育し、且つ都市の青年をして自づと獨逸鄕土に對する關心を緊密に結び付けたのである。

勞働奉仕制度に課せられた勞働任務に失業青年を多少從事さすと云ふ事は、さほど問題とす可きでない。此の勞働任務なるものは決して混亂極まる規範を提示するものでなく、高度の國民經濟的、文化的乃至は國策的意義を有するものたるを要し、其れを吾人は勞働奉仕義務者に把握させ、其の內的關係を覺醒さす事が出來るのである。斯くて吾人が內國移民に力を致せば今迄大都市の貸長屋の薄暗い裏庭でクスブつて居つた勞働者の子供達が輝しい太陽と新鮮なる空氣の中で愉快に遊ぶ場面を想起するであらう。又沼澤埋立及荒蕪地開墾工作進捗の曉は或る期間後農家が立ち並び、其處に　根强き農民性が芽生え、我が獨乙民族性を世紀に亘りて傳へしむる事が出來るであらうし、又廣大なる自働車路開設に協力せんか今日のローマ通りと同じく數千年後に於ても今の我々の時代相を知らしめ、斯くて鶴嘴の一擊にも、ショベルの一打にも其の意義を持たしめ得るであらう。換言せば地上の荒仕事は其の馬鹿氣た意味を離れ生命あるものとなるであらう。之を要する、唯物論の爲に切斷された勞働者と勞働との結合を復興させねばならぬ。

若し吾人にして勞働奉仕制度を指定せんとする大規模なる公的勞働を目して、單に其の勞働の物質的效果のみを眼中に置かんか、勢ひ之の勞働は强制勞働者を以てするか集團犯罪人又は懲治囚を以て遂行せしむるであらう。然し吾人が勞働の精神上の効果卽ち、一步進んで勞働の敎育的價値の點に立脚せば、吾が民族の生活諸條件の改善に協力する大規模の公的勞働を我が青年の最大多數の名譽奉仕部門として保留し、獨乙鄕土の名譽勞働を犯罪人に委せはしないであらう。然し、之の事は次のヂェネレーションが獨乙文化國を祖先の勞働製作品としてか或は强制勞働者の賦役勞働生產品として相續する事とは自ら區別さる可きである。祖先の勞働は其の後に來るもの(子孫)に自己の勞働を義務付けるのである。

更に、物質的勞働力給付よりも一段高く評價さる可きものは、勞働奉仕制度に編入された青年に齎す勞働の敎育的効果である。之の敎育的効果こそ勞働奉仕制度の本來の高き目的であり、本質的なものであつて、決して單なる快よき隨伴現象に止まるのではない。

勞働奉仕制度こそ何よりも偉大なる國民敎育の學校たらしむ可きである。

之は已に一九三〇年の聲明に於て指導者が特に人格的に高らかに叫んだのである。此處に勞働奉仕制度の理念の核心が存在するのである。

假りに之の教育思想を勞働奉仕制度から捨象し或は奥に押し込めんか、其は取りも直さず勞働奉仕制度から其の魂を奪ふ事である。

我が民族の國家社會主義的世界觀への綜合教育の領域に關する限り、勞働奉仕制度は全く特殊な教育問題を提示するのである。

獨乙の若き青年は或る特定期間勞働奉仕制度に編入され其處で生活する事に依つて、勞働の道義的價値に對する正しき理解及び獨乙勞働共同社會に關する正當な心的態度を獲得するを要す。

蓋し過去の自由主義盛んなりし頃、支配的であつた勞働に對する利己的、唯物的態度及び勞働は單なる貨幣獲得の手段であり、又は賣買する商品に過ぎぬとの見解を克服し其の故に獨乙の青年は或る特定期間を彼の屬する民族の爲めに名譽奉仕として働かねばならぬからである。

尙ほ、手工業及農業勞働に對する不遜な輕視を止め、進んで階級的僭越と階級的憎惡を根こそぎ刈除せんが爲めに學生は若き工業勞働者及び若き農民と共々に同志から成る勞働社會に編入し、彼の全民族の爲めに奉仕せねばならぬからである。

且つ亦、「勞働者」なる名稱を全獨乙人に對する名譽ある名稱たらしむる爲めに、年若き獨乙青年は誰しも或る期間肉體勞働者として國家の爲めに名譽奉仕せねばならぬからである。

斯くして始めて勞働奉仕制度は新しき獨乙勞働性及理想的獨乙社會主義形成の國民教育學校たり得るし、其は同時に爾餘の手段を以てしては絕對に補充代用し得られぬものである。

之の國民教育學校を或る一部分に限らず、我が全獨乙青年に擴充させねばならぬが故に、即ち之の目的を充足させんが爲めに勞働能力ある總ての獨乙青年に一般的に平等に勞働奉仕義務を始めから目的として確定せねばならなかつたのである。

一九三〇年以來確定された之の勞働奉仕制度に對する基礎觀念は確固不動のものとなり、之の精神は不健全な人々に依つて動搖を起す事はなかつたのである。換言せば此の基礎命題に關して如何なる運動も起らなかつたのである。之の命題は今迄吾々の組織が遂行し、又今後共實現せねば

ならぬ盤石の基礎であつたのであり、且つ勞働奉仕制度は指導者から與へられた理想に忠實でなければならぬ。

勞働奉仕制度の組織は其の理想實現に役立つものたる可きは贅言を要しない。

勞働奉仕制度は國家社會主義運動の卵であるが、其は同時に自己の個性を有し、自己の精神を强行するものでもある。故に其が之の精神の把持者であり、宣傳者である事を中止する事は即ち自己の拋棄を意味するであらう。而して恰も學校や國防力と等しく之の唯一の精神の把持者も亦特殊の生活樣式を必要とするのである。即ち國家社會主義國家は其の組織內に異分子を抱擁し得ない。蓋し國家及民族の內面的諸任務を果さんが爲めに、特殊の生活樣式を要し斯くて勞働奉仕制度も亦其に特殊なる生活樣式を必要とするからである。

勞働奉仕制度の組織に關する問題とは、勞働奉仕制度を可能ならしめ、其が獨自の生面を拓き、課せられた諸任務就中國民教育の天職を完成する樣な構成を創る事である。

今日迄　勞働奉仕制度の構成に際して非常に束縛を感じたのである。蓋し對外的な顧慮と國內的な拘束とは我等の仕事の標準を非常に狹め、發展過程のテンポを迂餘曲折と澁滯に押し遣つたからである。乍然吾々の目的地點に對する透視は決して眼界から消え去らなかつたし、殊に一九三〇年の確定命題からは一歩と雖も離れなかつたのである。少くとも私が勞働奉仕制度の支配權を掌握して居る限り敍上の事は起り得ないであらう。

勞働奉仕制度に關するあらゆる彈壓に抗しても奉仕第一年度には國家社會主義政府に積極的に勞務を給付すべきであり、之に關する批判の如きは決して怖れてはならぬ。

勞働奉仕制度の相並立錯綜せる目的樹立に狂奔し時局問題として拋げ付けた色とり〴〵の無數の聯合會乃至團體を統一的な國家社會主義的團體に鍛え上げ、之を國家社會主義的指導原理と國家社會主義的目的確立に誘導するであらう。

勞働奉仕制度の高き諸任務に適應する指導者原理の教育も當初より其に關する必要な構成を創らねばならぬと云ふ吾々の顧慮は妥當なものであつた。且つ數ケ年の內に完璧した指導者團を地上に進軍せしむる事の難事でないと云ふ說も惘眼なる判斷者には明瞭だつたのである。

以前の散漫、無秩序な、實に無意味な勞働編成の中に、秩序整然たる勞働計劃が取つて代り、勞働奉仕本然の意味即ち我が國民に必要なる諸命題の遂行へと轉じたのである。勿論吾等自身に勞働を指定、分割する事は出來ぬ。吾等は單なる勞働の負擔者であるが、乍然疲れを知らず吾等の勞働力を提供し、且つ大規模な勞働編成の可能性を示すものであり、同時に總ての大規模な公的勞働組織の一環を成し、所與の地位が無くんば苦痛を感んずると云ふ點に於ても沈默を守る可きでない。

從前の紛糾、腐敗せる組合管理は影を潜め、勞働奉仕制度の管理には秩序と清淨とが齎されたのである。

扨て婦人勞働奉仕制度は變つた新しい組織を見出したのである。其の組織は婦人勞働奉仕制度をして、其の婦人の指導の下に獨乙婦人及母性を教育する特殊の任務を遂行せしむる蓋然性を與ふるものである。若年の男性及女性は勞働奉仕制度の精神的支柱に關する一般性に對應しつゝ、而も婦人勞働奉仕制度は他方に於て獨乙勞働奉仕制度の綜合組織に强靱に結び付くのである。娘子軍を共同的な勞働奉仕制度に編入する事に依りて悲慘な外國の狀態を知らしめる事が出來、且つ獨乙勞働奉仕制度は假面の軍國主義的組織以上の何物かを問題にして居る事を認めさす事が出來るのである。

斯くして自由意思に基く勞働奉仕制度は去年の中に、一般に平等なる勞働奉仕義務制度の實施への準備と階梯に妥當する組織を獲得したのである。蓋し其の組成は自發的勞働奉仕制度の意義及目的の提示に過ぎなかつたからである。余は最初からあらゆる誘惑と思想上の動搖に抗してこの見解を死守したのである。

今や、勞働奉仕制度の若々しい植木は根を下した。この植木は其の地盤を確保し、其れ以上の飛び離れた手入も剪定も他の土地への植え替えも許されないのである。

之の若やかしい植木に根を張らせ、ムク〳〵成長させんが爲めには確實、不變の培養を要す。吾人は須らく之の樹木の成長に關しては樹木の内に藏せる生活力と天の祝福とに信賴するが、同時に庭師は用意周到な培養の義務を忘れ、手荒に育てる事は禁物である。庭師は其の爲す可き處を知り、且つ知識と能力を具へ、惡い嫩枝を剪斷し、場合に應じて必要な小枝を接ぎ、土壤を軟くし、害虫を驅除する。

約言せば天然の繁茂に惠まれた諸條件を創り、有害な影響から出來る限り遠ざける事である。

敍上の基礎原理はあらゆる組織及教育手段の培養に妥當する。蓋し培養と生命との間に矛盾を結果せざらんが爲めである。

同樣に勞働奉仕制度と雖も亦、骸骨の構成でなく、高き理念を持つた生きた組織體である。

之が管理指導に當つては常に生活の核心に手を觸れ、上から下へ講義するに止めず、現實の生きた事象を鋭敏に觀察し、顧慮し、之に從ふて援助を與ふる事が肝要である。且つ之の援助には一つの系統が存在し、其の構成は決して目的も計劃もない實驗の集團であつては成らぬ。終局の目的地は吾等の視野に明瞭、確乎たるものであり、同時に發展段階の何處に主揚音を置かねばならぬかも吾人には耀かでなければならぬ。

此の構成に就きて確定した規準を與ふる事は無い。單に一つの技術に過ぎぬからである。之の創造的技術は二つの方向、即ち正しき精神を目醒ます事と、適當な形態を創る事に役立つのである。

構成に當り遭遇する非常な苦勞と心配の絶えね仕事は平靜に實行し、公開せられず、相當の時日を經て初めて豐饒な收穫を得るであらう。

吾人が勞働奉仕制度に植え付けんとする精神とは何か？其は吾等の指導者が吾が獨乙民族に繰返して呼び掛けたもの、其の援けを藉りて國家社會主義運動を實生活に呼び寄せたものに外ならない。即ち、獨乙精神であり、其は古代から獨乙の本然的なるものとして吾々の民族生活に浸潤せるものである。

「獨乙人は或る事物を自己の爲めに爲さんとするのだ」――之の有名なる格言は自由主義者に依りて口善惡なく誹難されたのである。所詮自由主義者にとりて、自我なるものは彼等の變轉無常の世界觀に遮へられて、敍上の解釋は理解されなかつたに原因するのである。

或る事を自己の爲めにせんとする意欲、――即ち其の事物に結び付いた理想を實現せんとする意欲――これこそ獨逸理想主義に他ならぬ。

理想主義とは空想的な情緒でもなければ、急に燃え上る精神化の過程でもない。理想主義とは、より深遠な永續的

灼熱であり、一つの理想に自己を全的に献げる事である。

之の理想主義を吾人は勞働奉仕制度に採り入れ、又そうせねばならぬ。自我拋棄の精神は勞働奉仕制度に於ては獨逸民族への名譽奉仕となる。

之の一つの任務への理想主義的自己拋棄は義務に忠實なる事に飛躍する。

吾人は勞働奉仕制度に依つて獨逸人をば義務に忠實なる人間たる樣教育する。

勞働奉仕制度は『勞働』及『勞働者』なる概念を當然『名譽』なるものとなすに役立つ。

故に吾人は勞働奉仕制度に名譽感情を植え付けるに際して最高の評價を認めねばならぬ。

名譽はあらゆる個人及社會の最高の善であり、決して特權階級の專有物でない。吾人は名譽に生きる民族たるを欲するが故に名譽感情を民族のあるゆる層に植え付けんとするものである。

されば吾人は獨逸民族に對し名譽奉仕をなす勞働奉仕制度は敍上の如きものに外ならぬと云ふ事を悟る可きである。

事情所論の如きが故は余は勞働奉仕制度に課せられた名譽任務なる大規模の耕地整理勞働に囚人を割り當てる事に就き異議を唱ふるものである。同時に各所の裁判所に依りて勞働奉仕制度に編入する事を一つの犯罪と宣言する事に抗議するものである。吾等の職場(勞働場所)は決して刑務所ではない。

又、吾人はお互に輕蔑す可きでない。蓋し平時にはサーベルや銃砲の代りに手斧や鋤を擔がねばならぬからである。

平常時に平和の武器—鋤を持つて彼の民族に奉仕する人は、平和工作の城塞と民族の名譽に己が生涯を献ぐ可く己に精神的に準備せるものである。

自分の名譽を重んずる人は同志の名譽も亦惡意に、輕卒に侵害せぬであらう。

斯くて名譽感の敎育は、勢ひ同志に迄利益を及ぼす。同志とは勞働奉仕制度に於て吾人が植え付けんとする精神の發露(現象)である。

吾人が勞働奉仕制度に於て獲得せんとする同志なるものは、安價でセンチメンタルな兄弟とは異なり、飲み友達以上

のものである。私は考ふるに、共同生活に際し、將又共同の仕事に際し、相互的尊敬と愼しみと助力とを拂ふ可きであり、同時に同志なる事に依つて共同的勞作の完成に就きて共同的な責任を負擔する相互依存の意識を理解し、進んで同志間の名譽に淵源する團體精神を會得するのである。

實に斯くの如き同志感は、勞働社會に於ては、純粹に個人的な事件は後部へ差控へる事を意味するものであり、かゝる同志感こそ其本質に於て社會主義と等しきものである。

以上の同志感は指導者と其の從屬員とを結合するものであり、彼等は「相互」に義務を負ふものである。指導者は從屬員を恰も死んだ機械を以て働く樣に「材料としての人間」——何と之の表現の嫌な事か——と看るのでなく、同じ勞作及名譽感敎化事業の協働者の一人として對するのであり、指導者は從屬員の幸福の爲めに努力するものである。同じく從屬員は指導者を無關係な利益の爲めに奉仕する强制勞働の監督者と思ふのでなく、共同事業の奉仕に課せられた責任ある任務遂行に際し、負擔を輕減す可く努力する同志としての指導者と看るのである。

故に勞働奉仕制度は同志感に結ばれた膨大な勞働社會として表現さるのである。

乍然勞働社會の理解に際し戒心す可き事は、勞働奉仕制度に於ける勞働社會なるものが古き組織を往々戰慄を以て再現する事なき樣にする事であり、事實之は今日に於ても尙ほ斯くの如き妄念が多くの人々の腦裏に幽靈の如く巢喰ふて居る事である。

奉仕は如何に行はねばならなかつた？ 將何を爲し、又爲さねばならぬかに關して論議反駁する處には勞働社會は維持せらるものでなく、且つ勞働社會の指導及組織に關し各人が批判の自由を有する處に永續するものでない。民主主義的議會の慣例は國家社會主義國家の勞働奉仕制度內に存在する餘地がない。

勞働奉仕制度の謂ふ勞働社會は一つのオーソリテーであり、國家社會主義的指導原理に依つて導かれる社會である。卽ち同志意識と嚴格な規律に依つて繫がれた社會なのである。

規律なる概念構成に當りて、各個人に秩序や指導者の人物が適合せぬ時に規律を破つて各人が自由な立場に立つ事を避けねばならぬ。——之の場合指導者が權力を有すると

否とは問題外である。――制限や留保附の規律と云ふものはもはや規律でない。

規律は箇々の場合正に不愉快極まる、困難な强制を感じ、大きな自己克服を要求するであらう。規律は決して人の品位を無視するものでない。蓋し吾人は或る個人共物に屈服するのでなく、内的に承服する原理に從ふに過ぎぬからである。

余は勞働奉仕制度の陣營生活にも多分のローマンティックな香を漂はせたいが、乍然下手にヴイオリンを引つかく樣なローマンスのみにでは勞働奉仕制度は物足りないのである。勞働奉仕制度の旗幟の下に誓を立てる者は困難な、古いプロシヤ的訓練と服從の原理を奉ずる事を公約せねばならぬ。

斯くして吾人は勞働奉仕制度なる立木に古い、枯木の若芽を接ぐ可きでなく――之の主張の固持さる可きは勿論であるが――獨逸民族の爲めに維持する價値の有る傳統を固く守る可きである。

「プロシヤの旗の下に集るものはもはや彼自身の物を所有しない」。――同じく彼の無制限の自動意思を持たないが。

鞏固な自我意識を有する青年中から成長した指導者なるものは最惡のものでない。而して漸くにして之の自我意思なるものは小我の意思の上に立つより高き意思を認識する紐帶である事を覺えるであらう。より高き意思卽ち共同社會に奉仕する事之である。而して奉仕は規律を要求する。

規律の原理は勞働奉仕制度の本質と不可分の關係にある。――恰も規律が眞正なる社會主義の本質と不可分に結合すると同じく――

理想主義、義務忠實、名譽感情、同志意識、紀律之の五者こそ、吾人が勞働奉仕制度内に培養せんとする精神の現象形態である。

共同社會の精神はとりもなほさず其の指導者の精神である。故に吾人が勞働奉仕制度に培養せんとする精神は、眞先に指導者に實現せねばならぬのである。

余が去年の五月現職に就いた際は、何人も以上說述せると同樣な指導者精神を說明する事が出來なかつた。卽ち今迄は指導者の地位を勞働奉仕制度の寄生者として單に個人的地位に利用する誤謬を犯したのであり、吾人が反對する精神の爲めに働いたのである。多くの人は其の意思に於て善良なものありたるに拘はらず指導者の特性を缺いたり、又他の多くは善良な意思と能力とを有するに拘はらず教養に乏しかつたのである。

されば吾人は廿五萬の青年を失業の悲慘から救ひ、之を勞働奉仕制度なる國民教育學校に編入せねばならぬのに、其の學校が吾人が規定せねばならぬ特性から遙か離れて居るからとて之を拱手傍視す可きであらうか？

之の事は絕對出來ないし、又許されない事である。吾人は之の任務が如何なる困難を伴ふとも放置を許さないし、且つ指導者の地位が如何に良くとも先づ人を指定す可きである。

一連の現存勞働奉仕制度從業員の隊伍にしても指導者の缺乏を掩ひ隱す可きでない。三十乃至五十歲のものは誰しも容易に地位に就く事が出來る。が、だからと云つて直ぐに上級の指導者の地位を占むる能力を承認する事ではない。故に今の處、外部から人を招聘する必要を生ずるのであり、其は突擊隊(S・A)も護衞隊(S・S)も同じ發展階梯では已に經驗せるものである。

S. A.=Sturm Abteilung　S. S.=Schütz Staffel

勞働奉仕制度に全身を献げるには餘り豐富でもない指導者の給料支拂を不能ならしむる程無數の適材が存在して居る。蓋し勞働奉仕制度の指導者の地位は副業を持つ事は認めらないからである。かくて有能の士でも、現在其の家族を養ふ責任を負ふて居るものを現在の職業を拋てゝ勞働奉仕制度に轉嫁する樣に仕向ける事は出來ない。勞働奉仕制度の月收はセイ〳〵三〇マルクである。

現今でも尙ほ指導者の俸給支拂は豐富でない。仕事に對する執着と愛、多分の理想主義、諸情勢の改善を望む健全なる樂觀主義……之は勞働奉仕制度の指導者が尙ほ持つ必要があるのである。

余は最初は私の最も重大なる仕事として、漸次他の問題と同樣に、任務に卽せる指導者型を高揚し單一的な指導者型を形成する事を主張したのである。之の指導者型は勞働者氣質、農民性、軍人精神の根元であり、意氣潑剌たる國家社會主義的觀念に包括されるものである。

勞働奉仕制度の指導者型の形成に當つて、偶然に委任せたり、放縱な權力の翻弄に委ねる可きでない。勞働奉仕制度

の最適の指導者は聲を大にして盲目滅法前方へ猪突する人の謂でない。吾人は勞働奉仕制度に於て勞働を通じてよい意味の競爭はするが、非同志的な自己榮達を計る可きでない。

故に規範的な事は組織的指導者の教育を施し、指導者の選擇に着手す可きである。第一年度には速印刷機式に教育し、大規模の淘汰は差控へ、年度が變れば、系統的、基本的教育を十三の指導者學校に於て着手、し細い篩にかけるのである。而して指導者の淘汰選擇は學校の成績に依る可きでなく、實踐の證明に重きを置く可き性質のものである事は贅言を要しない。指導者教育に際して先き立つものは實踐ある。かなり以前から勞働奉仕制度の指導者は相當長期間奉仕意思に基く生活關係を體驗し、尙ほ斧や鋤を扱ふ事の出來る人でなければ成らぬとの法則を實行して來たのである。

指導者の淘汰に際して其年齢の點に關しては組織第一期中は所定の年齢制限を低下或は高める事が出來、要は唯人間的な素質が決定的な標準を定むるものである可きを主張して來たのである。其の後期には年齢超過を豫防する爲めに個別的奉仕部門に年齢制限を高めて規定し、指導者に規則的な昇進段階を示す可きである。

斯くて組織の發展段階の後期には指導者は若き任意的奉仕から出發して、一定期間後指導者團其れ自體内に健全なる指導者の年限段階に代はるのである。

指導者及其の年齢制限に關する問題に就いて余は以下の事を云ひ得ると惟ふ。即ち均一を超越せる眞正の指導者と云ふものは或る固定した年齢制限に束縛さる可きものでないが、過去の歴史は二十三歳より七十歳迄の指導者があつた。

若し世人にして指導者の問題を論ずるに當つて異つた時代を混同たり、又は社會階層から徹廢した差別を再び年齢部門に復活する事は國家社會主義精神への反逆である。

吾人に課せられた諸任務にして膨大なるものならんか指導者は全的に有能適任者たるを要す。有能無能の限界は年齢の高低に存するのでなく、社會主義か利己主義か、理想主義者か、唯物主義者か、國家社會主義者か自由主義者か、革命思想家か素町人根情の俗物かにあるのである。已に老齢の人と雖も往時に國家社會主義運動に身を投じ、其

の前衞として、若き者の感激を喪はずに居るものが今尙ほ多く居るに拘らず、他の反面には今の青年にして自由主義的遺物の後塵を拜して居るものが多分にあるのである。

故に勞働奉仕制度の指導者に要求す可きものは全く同等な年齢——即ち數字的な年齢でなく、精神的な若さ——である。換言すれば生きた國家社會主義運動精神の把持者たる事である。而して己を信頼する青年を指導し得る事、所謂指導者は青年を理解し、青年が指導者を理解する事である。

吾人が本當に青年を理解し、且つ吾人自身の青年時代には如何なる感じを懷いたかを正しく追想する爲めには、吾人を信頼する青年を單に教育の對象として觀察するのでなく、青年の自己教育の協働者たらしむる事である。指導者や教師を通じての教育は同年輩同志の教育と並行する事に依つて始めて完璧を期せられる。

以上の事は勞働奉仕制度に就ても妥當する。

吾人は今の青年を生きた協働者たらしむる事、即ち國策的教育と自由世界の形成の伴侶たらしむる要す。吾人は此の意味に於て良く訓練されたヒツトラー青年團中から勞働奉仕制度助力者を選拔する。そして之の團員を其の同年齢同志を教育する協働者たらしめ、且つ同志の胸襟を開かしむるに手傳はせ、進んで吾人が言辭並に行動を以て教へんとする世界觀に達する樣にする。

一般に平等な勞働奉仕義務を實行する先行要件を爲すものは獨逸民族の精神的忍耐であり、何よりも獨逸青年が之の義務を甘受する事である。

余は之の精神的準備に就て已に一九三〇年確信を有した。余は獨逸青年たるものはランケマルクに於て武器を執りて突擊したと同樣に、斧や鋤を執つて獨逸民族の生活條件の安定を創る準備を整へて居る事を否定し得ない。

アルターマンは既に光輝ある先例を遺した。獨逸大學史は未來永劫に讃へらる特例を示したのである。即ち國家的强制を受けず、自ら進んで自發的勞働奉仕から發足して義務奉仕の進軍を開始した。

學生勞働奉仕隊の部屬に關する規定は現在の過渡期を反影せるものである。一般に平等する勞働奉仕義務の實施後は、勢ひ奉仕期間に關する限り大學生も尙ほ他の一般獨逸青年と同樣の條件に服するに至る可きである。一年制度を

再現さす可きでない。之は國家社會主義的理念と矛盾するものである。

前內閣の採用せる所謂卒業生の半年制は好ましき結果を齎さなかつた。時期が立てば勞働奉仕制度の內部的混亂と組織的轉化を惹起するであらう。學生を勞働陣營に關係させる事は彼等の期待に副ふものでなく、遂に非常な失望を喚び起すのである。故に次年度は本質的により良き情勢を誘致す可きである。而して吾人が勞働奉仕制度に就てなさんとするものは總て完成さる可きだと云ふ事を期待す可きでない。半年を以ては不可能事でなからうか！

獨逸學生勞働群！　彼等にして不完全さの上に搖りついて居るのは彼等自身に精神的に良く勝ち得ない事を意味する。

若し人にして生活の片隅に燻り、人間的未成品であり、人間調整の上に搖ら付くのは理想主義とは緣遠きものであり、反つて其を破壞するものである。

吾々老年の國家社會主義者は生活難や生活の動搖に抗して理想主義を守ると云ふ證據を失はない事を斷言する。

吾等自身を青年に結び付ける理想主義は吾人をして勞働奉仕制度の理念の壓倒的な生命力を精神的に深く信ぜしむる底のものであり、進んで之の理想の實現に倦ます努力せしむるものである。

吾等の體力と魂の全部を捧げて吾が民族に奉仕す可きである。蓋し其以外には之の非常時に生き永へる價値を持たないからである。

勞働奉仕制度に於ても理想への忠實と沒我のみがあらゆる偏見や妨害を排除して勝利を齎であらう。

——了——

勞働奉仕制度への道

ハ・クレツチユマン
フリツツ・エーデル

H. Kretzschmann
Fritz Edel
Der Weg zum Arbeitsdienst

目次

序　國家勞働指導者　奉仕書記長　ヒールル
第一章　勞働奉仕思想の發展段階
第二章　組　織
第三章　計　劃
第四章　移民——勞働感謝
第五章　婦人勞働奉仕
第六章　未來獨逸の先驅者

序に代へて

吾人は勞働奉仕義務の理念を戰ひ取らねばならない。蓋し、此の義務こそ國家社會主義の現象形態に過ぎぬからである。

一九三四年四月　國家勞働指導者兼勞働奉仕書記長
コンスタンテン・ヒールル

第一章　勞働奉仕思想の發展段階

勞働奉仕なる思想は、何も去年に始まつた事でない。既に近世に於て、民族の總力量を勞働に集中するの必要に迫られて居たのである。即ち、かの世界大戰中の救護奉仕條例は、其のまゝ勞働奉仕制度の先驅と看做される。然し乍

ら、此の救護奉仕なる思想は革命及世界大戰後の混亂時代の爲め完全に影を潜め、共和政府は此の思想を把握し再現せんとしなかつたのである。

吾人は一九一九年の春、除隊された軍人軍屬が再び前の農村に復歸し、總じて民族生活の一員を成したであらう事を想起する。陸軍中尉ロツスバハ氏やシュムーデ大尉の計畫せる移民試案即ち勞働共同社會の形式を採る方法も遂に實現を見ずに終つたのである。要するに此等の移民案は組織の困難と當時の政府の不徹底極まる支持と、あらゆる職業階層の人民を一律的に農民にする事の不可能事等々が原因となつて挫折したのである。之の領域に關する限り意思の足らざる處と經驗の乏しきものがあつたのである。同時に農業インフレーションの幻影は失業者を少能園にしか喰ひ止め得ないだらうとの懸念が伴つた。加之諸貢物及農業再建の爲めに借り入れた外資に對する利拂ひの重壓と稅金の故に亦もや失業群は數百萬を數ふるに至つたのである。かくて失業群の增大は登錄所の增加を惹起した。

茲に謂ふ登錄所とは失業群の集會所であり、それはあらゆる社會層の男女が、猶太人さへも加つて居たのである。

總ての獨逸人は彼我の區別なく長蛇の列を爲して扶助金を獲んとし、之が爲め登錄票には檢査符號を附するに至つたのである。登錄票は經濟的政治的沒落のシムボルと化した。

失業者に取りて時間の觀念等は全然喪はれ、工場から工場へ、事務所から事務所へと馳け廻つたのであるが、それも常に徒勞に歸したのである。かくして今や彼等は街路や廣場に徘徊し、カルタをいぢり、政策を論じ、遂に民衆の敵なる煽動家の手に委されたのであるが、それでも尙ほ誰も彼等の家庭に歸る事を强ひなかつたのである。——

「貧困と悲慘、それが勞働賃銀である……」

悲慘の最も甚しきものは住宅であつた。家賃の支拂どころの騷ぎでなかつた。失業者は卵子入箱や、梁板を拾ひ集めて自分で建てたバラックや假小屋にその家族と生活する樣に殘り、而も或る者は狹くむさぐるしい地下室か裏長屋に五人も或は其以上も固まり、大人も子供も狹苦しい場所に折重なつて寢起きせねばならなかつたのである。

而も斯樣な密集地域から彼等はまたも移動を餘儀なくされたのである。即ち、何かのキツカケにナゲナシの金で數坪の土地を賃借して、自ら彼等の原始的假住居を建て、二平方メートルの空地もあれば彼等の生活必需品、例へば馬鈴薯、野菜等々を作つて土地への愛着を見付けんと力めたのである。換言せば、根を絕たれたものが再び芽をふき始めたのである。それはたとへ多くの人々には明瞭に意識されなかつたにせよ、人間の土地に對する憧れであり、嘗て彼等の兩親や祖父母に伴はれて都市に來住した者が之を證明したに外ならない。

工業化の進展に伴ひ農村を離れるものが漸く繁くなつたのである。誰もが都會には安らかな、より良い生活が待つて居るかの樣に妄想した。さうして農村自體は農民の不足を告げるに至つたのである。波蘭土人が農業勞働者として獨逸に移住する樣に成り、國民經濟の支續は到底出來相に無かつたのである。若し資本主義的自由主義的な見地に立つ政治家が單に「低賃銀」なるが故に波蘭土から農業勞働者を獨逸國民經濟、農業經濟に必要としたとせば——亦事實左樣であつたのであるが、——　國家社會主義的見地からは農業經濟に關する異人種の農業勞働者は、獨逸國民生活の根源を害するものとして排擊されねばならない。

一面には失業と購買能力無き故に堆積せる商品が橫り、他の半面には勞働可能性と最も差し迫れる必需品があつたのである。

非難がましくなるが、しかし慥に或る時代に於ては、經濟と國家と國民とが相對立して、獨立にも、將又他と共同にも、以上の三者が相互依存の關係ある事、即ち組織的全體を爲す事を認めず、他の爲めに働く前に先づ自分が先に生きる事が行はれたのである。人々は公益が私益に先立つ事を忘れたのである。斯くの如きはひいて、都市と農村との對立となり、農民と勞働者、下級傭人と官吏とは相對立して各個の利益を主張する情勢を馴致した。自國の經濟狀態を全然顧みずに他國から生活手段や食料品を輸入し、土地自體は住民にとつて何等役立つことなきに至つたのである。

獨逸農林省の報告に據れば八百五十萬ヘクタールの平坦地があり、其れは殆んど濕地なるも、全獨逸整理地積の約三分の一に該當する。未整理沼澤地が百九十萬ヘクタール（ザクセンの農業用地の倍）及び荒蕪地百二十萬ヘクタール中約六十萬ヘクタールは農業に使用し得るのである。農業

用道路の築造と同時に耕地整理を行へば約五百萬ヘクタールは出來る。(即ち特に西部、南部獨逸に散在する土地を農業に適する樣に整理する事である。)洪水防止工作に百萬ヘクタール及堤防築造に依つて數十萬ヘクタールの土地を獲得し得る。斯くて新しき土地獲得と整理された耕地は吾が民族に食料を供給するであらう。

吾人は此等の未開墾の蹟から背負ひ切れない稅金と賃借料に苦しめられ、零落して、遂に消え失せて、もはや耕作する事の出來ぬ往昔の農民の所在地を屢々發見するのである。

若し吾人にして、我が人口と獨逸國家から生產される食料品供給能力とを考慮に入れる場合、(尤も此は今日迄の土地の全的利用を前提として)荒蕪地、沼澤地及不耕地を想起して「何等かの方法を以て失業者を此等の不耕地に結び付けられぬものだらうか?」との疑問に逢着するであらう。

而して此の問題たるやそのスタートに於て非常に混亂錯綜はあつたにもせよ、獨逸青年及國家社會主義者に依つて勞働を創造せんとする不撓の力の感情を喚び醒し、以て勞働奉仕制度なる固有の組織に到達したのである。故にアドルフ・ヒツトラーの與へたナチス綱領第十に於て次の如く高調して居る。「國民たるものゝ第一の義務は精神的にも將又肉體的にも何物かを創造するのでなければならぬ」と。

一九二四年のインフレーション政策に依つて經濟狀態は益々惡化し、失業者は數百萬を算し、獨逸青年は自己救濟の方法を講ぜねばならなくなつた。愈々自發的勞働奉仕者はアルターマン運動を起して波蘭土人の農業勞働者を壓迫し、且つ獨逸國土のスラヴ化を救はんとしたのである。然し乍ら先づ第一に獨逸青年をば鄕土に就て働かしむる事に因つて獨逸民族の力の根源となす事である。約言せばインドゲルマン的語源を有する「アルタム」なる言葉は、獨逸民族性の涸渴する事を知らない力を以て、進んで獨逸人の血統と太陽と土地と眞理を以て革新する事を意味するのである。

斯くしてアルターマン青年男女は土地に復り、農民の側で働き、それも初期には收穫の時のみ手傳つたのであるが、漸次國內農業植民に際しては最も有能適當な分子と成つたのである。土地に働く事に依つて、假令學生だらうが商

人であらうが將又勞働者、農民を問はず、之等の總ての者が同樣に全然同じく勞働する事に依つて共同社會の理念と同志觀念が芽生えて來たのである。

學生も勞働者も此の思想を體得し、共同に働く爲めの野營所を建てたのであるが、而も自分で職業を創ると云ふ獨逸青年の意思の表現たる此の運動も遂にマルクス主義的政府の支持を得ずに終つたのである。而して之の方向に向つて「勞働の義務」と「勞働上の權利」を要求する意思を缺いて居たのである。漸くにして各政治團體は之の要求を綱領に懸くるに至り、勞働野營所なる思想が日を追つて焦眉の問題となつたのである。

國家社會主義運動が勞働奉仕の思想を採用するに至つて、始めて正しき方向への發展を誘致し、理念にピツタリ合ふ意義を持たしめる事が出來たのである。國家は數年此方失業青年の事に關し頭を惱ます事なく、且青年達が自發的勞働に依つて國家及經濟を再建する爲めに盡す努力を支持しなかつたのである。——勞働義務を認むる事に依つて非常時を突破す可しとの國粹黨の提議は一蹴され、唯物論と理想主義とは尖銳な對立を示したのである。

即ち唯物論者は「資本は勞働を創る」と云ひ、之に對し理想主義者は「イヤ、勞働が資本を創る」と反駁した。

此の理想主義者の言葉はそのまゝ國家社會主義創造活動への變移點でもある。

勞働奉仕なる思想は其の構成要素として國家社會主義的意欲に歸す可きものなるが故に、その生成たるや組織國家のイニシアテイーブにあるのでなく、絕望的な失業の悲慘から拔け出樣とする健全なる獨逸青年自體に之を求む可きである。吾等の指導者、總理大臣アドルフ・ヒツトラーが國民に植え付けた勞働性は勞働奉仕制度に獨逸社會主義の偉大なる教育所即ち獨逸國民社會の教育所を發見したのである。「吾が獨逸青年に取りて社會的分裂を防ぎ階級的憎惡を淸算し階級的僭越を克服するには勞働者も學生も農民もサラリーマンも皆同じ着物を着同じ物を食つて民族と祖國の爲めに名譽奉仕をさせる以外に、より良い手段は存在しないのである。

之を吾等が指導者の言葉に從へば次の如くなる。「……總ての獨逸人を、 の貧富を問はず、學者の子弟たると工場勞働者の伜たるとを問はず、彼が誰であらうと一度は肉

體勞働を體驗せしめ以て容易に命令し得る樣に習得せしめる。と云ふのは彼は已に服從する事を學んだからである」と。

獨逸民族は失業と對蹠的な職業給與領域に於て戰ひ、獨逸青年は歡んで勞働奉仕制度の旗の下に集り、其の徽章と二穗ある鋤とは人民に「勞働は麵麭を創る」と云ふ烙印を押し付けたのである。勞働奉仕への意思は民族社會及獨逸社會主義への途として國家社會主義者に組織的政府の下に於てのみ可能なる方法を指示し、「自發的勞働奉仕制度」への途を敎へたのである。然乍、自發的勞働奉仕は何處迄も勞働奉仕義務樹立への準備過程として提示されたのである。之の事は獨逸勞働奉仕指導者、國家勞働指導者書記長ヒールル氏の基本的叙述に明記され「ヒールル大佐案」として有名なものであるが、最近「勞働奉仕義務制度への基礎問題」の表題を付けて單行本となつて現はれた。

（既出――譯者）

自發的勞働奉仕制度基礎工作の歷史的日時として吾人は一九三一年八月一日を記憶する。此は獨逸全國を四區に分ち一〇六名の自發的勞働奉仕者が發足したのである。吾人は本書第十四頁所揭の寫眞に見る如く國家社會主義勞働營舍として最初のものたるハムメルシュタイン營舍に於ける指導者訓練を行つたのである。此處には當時のミュンヘンのナチス指導者勞働奉仕隊敎官ヒールル氏が勞働奉仕の實際の經驗を蒐め、幹部候補を養成する爲めに赴任したのである。此の營舍は「自發的勞働者訓練所」なる名稱の下に開設された。蓋し當時の法律に從へば國家社會主義的營舍に國庫補助金を附與する事は不可能であつたからである。一年間の基礎工作を經て實踐的根底を創り出したのである。當時營舍構成に從事せる指導者の大半は國家的勞働奉仕制度の樞機に參劃して居る。又永久的國家はハムメルシュタインに於ける經驗に徵して一九三二年夏季に勞働奉仕制度を創設したのである。青年自體の要請に基いて生れた勞働奉仕制度は今や獨逸青年の精神化と忍耐性とに結び付いたのである。國防團員、青年團體、職業團體、スポーツ聯盟等々の青年は總じて活動的に成り、政府は勞働奉仕制度に關する努力を拒絕する事が出來なくなり、勞働奉仕制度を國家的任務と結び付ける爲めに何事か爲さゞるを得なくなつた。一九三一、二年には自發的勞働奉仕者に特定の根本命題を課する命令が制定された。「勞働の負擔者」としては自治體、都市、組合等とがあり、「勞働奉仕の負擔者」としては左右兩翼の勞働者を包括せる單一組織があり、且つストライキ反對者は保護されたのである。

之の命令規定が勞働奉仕の思想にその儘妥當しないと假定するも、即ち部分的に誤れる方向に進んで居るとしても勞働奉仕制度確立の爲め鬪ふて居る組織には絕えず活動能力を廣範圍に與ふ可きである。然乍夫々の組織體は各々異つた立場に立ち、且つ當時の政府は單に共通的な命令を制定したに過ぎない故に、勞働奉仕の目的　及國策的敎育は未だ統一されなかつたのである。

勞働奉仕は一部分は野外空地に於て遂行された。とは勞働者は自宅から每日勞働場所に通ふ事である。此に因つて勞働奉仕制度の國民敎育的任務は誤またれた特定の營舍に於ける勞働遂行の範圍は僅少なものであつた。即ち罷業反對者達が一定期間中奉仕營舍に收容され、全奉仕繼續期間を通じて滯在するのはホヽの夏季のみであつたのである。此處に於ては同志敎育及國民共同體の樹立が可能であつたし、其は主に國民社會主義的勞働奉仕營舍に現れたのである。さり乍ら全面的統一には至らなかつたのであるが、國家社會主義的政權獲得後始めて、自發的勞働奉仕の混合體に意義と目標が與へられた。ナチスの鬪爭、特に勞働奉仕制度の代表者、國家勞働指導者ヒールルの勞働奉仕制度遂行の爲めの鬪爭は殆んど完全に成功したタトへ國民社會主義者が勞働奉仕制度成立以來鬪はねばならなかつた困難なる問題が未だ殘つて居るにせよ。――次に國家勞働指導者書記長ヒールル氏の言葉を引用して之の章を結ばう、

「新しい偉大なる理想はあらゆる困難の世界にも打ち克つものである。或る事物にして人間に役立つものは鬪爭に於ては强者である」と。

第二章　組　織

一九二九年以來指導者（ヒツトラー）の信任を得第二組織部長に任ぜられ、所管勞働奉仕局に於ける準備工作を仕上げ、今や勞働奉仕制度組成の責任を負ふて勞働奉仕書記長に昇進したのは蓋し當然の歸結であらう。人間ヒールル氏の胸中では、正しき人間社會と云ふものを勞働奉仕制度の

尖端に立たせて居るが之は透徹せる思想と確信の賜物である。彼の掌中には膨大なる建設工作の全組織が與へられて居るのである、諸々の異組織から一つの統一的組織を創り出すことは、蓋し正當な事である。各異の勞働奉仕の負擔者を打つて一丸となし、勞働奉仕制度をして所與の命題を遂行せしむ可きである。此の勞働奉仕制度の新組織形成は勞働奉仕制度の全組織負擔者が同時に個別的負擔者である場合に終局を告げるのである。即ちベルリン、インヴアリード街九〇九一獨逸勞働奉仕團國家社會主義全國聯盟之れである。

此の全國奉仕負擔者は三十の區奉仕團に分れる。各區奉仕團は其れ自體獨立の登錄團體であり、いはゞ獨逸勞働奉仕團國家社會主義聯盟の組織部隊であるが、聯盟に對しても責任を負ふのである。

三十の區奉仕團は獨逸國民社會主義勞働黨の勞働奉仕團から形成され、其の活動領域は其の勞働區の範圍に限られ各勞働區に存する勞働奉仕營舍は勞働奉仕大隊に總括されるのである。

勞働奉仕制度は說明する迄もなく、國家社會主義的原理

即ち指導者原理に從ふて構成されたのである。勞働奉仕制度に於ける各個の指導者は自發的勞働奉仕者から選拔される。蓋し勞働奉仕制度に於ける指導者たるか又は之たらんとするものは誰しも必ず自發的勞働奉仕者として訓練されねばならぬからである。指導者に選拔されたものはポツダムの獨逸勞働奉仕制度國立學校及各地方學校に於て指導者としての任務に就て研究せねばならぬ。或る特定の勞働奉仕營舍に於けるストライキ反對者として採用されんが爲めには青年自身が各勞働區の志願係に申込むのである。而して總じて此の種の若き者は滿十七年以上二十五年未滿の者に限る。その場合總ての志願者が自己の經歷、人物を說明する事勿論である。志願の際に提出す可き書類はパス、失業登錄票又は警察の志願證明書或は戶籍、證明書乃至其他の書類にして以下列記の事項が確認されるものたるを要す。——

(1) 家名及姓名

(2) 生年月日及出生地

(3) 父母の名(既婚者は配偶者の名)

(4) 現住所

志願者中特に完全な書類を提出する事の不可能なる場合は家族又は知つた官吏に證明して貰ふ可きである。

割讓地方又は外國で生れた志願者は以上(1)乃至(4)所定事項以外に簡單なる自筆の履歷書を添へて申請す可きである。自發的勞働奉仕への編入は毎月十五日から翌日一日迄になさる。選任の決定は自發的勞働奉仕志願係主任之を爲す。

志願書類を審査し、身體檢査の結果、健康體で、勞働奉仕に堪える肉體的條件を具備せる場合に始めて、勞働奉仕營舍に收容するのである。自發的勞働奉仕者の志願書受理に當つて六ヶ月間繼續して奉仕(自發的勞働奉仕)するとの宣誓を爲さしめ、玆に秩序整然たる勞働奉仕に對する證明を爲さしむるのである。此の期間中、營舍に於ける自發的勞働奉仕者に毎日特定の費用(現在二、一四マルク)が支出され、其の中二五パーセントは勞働者にポケット・マニーとして與へ、爾餘は被服、住居、食料、諸設備、勞働用具の費用に充當される。

自發的勞働奉仕者はすべて最短期間半年間の繼續的勞働の後勞働パスを得るのであるが、之は祖國に對する名譽奉仕を爲せるに因つて完全なる國民と成れる事を證明するものである。故に此の勞働パスを所持する事は健全なる獨逸青年に取りて一つの道德的必然となるのであらう。蓋し國家、公共團體の役員になるにも、自由經濟人となるにも、將又試驗の免除を受くるにも必要であるからである。自發的勞働奉仕者は若干の所持品、洗濯用、瓦斯マントル、書籍、寫眞等を行李又はボール箱に詰め込んで、營舍に赴き其處で新生活の第一步を踏み出すのである。勞働者は多く旅費を節約せん爲めに勞働營舍に行くのに徒步か自轉車を利用するのである。而して志願係指導者に豫め申し出でれば各詰所の部屋を分けて貰へるのである。

中隊編入の際は自發的勞働奉仕者はすべて前線に於て握手を交す事に依つて鞏固にして神聖なる誓約を爲すのである——

『奉仕期間中は自己に割り當てられた地位に就いて國民社會主義國家建設工作に全力を盡す事。

指導者の命令に從順にして所與の任務を正確に最善の努力を以て遂行する事。

全獨逸勞働奉仕制度の從屬員は、民族及祖國に對し共同

の名譽奉仕を爲すものであり相互に忠實な同志となる事奉仕の內外を問はず品性と瑕疵無い實行に依つて、獨逸勞働奉仕制度の從屬員であり、其の衣服は名譽ある服裝たる事に威嚴を持たしめる事』

營舍は無人の空地にある建物で以前工場の空地であつたものか又は新しく建てたバラツク式營舍である。總て單純簡潔を旨とするも、其の目的に適應する設備を有す可きである。寢室には上下に重つて二ケの寢臺が置かれる。

此のベットは勞働奉仕者が造る場合が多い藁蒲團は順序よく重ね、覆ひは常にヨレ〳〵にしない事、即ち此が秩序と淸潔への教育である。分隊指導者を急遽召集する場合寢臺が規定通り無い場合は新しく荒造りにす可きである。そして次回に於てより良く直すのである。

仕事の場所は雨天の際勞働奉仕者の滯在する場所に役立つし、自由な時間には讀書したり、手紙を書いたり、衣服を整理するのである。亦此の場所は食事にも教練にも利用する、

新入の自發的勞働奉仕者が勞働奉仕營舍に於ける諸裝備即ち衣服、食器、被ひ物等々を受け取れば彼の勞働奉仕生活が始まるのである。彼は新しき規律を學ぶ、新同志と行動を共にし、其の同志と共に生活し働かねばならぬのであり、即ち營舍生活を始めるのである。斯くて「新兵」としての營舍共同體に於ける區分線は消えるのである。そして始めは誰しもツイ最前迄新兵と同樣な生活をした者であるが故に、最初の生活發足に際し援け合ふ可きである。家庭的秩序も理解する樣になる。蓋し一日を勞働、スポーツ、訓練と自由時間とで充されて居るからである。

「新入者」にして午後に制服を着用せるものはスポーツに參加する事が出來る。午後のスポーツは最初秩序訓練を爲し、其後一定の遊戯拳球、蹴球、メヂジンボール等の遊戯をなすのである。時には競走や橫棒體操や、自由教練、撞球、リング、拳闘其他變化に富む樣にする。之等總ては身體を回復し活動的ならしむるに役立ち、斯くて所要の勞働を爲し得るスポーツは所定の勞働に堪ふる肉體を準備し、都會人を事務所や工場から引き出して今迄とは全然異つた新しい仕事の訓練に置き換へるのである。同時にスポーツは偏面的な肉體勞働の故に歪曲せるものに均衡を與ふるに必要である。

世人の多くは自發的勞働奉仕者が何故に行軍せねばならぬか、而も何故に秩序整然と步調を合はして行軍せねばならぬかを理解しない。それは何も軍隊式の事を行ふ爲めでない單に共同社會への規律即ち秩序及訓練に過ぎぬのである。若し假りに自發的勞働奉仕者が支離散亂して烏合の卒の如く――世人の言葉を藉りれば――去勢された羊の如くさ迷ふものとしたら如何だらうか？　先づ隊伍整然たる列を爲す事は取りも直さず勞働と行爲に對する統一せる心的態度に外ならぬのである。而して身體鍛錬に加つて尙ほ訓練が必要である。蓋し勞働奉仕制度は青年を勞働に迄教育するのが唯一の任務でないからである。國家社會主義者はズツト以前から勞働奉仕制度に國民教育の課題を發見したのである。國民のあらゆる階層の青年を改造し、眞正の國民共同體に鍛え上げねばならぬ。而して其の爲めに國家社會主義世界觀を打ち込む可きであり、特に民衆の指導者、宣傳者、國民の總理アドルフ・ヒツトラーは十四年以來闘爭を續け、今も尙ほ實行しつゝあるのである。

勞働奉仕制度に於ける國民社會主義的教育は國家指導の方向に副ふて構成された。勞働區指導者は其の領域に闘し教育思想を山間僻地の營舍に迄普及する樣、且つ若き獨逸青年の統一的基礎形式が行はる樣、處置を講ぜねばならぬ。多くを知らす事は何も過多評價さる可きでなく、獨逸青年が國策を理解し、國民共同體に對する己が義務を知悉する樣にする事こそ尊ばる可きものである。何にもまして指導者の適材教育を通じて學徒の適材養成と選擇こそ緊要である。全勞働奉仕制度の目的は健全なる思想を盛つた獨逸人を創る事である。

國家學、民族學、種族問題、獨逸歷史、經濟政策、國家政策等に關する教育は、吾人は何故に勞働せねばならぬか又其の勞働は民族全體に取つて如何なる價値を有するものなのか、且つ總じて勞働とは如何なるものかを直接、間接に教ふる換言せば勞働は生活と同意語なる事即ち勞働は生命である事を教ふるのである。そして如何なる民族も勞働すればこそ生存せられ、かるが故に獨逸勞働奉仕制度には農民性、勞働者魂、軍隊精神から二十世紀の新しき人間を創造する偉大、强大な教育的任務が生成するのである。勞働奉仕制度の指導者は制度が彼に課した責務を完全に遂行し、吾等の國民總理の言葉「新國家建設の爲めの隅柱」を

彼自身體現するを要す。『勞働奉仕は輕微な仕事でない。また指導者の地位は最も艱難を伴ふものである。勞働者の地位は過去の功績に報ゆる報酬として授けらる可きものでない。且つ之の地位は祖國及運動の爲めに仕へた古き闘士の收容所でなく、勞務を强要する勞働場所であり、勞働の結末は其の成果を將來に期待す可きものである。之の觀點に立つ者のみに與へらるのである。勞働奉仕制度の指導者は瞬時も氣樂な生活を味ふ事は出來ぬ。希望が彼を手招きするでもなく富を蓄積するでなく、彼が理想主義者である場合、其の輝しき奉仕の內的滿足に甘んずるのである』――國家勞働書記長ヒールル――以上の高遠な任務を充足するものは勞働奉仕制度の理念に燃える人のみである。意思が勞働奉仕制度指導者を創るのでない。人格が指導者被指導者間の信賴の情と尊敬の念を創るのである。卽ち人を、獨逸人たる兄弟を　全的に抱擁する事こそ最も肯綮に當るのである。單に奉仕計劃に從順に自己の義務を果すのみにては未だ完全な勞働奉仕制度の指導者の器でない。勞働奉仕制度を眞に其の運動の尖端に迄導き得るものは感情と社會改造の意思を有する指導者である。

今日最も優秀な獨逸青年は勞働奉仕制度に集つて居る。吾人は其の中から指導者を養成する樣配慮す可きである。玆に國家勞働指導者、國家書記長ヒールル氏の言葉を引用しよう。

『指導者は一介の使ひであり、活動領域に於て他と融合する。特に彼は最も熱烈な義務遂行者であるが、其は部下を督勵するのみでなく、彼自身模範を示すに汲々たるものである。眞の指導者は自己の意思を强行する力を有するを以ては未だ足らず、被指導者に對　に人情を以てする事であるかるが故に勞働奉仕制度の指導者は其の權力行使に情味を添へる可きである。蓋し指導者は國民を敎育する者であり、獨逸社會主義の敎育者卽ち眞正の獨逸の民族共同體の師表たるを要するが故である』

指導者の詮衡は勞働奉仕の實踐に徵して爲され、選拔者はボツツダム獨逸勞働奉仕制度國立學校又は特殊の敎程に關しては特殊の地方學校に於て勞働奉仕制度の指導者任務を修得するのである。此の敎程及其れ相應の實踐は、指導者に選任された者が其の實際行動に於て指導者たる天分を有するか告かを表示するであらう。斯くする事に因つて、

指導者學校にては肉體的堪能、同志愛、精神的訓練を經て指導者、幕僚を養成するが、此は以前は勞働奉仕制度の任務としては閑却され通しだつたのが、今や此の命題實現は指導者の意義を民族及祖國の幸福に對する保證たらしむるに至つたのである。

× ×

一九三三年九月一日實施された勞働奉仕制度從事員の統一的服裝は自發的奉仕者の結合を上下に分ち、國家再建工作に於ける新しき意義を闡明したものである。自發的奉仕者の帽子は古代上部獨逸の農民頭巾所謂スペツサル帽を被つたが其生地、截斷、色合は雜色の土色の布である。上衣は非常に着心地良い付け襟のスポーツ　型である。階級の肩章徽章は次の圖表に示す通りである。

第三章　計　劃

勞働奉仕制度の始まるや獨逸國は移民の領域に新世紀を劃するに至つたのである。フリードリツヒ大王は其の在位時代に其の兵隊を安全に職に就かしめ、人煙稀薄なる農村に住民を招致する爲めに偉大なる內國植民事業を斷行した。其れ以後土地改良事業は大規模に行はれずに過ぎた。此が因を爲して居るせいでなく、而も土地改良事業の必要は尙ほ吾人の眼前に迫つて居る。蓋し其れが原因でないと云ふのは土地改良事業はもはやサボドの餘地を殘して居らないのであり、吾人の目的とする所は他に存するからである。而して眼前の土地改良事業は彼のフリードリツヒ大王以來今日に至る迄の漸增的事業の延長である。獨逸國內に可能なる土地改良事業は農產物生產額を年に二十億マルク迄に高める事が出來やう。土地改良事業に利用されざる勞働力はあり餘つて居る。而も獨逸政府は國內にある膨大な勞働を閑却し、且つ農產物輸出及工業政策に其の主力を注ぎ乍ら、國內の土地勞働が存在する事に思ひ及ばなかつたのである。故に今やフリードリツヒ大王の着手せる事業を繼承擴大し、吾等の祖先が忽儲に付せるものを補塡するを要するや蓋し至當の事である。

既に上來說述せるが如く荒廢地や沼澤があり、且つ海に切斷された大陸の一部及ブランデンブルグ州の廣大な休耕地があつたし、其れに勞働給付の可能性も存在したのは事

實である。勞働者は不完全な勞働を爲せるが故に犧牲を强要された。而して亦各個人は此の勞働に從事しなかつたのである。若し各人に土地を與へ「サアー玆に土地をやるから働いて其の收益を以て生きて行け」と語つたとすれば其れは恐らく無意味であつたであらう。其に先行するもの卽ち計劃が必要である。理想主義者であり、勞働する事の歡喜を味へる人にして、始めて不必要な土地を國民經濟に役立つ土地を創造する仕事に編入される其の際個人は後であり、第一に全體を援助する。其の後勞働が各個人に役立つ玆に於て始めて次の言葉の意味が生きて來る「公益は私益に先行す」と。

此について各個人の勞働命題を提示し、完全な計劃と組織を終へ、勞働營舍を建設し、任務遂行の前提なる人間、青年を送り込む事である。

以上の準備がつ成た曉に始めて勞働に着手する。卽ち土地との鬪爭が始まる。鋤との鬪ひ。鋤の使用は正確に。人間が勞働遂行に利用するあらゆる勞働用具と等しく間違なく。勞働道具の正しき使用は歡びを伴ふが、誤れる使ひ方は苦痛を喚び起すのである。

而して自發的奉仕者に勞働用具や鋤の正しい扱ひ方を敎へる必要がある。以下の表に示す所は國定敎程にて試驗すみの勞働方法である。

準備が終れば自發的奉仕者は鋤を擔ぎ、隊伍整然と、朗かに歌ひつゝ、勞働現場に進軍するのである。鋤のひと突きは自發的勞働奉仕者が祭禮的祝典を擧げる瞬間である。蓋し土に鋤を降す事は食糧獲得及第三帝國建設の第一歩を踏み出すに外ならぬからである。若し十年も前に勞働奉仕制度にホンの經過的な援助を與へたと假定しても、失業の危機は旣に除去されたであらう。國粹社會主義者は其の當時から勞働奉仕制度がより高き意味を持つであらう事に思ひ付いたのである。

『勞働奉仕義務なる理念は恐らく新しき時代精神の特徵的な表現である。此の新時代精神は其の意欲、勞働概念の把握及土地への結合と云ふ點に於て過去の猶太主義、マルクス主義精神の烙印を押された沒落的自由主義的な時代精神と對蹠的な運動の勃發に外ならぬものある。勞働は生活の內容であり、勞働の內に鬪爭の兄妹を見出すのである。勞働及生活鬪爭なき存在は陰鬱な病室に過ぎない。』

自由主義的見解は個人に有利なるものは價値あるものとされたが、吾人は勞働が民族共同體に對し價値あるが故に之を尊しとするのである。

勞働奉仕制度の目的とする處は職業を給與こそすれ、決して仕事を剝奪するのではない。換言せば勞働奉仕制度には競爭は有り得ない。經濟的危機の或る時代には勞働奉仕制度が自由經濟の領域を排除するかの如き漠然たる疑懼の念に襲はれたのである。恐らく勞働奉仕制度は自由經濟が過去に於て企て得なかつた「附加的勞働」を遂行した。而して此の附加的勞働は私經濟的利得の原則に依らず、國民經濟的價値の點から評價さる可きである。

附加的勞働は未來に其の業蹟を遺す。例へば新開墾地の如き其の一例であるが、國民經濟的價値は槪ね數年乃至數十年後に明瞭となる。同時に勞働奉仕制度に於ても技術勞働にも自由經濟にも仕事を創り與ふ可きである。卽ち諸裝置資料、住宅、諸設備及生活資料等々の生產勞働を起す事である。特殊勞働に對して勞働奉仕制度は其の準備工作を施し、技術勞働者の招致及機械の設備を爲すのである。斯くて勞働奉仕制度から技術勞働者及自由經濟に關する勞働が發展する。而して勞働奉仕制度自體の爲す勞働には不熟練勞働者の爲し得る仕事を遂行する。要するに斯かる勞働は國家の補助を受くる保障の下に於てのみ可能であり、其の際の勞働負擔者は自治體、市町村聯合、公共團體である。そして國家は完全な監督權を保有するが故に、秩序整然たる計劃遂行に對する保障が與へらる譯である。

不熟練勞働者の勞働分野は土地勞働である。排水工事に依る耕作地開墾は之に屬す。約八百五十萬ヘクタールの土地が堰止められた濕度に惱まされ通しである。それで此等の土地は越冬穀物や酸性の牧草類似の草木の爲めに殆んど收益の乏しいものになつた。

且つ今迄何等の收益を齎さなかつた土地でも、灌漑を施す事に因つて良き收獲を得、少くとも開墾事業の賃銀は得られるであらう。現在の獨逸の耕地は夫々濕度を異にするが故に、以上の勞働奉仕の寫眞に見る如く灌漑工業と並んで排水設備を要するのである。殆んど二百萬ヘクタールの沼澤地が整理に迫られて居る。假りに獨逸と和蘭との國境地方にあるエムスランドを例にとつて見ても、國境の北方

は何キロメートルとなく見渡す限り沼澤であり、濕地の儘放置され、セイ〳〵泥炭採掘小屋や少數の移民が此の廣大なる地方に水浸りに成つて居るのに、一度眼を轉じて國境の彼方和蘭に及ぶ時、其處には繁榮せる野菜、穀物耕地が横はり、豊饒なる收益を樂んで居るのである。茲に於て吾人は數十萬の同胞を此の沼澤地帶に移住せしむ可き膨大な任務が待つて居る事に思ひを致すであらう。而も此の地方たるや土地それ自體さへ未だ整理されてないのである。斯くて勞働奉仕制度の任務たるや以上の寫眞の示す如く吾人に解決を要求して居る。

獨逸國内の農業地として尚ほ六十萬ヘクタール以上を利用し得る。故に自發的勞働奉仕者を國家の計劃的補助を得て之の地方に移住せしむれば、數年を出でずして幾千の勞働力が集結し、現在の沼澤地や荒野は耕作地となり、農民經濟に價値あるものとなり、青年農民に取りて移住地と化し、民族の食糧問題解決に役立つであらう。前奏曲は既に奏せられつゝある。自發的勞働奉仕の第二の段階は堤防築造工事である。毎年洪水の氾濫に因る損害は殆んど二億マルクに上つて居る。平年の浸水地方は約百萬ヘクタールで

災害の甚しき時は二三百萬ヘクタールに增大する。收穫物が無駄になる許りでなく、獸疫が瀰漫し、溢水する性の河川に沿ふた廣大な土地が全然役に立たなくなる。河川調整及築堤事業を最も廣範圍に行ふ必要の存する所以である。而して此の事業たるや其の必要急にして、個人企業乃至賃銀勞働者を以てするの方法は存在せざるが故に、勞働奉仕制度の一般的事業として編成遂行するのである。蓋し此の事業たるや、其の完成と結果を將來に期待す可きものなるに因る。同時に國粹社會主義の重要な任務として新耕作地獲得を擧げる。十數年の繼續的事業に因つて海中に浸り切り放された土地を再び陸地とする事が出來る。辛苦を忍んで繼續すれば或る土地を堤防で圍ひ得る許りでなく泥土を化して美田と爲すのである。獨逸東海岸の諸湖を堤防築造に依つて海洋から遮斷する事も亦國粹社會主義者に課せられた任務たるに外ならない。此の工事の結果、約百五十萬ヘクタールの新耕地を獲得し得る。大戰と之に次でヴェルサイユ條約は數百萬ヘクタールの國土を剝奪した。之が補塡の爲めの國土回復、之は十數年來の重大なる使命の一であり、之の使命を果すに勞働奉仕制度が關與す可きである。

土地開拓に伴ふ街路、道路建設が必要である。自動車交通時代の今日完全な通路たるを要するに拘はらず、十數年此の方街路及道路整理開設は却つて後退を續けて居る。故に此の事業を補足し一日も速く自動車道路開設に着手す可きである。道路開設には地齊し工事及石塊破壞等の準備工作をも含む。繰返して力說せる如く勞働奉仕制度の實施に因つて企業家や技術勞働者から工事を取り上げる可きでなく、仕事を創り與へるのである。而して廣範圍に亘る準備工作を正規な勞働を以て遂行する手段が存在せざるが故に全國民經濟に有益なる之の種の勞働は勞働奉仕制度に編入されるのである。

本書の寫眞の示す如く勞働奉仕制度に於て地ならし工事はスタートを切つて居る。土壤の置換卽ち土壤の削り取りと埋め合せとが着手され、山地を切り開き、濕地は固めらる……等々。

道路開鑿の準備工作を了へた曉は技術勞働者の登場となる。彼の新しき活動領域が展開する。かくて勞働奉仕制度は繼續的建築勞働者及失業勞働者の減少を要請する。

さり乍ら耕作地及新開拓地がすべて農業に適するのでなく、大部分は植林にしか使用出來ぬものがある。故に植林事業も問題となる。

以前リューネブルヒ荒野の如きはサラ〳〵音のする櫛の森であつたのが、海岸地方から來た移民達が生えるが早いか切り採つたのである。濫伐が行はれたが、今や此等の森林を作る必要にある。

獨逸國の地方山村は方々洪水を防ぐ爲め廣大な植林を要求して居り、此の獨逸森林經濟の領域に活動す可き森林勞働者の任務は重大である。現在の處、木材輸入量は本國の木材製作品の二二五パーセントを占めて居る。此の輸入額は繼續的植林を行へば、獨逸の氣候風土には成長しない特殊材木の不可避的輸入高約九二パーセントに引き下げられる。農林省建設の後に來る問題は植林事業である。

百萬ヘクタール	低部耕作地
八十萬ヘクタール	荒蕪地
二十萬ヘクタール	林害地方
十萬ヘクタール	禿地
十萬ヘクタール	櫛切取地及伐採區域

一（クタールは約一町廿五分に當る（辭書摘載）

斯かる植林勞働に因る經濟更生計劃は植付費用のみで四十四億マルクを計上する。植林事業は獨逸森林に經濟的效用を與ふる材木運搬道路と密接な關係に立つ。農林大臣ヴアルター・ダーレー氏の植林計劃に從へば、森林地帶の約二十パーセントの增加を示し、木材生產の增加地積は約六百五十萬立方米突に達す。

尙ほ獨逸產材木の質を高めるに絕對に必要な分枝勞働を降霜期に勞働奉仕制度の補充勞働として、遂行す可き事を閑却す可きでない。而して此の種の分枝勞働は獨逸森林經濟に缺けて居り、材木は少い故に外國品を唯一の頼りとして居る。

旣に勞働奉仕制度の土地計劃に關して述べた處と關聯して耕地整理の重大なる任務を玆に指摘せねばならぬ。數百年來獨逸農民家庭內に於ける子孫間の土地の分割及相續、婚姻に因る土地分割の結果は各個人はホンの一瞬時同一耕作田地に屬し、全體の所有からすれば收益を生ずる管理を却つて難ならしめ、高き失費を生むか或は管理を不能ならしめたのである。故にナチス政府の綱領には全農民にとりて死活問題であり、重大な意義を有する此の問題に付き、個人及民族全體に有利に土地の再分割を行ふ可き事を認めた。特殊の整理方法に從ふて此等の課稅田地を交換し、より良い强度の、低廉な現存土地の管理を行ふを要するのである。農民個人は此の土地の再分割に對する權利を有するも、、誰れしも吾等の新しい國家原理「私益より先に公益」を守る可きものとせらる。此の重大困難なる問題にも勞働奉仕制度は測量、分割、道路開設等々を通じて寄與するものである。如何なる勞働も將來に其の成果を齎すであらう。

第四章　移民—勞働感謝

旣にアルターマン運動に於て、自發的勞働奉仕及有能な青年勞働者訓練の方法に因り農業植民を企てし如く、國粹社會主義的勞働奉仕制度も亦移民を計劃せねばならぬ。

「植民」なる言葉は都市近隣への植民乃至農業植民を意味し、且つ其以外の何物でもない。都市近隣への植民は大都市密集を緩和し、同時に都市と農村との結合を促進す。そして有能な工場勞働者を庭園勞働に從事させ、園藝、食料品、果物、馬鈴薯栽培、時たま家畜飼育其他類似の方法を講じ、以て生活手段の補充を敎ふ。

男子奉仕員が郊外の少植民及新都市建設に共働する場合其の活動範圍は地上勞働（排水工事、道路開設、礎石建築坑埋め合せ）に限らる。近郊の小植民の際勞働奉仕制度が特に顧慮す可き點は、小植民に依り行はる勞働者を官署にて檢査して承諾を與ふる事である。戰後各自治團體が行ふた無定見極まる植民活動の如きは無條件に拒否さるゝは當然である。卽ち大都市に空間的延長があるからとて廣大な近郊へ植民して愈々都市の膨脹を來すが如きは合理的でない。近郊は新しく根を下す小都市であり、若干の工業及手工業の起れる親しみの持てる小都市を建設する。斯くてこそ健全なる生活根據地を創る事となり、前の政府が獨逸國民に押し付けた大都市の無茶な膨脹を排除する事となるのである。

「農業植民」は農業勞働者家庭及其第二、第三世の爲めに考慮されたのである。農民の遺產分割は之を出來得る限り避ける可きであるが、同時に農民の子弟は土地を粗末に取扱つてはならない。農民の內部に臟せる力量を都市に捧げずして、民族維持、更生に役立たせる事、卽ち血統、種族保健、人口政策に使用す可きである。

農業植民に際して勞働奉仕制度の所管に屬するものは土地改良、道路開設、大規模の土壤運搬工事の管理等である。手傳人夫の仕事の如きは勞働奉仕制度に於ては未だ問題視して居らない。蓋し是等の仕事を訓練監督を受くる大部隊に編入する事は不可能であるからである。

勞働奉仕制度が生產階級に對して農業用土地の效驗を誘導する如き提議を爲すの域には未だ達して居らぬ。而して土壤の石灰及酸含有量を規定するのは地質檢査であり、之は有效な生產物を得んとして所要の附加物を土壤の脫酸と並び行ふのである。勞働の負擔者たる農民への要求は、之の地質檢査に際しては特殊の技術員の指導の下に必要な役割を演ずる或る一定の營舍中の特殊部隊に對してである。

土質改良、排水、灌漑等々旣述の勞働は國內植民に必要なる土地供與の準備工作に過ぎない。同時に植民者の訓練を要す。卽ち植民學校を建設し、將來の移民を其の各種の

勞働部門に亘り教育、訓練せねばならぬのである。此處は勞働奉仕制度の排水口組織即ち勞働の報酬と密接な關係を有するもので、勞働奉仕制度から離脱する自發的奉仕者を營業、職業への移送を準備する處である。

第五章　婦人勞働奉仕

男子の勞働奉仕と並行して　女子勞働奉仕が重要なる役割を演ず。

男子が主として地質改良、灌漑、排水工事を通して土地を開墾する間に、婦人は特に植民事業に携はるのである。

婦人勞働奉仕部門として擧げらるゝものは、食料品、果物栽培、家畜飼育、牛乳製造業等である。此の外に純粹農業及園藝勞働も家庭に止まつて、子供の世話をし乍ら爲し得るのである。婦人勞働奉仕の目的とする處は娘子軍を家政的、農業的職業に接近せしめ、彼女等を元の固有の婦人勞働部門に喚び返し、且つ農業に從事する事に依つて農業勞働の價値を認識せしめ、之に敬意を拂ふ樣に成り、進んで都市と農村との結合を齎す事に存する。斯く重要な仕事を爲しつゝ農村の單純な、健全な生活を營む事　――即ち農業勞働の五十パーセントを女子をして遂行せしむる事――女子を深大な國民經濟及國家政策を理解する婦人、母性たらしむるであらう。

國民經濟的に視た價値は、婦人勞働奉仕が移民を援ける事に依る植民政策の要求に存するのであるが、二次的には女性を次代の母、娘子移民軍を準備する事であり、進んで子女の教育及家政、園藝勞働を仕込む事である。獨逸婦人勞働奉仕の指導の任は、ナチス勞働奉仕代表者、國家書記長ヒールル氏と獨逸婦人勞働指導者ショルツクリニツク夫人との共同負擔に屬するも、ショルツクリニツク夫人は全獨逸の子女の勞働奉仕に對し責任を持つ國家勞働指導者であり、彼女の特殊な才能を認め獨逸婦人勞働奉仕　指導者に任ぜられたのである。謂ふ迄もなく婦人勞働奉仕は國粹社會主義的勞働奉仕總體の一部分であるが、兩性間の相異があるにも拘はらず、共通的な世界觀の上に立てるが故に統一的全體として結合されるのである。

各地區の前衞として地區指導者が存在するが、彼女等は婦人勞働奉仕指導者がナチス勞働奉仕代表者と一致して任

命するのである。代表者は勞働奉仕の國家指導部に屬する彼の代理人を通じて、婦人勞働奉仕に權利を行使する。

獨逸婦人勞働奉仕は獨逸勞働奉仕團全國聯盟に屬しナチス勞働奉仕制度國家代表、書記長ヒールル氏の監督に服す。要するに婦人勞働奉仕を無數の職業的、宗教的乃至個別的な婦人團體に委託す可きでなく、國家社會主義的特殊聯盟の手に一任し、以て詰所、給食、衣服給與並に肉體的精神的、道義的な諸事象に關して自發的勞働奉仕女子を保護、誘掖するのである。勞働從業員の選任及、常に女子の肉體的、精神的能力如何及教育程度は地域的事情に因る。簡言せば婦人勞働奉仕は男子勞働奉仕の補塡であり、國家社會主義的建設に於ける新世紀を創る責務を帶びるものである。

第六章　未來獨逸の先驅者

以上說述せる如き勞働奉仕制度の總括的活動は特殊な移民、農民學校と協力する事に依つて都市から農村への轉移復歸の準備工作である。

既に實行に着手せられたのであるが、郊外及農村への移民を開始する曉は男子移民と並びて、婦人移民は土地及農業に對する過去の勞働經驗を以て彼等手づからの勞働に依つて生活資料を得生活の內容を豐富ならしむるであらう。

往年吾々の祖先は安易な生活を求めて都市へ徨ひ出たのであるが、今や我々は我等の祖先が嘗て苦勞した生れ故鄉へ再び復るのである。農村への移動なき都市は遏かれ早かれ衰滅を免れない。然乍農村の繁榮を計るならば農村は人口の稠密と健全な發達を遂げるであらう。そして都會の住民は何等かの形式に於て農村との結合を維持し、自己の滅亡を避けんが爲めには、生れ故鄉から生新な力を借りなければならぬ。此が卽ち植民の趣旨とする處である。

・フリードリッヒ大王時代に始めて植民に着手し、內國移民が行はれたが、それも行詰り、今や我等の總理アドルフヒツトラーの下に民族の强化と食糧品の自給とを獨逸民族に齎す內國移民を開始したのである。

民族生活の改造及覺醒への途に他ならぬ都市近郊の植民は都市から農村への架橋工事であり、農業移民は健全な農民階級の制定維持である。我等の指導者アドルフ・ヒツト

ラーの言葉に從へば全國民の基礎であり、表現し切れぬ程の寶である。指導者は叫ぶ、

『健全なる農民階級を維持確保する事は、社會的諸病源及我が民族の種族的沒落に對する最善の防衛である。』

獨逸勞働奉仕制度確立に對する、種々雜多な根據に立てる國外から我が民族結合體への迫害妨害、及指導者の言明せる如く勞働奉仕義務の制定實施に關する故障を、現在尙ほ頻りに唱へる者もあるが、而も勞働奉仕制度の目指す目標並に其の唯一の可能性は、何はともあれ、勞働奉仕義務あるのみである。

國家勞働指導者、國家書記長ヒールル氏の言明を引用しよう——

「惟ふに國民全體が國家に對して一年間の勞働奉仕を爲す義務を負擔し、此の勞働奉仕を通じて秩序と訓練及勞働への敎育を施す事を否定すれば、對聽的な二階級が成立し其の一は勞働奉仕を經て自ら活潑な勞働力を有するものとなり、他の一は惰怠と懦弱に溺れる結果となるであらう。そして斯かる狀態の續く限り、勞働奉仕制度は國民敎育的任務及眞正な民族共同體を創る事は不可能であり、勞働奉仕制度は跛行的なものとなるであらう。』

吾人が上揭（省略）の圖表に示す如く、自發的奉仕者が一九三三年七月現在二十六萬三千人に達し、之等の者に依つて遂行された勞働量並に勞働及勞働可能性に觀點を集中すれば、其の勞働結果の膨大なる事、進んで國家社會主義には重要な任務が課せられて居り、是等は勞働奉仕制度の援助を得て解決せらる可きを確信するであらう。一九三三年五月一日我等の總理が勞働奉仕義務を宣言せる時、既に彼は其の任務の重大さを明瞭完全に認識して居たのである。アドルフ・ヒツトラーは勞働奉仕制度に於て第三帝國建設の礎石支柱を認め、民族を民族共同體及勞働への道即ち民族の再興の姿を發見したのである。それには先づ麵麭の自由を得て以て內的外的自由を獲得する可能性を國民に與ふ可きである。獨逸民族麵麭の自由獲得鬪爭は獨逸民族共同體成員の義務である。彼が實踐を以て勞働奉仕に參加すると、文書、言語を以て支持すると、將又現在の地位の儘勞働奉仕思想の爲め協同するとを問はず、之等すべての行動は獨逸經濟及第三帝國建設工作實況に他ならない。民族共同體成員は誰しも常に自發的奉仕員が獨逸國再建の爲めの、又民族生活及祖國の爲めの前衞である事を認識し、進んで國粹社會主義的世界觀の意義に於ける新しき民族共同體形成の爲めにも人後に落ちるものでない事を確信す可きである。

勞働奉仕制度とは何ぞや

——何を爲す可きか——

ブランデンブルグ・ミユラー

Müller—Brandenburg

Was ist Arbeitsdienst?——Was soll er?——

卷頭言

勞働奉仕とは國內及對外的平和の活動であり、最高の文化事業で而も歷史的一新時代の精神的表現である。

コンスタンテイン・ヒールル

緒言

一般世間が、勞働奉仕なるものに對して提出する多くの疑問の解答が本著に於て見出されない場合には、勞働奉仕は猶挽近の設備にかゝはり、その決定的形態は、實際の經驗と組織上の發展を通じて始めて見出し得るものであることを、念頭に置かれたい。目下現在して居て、恐らく數ケ月以後に於ては、既に經驗に追越されたものとして除去される事物に關して、報告を爲すことは無駄なことである。

此の際肝要なのは、廣く世間に對して、事物の原則を一

覽に供することであつた。余は此の點幾分なりとも成功して居やうことを望む。余は又出來るだけ多く樞要の地位にある人々の發言を得て、說明機關としての本著の特性を明かにするに努めた。

余の協力者にして兼ねて勞働奉仕國家指導の說明及印刷局に於ける報告者バアイントカ及ドクトル、ユトナツク兩氏の御援助に對して今此處に謝意を述べる。

シヤルロツテンブルク

一九三三年九月　　ブランデンブルク・ミユラート

目次

卷頭言　　ヒールル書記長

緒言

一、勞働奉仕制度の任務

二、勞働奉仕制度の先驅者

三、ヴエルサイユ

四、勞働奉仕制度の國民經濟的課題

五、獨逸勞働奉仕制度の市民的特色に就て

六、勞働奉仕制度の教育的課題

結語

附　ドクトル、シユテルレヒト氏の演說

一九三三年ニユールンベルヒに於ける獨逸國粹社會主義勞働黨大會にて爲せる退役陸軍大佐ヒールル書記長の講演　前出「勞働奉仕の精神」

1、勞働奉仕制度の任務

勞働奉仕の意義を完全に理解する爲には指導者たる宰相アードルフ・ヒツトラーが、一九三三年五月一日、テンペルホーフ廣場に於て爲せる演說を想起しなければならない。指導者は其の場所で、次の如く宣言した。

「幾百萬の人間、諸々の職業に區分され、諸々の人爲的階級に隔離され、身分上の自負と階級上の妄想に襲はれたる結果、お互に最早理解することが出來ない幾百萬の人間、彼等は、再び相互に通ずる路を見出さなければならない！是はとてつもない難題である。――吾人は百も承知して居る。七十年通じて、此の妄想が政治的意見として代表され說かれたが如き場合には、又、七十年の長きに亘つて、國民團結の破壞が政治的戒律であつたが如き場合には、一擧にして人心を向けなほさんとすることは、困難である。それにも拘らず、吾人は逡巡し、絕望してはいけない。人の手が築いたところのものは、人の手が壞つことが出來る。人の妄想が曾つて案出したところのものは、賢明なる洞察に依つて再び克服することが出來るのである。

吾人は、此の相互の接近及接觸の過程が、週間や月々、實にまた數箇年の問題ではあり得ないことを知つて居る。併しながら、吾人は獨逸史に對する此の大なる課題を充たさんとする確乎たる意志を有し、獨逸人を再び相互に接近せしめ必要あらば、彼等を强制するだけの決心を有するものである、……最後に、此の日に當つて、將來に亘る此の結束を、一つの行爲に依つて、表明しなければならない。曾つて、吾人が、勞働奉仕義務なる思想を公衆に傳へた時、今や瀕死の狀態にあるマルキスト界の代表者等は、一大喚聲を發し、次の如く宣言した。「無產階級に對する新な攻擊だ勞働に對する攻擊だ、勞働者の生活に對する攻擊だ」と。何故に彼等は此の擧に出たのか。彼等は、間違ひもなく、是が勞働に對する攻擊でもなければ、よもや又勞働者に對する攻擊でもなく、唯、驚く可き偏見、卽ち、肉體勞働を卑賤なりとす偏見に對する攻擊にすぎないことを知つて居るのだ。獨逸國內に於て、吾人は此の偏見を撲滅せんとするのである。吾等の間に幾百萬の人間が、肉體的勞働の意義を理解することなく生存して居る一時代に於て勞働奉仕を通じて、獨逸國民を敎育し、次の認識に至らしめんとするのである。卽ち、肉體勞働は、人を辱めず、名譽を毀損せず、否寧ろ、あらゆる餘の活動と等しく、誠實を以て遂行する者にとりては、名譽に非ずして何ぞやとの認識に至らしめんとするのである。

假令、誰であらうと、富めるも貧しきも、學者の倖も工場勞働者の倖も、兎に角凡べての獨逸人を其の生涯に於て一度肉體勞働に從事せしめ、以て肉體勞働の何たるかを識らしめ、斯くして旣に親しく服從を學びたるが故に、他日人に命令することを容易ならしめんとするのが、吾人の動かす可からざる覺悟たるに變りはない。吾人は、唯表面上マルクス主義を除去しようと考へて居るに非ず。マルクス主義から其の前提を拔き去ることこそ吾等の決心である。吾等は吾等の後に來る世代をして、マルクス主義の精神的混亂から免れしめんと欲するのである。

精神勞働と肉體勞働とは、決して對蹠的關係にあつてはいけない。其故に、吾等は、各箇人がまことに陷り易く、「唯」螺旋棒に、機械の側に、或は犂の後に、立つて居るに「過ぎない」仲間を、頭から見下すことを敎へる彼の高慢なる心を撲滅する併しながら、唯に、各獨逸人が此の種類の勞働を一度識らねばならぬと云ふだけではない。更に逆に云つて、肉體勞働者は、精神勞働も亦必要であることを知らなければならない。何人も他人を見下し、自分をより良きものと自負する權利を有せず、各人は、常に偉大なる結束への覺悟を有して居ねばならぬことを、肉體勞働者にも亦闡明ならしめねばならぬ」

以上の言葉を以て、勞働者であり宰相たる彼は、獨逸勞働奉仕に、方針と實踐法則を與へた譯である。吾等は以下の頁に於て、獨逸勞働奉仕は、此の法則を遵守するに努めて居ることを證明するであらう。

一九三二年五月二十三日、當時の、NSDAP代表、今日の勞働奉仕書記長たるヒールル大佐は「勞働奉仕義務の意義及形態」に就ての一講演に於て、全く指導者と同一精神の意見を述べた、多年來、指導者の協力者として

其の所見と意向を熟知せるヒールルは、伯林上院に於ける此の講演で、國家社會主義が勞働奉仕に與へた輪廓を、始めて一般公衆の面前に披瀝したが、此の輪廓こそは又、ヒールル勞働奉仕指導者任命後に於いて、同局長下に於ける勞働奉仕國家指導の全活動に對する規範とも成れるものである。今、其の重要なる講演から二三の箇所を引用すれば、

「吾等は、吾等よりも以前に、どの大國民もまだ歩いたことのない途に就く勇氣を有たねばならぬ。斯くの如き活潑なる實史の前提を成すものは、勞働奉仕の意義並に目的の遺憾なき理解である……大戰の不運なる結末は、さなきだに狹窄なる獨逸人の生活區域を更に縮少し、吾が國民總としての外的生活條件を特別に惡化せしめた……困難より救ふものは、唯實行あるのみである。而して貧困は、唯實行に依つて克服されるのみである……失業は、決して不可避の宿命に非ずして、後の世代にとつては、理解困難であらうところの、人間精神の眩惑と混亂の結果である、如何なる世界經濟及世界財政の危機と雖も、吾等自身の現存せる勞働力と勞働手段を以て勞働し、吾國民の生存に必要なるところのものを、獨逸の國土と其の自然產物より獲得するのを妨害することは出來ぬであらう……勞働奉仕の吾人に對する意義は、吾國青年の國民及國家に對する奉仕であり、獨逸の鄕土に於て、吾國民生活條件の改善の爲に行ふ勞働を意味する勞働奉仕義務は、吾等の生活並に吾等の國民經濟的獨立の回復を目的とせる經濟鬪爭補充の爲に國家の能力手段として、國家指導に一個の勞働軍を供給することでなければならない……勞働奉仕は、吾國民の爲、大なる敎育所と代らなければならない……勞働者なる名稱は、獨逸人の有する最も崇高なる義務を想起せしめる名譽の尊稱と代らなければならない。」と。

講演者は次いで事物の仔細に亘り、國家勞働計畫の要求を爲し、特殊勞働が此の奉仕に對し、考慮に置く可き問題にも解答を與へた。同時に彼は、土木修理の大分野に注意を引き、排水の必要ある八五〇萬ヘクターの地面、文化地に開拓さる可き二百乃至三百萬ヘクターの沼地及荒地、山林勞働、堤防築造等に就て述べ、最後に、勞働奉仕が東部の植民と植民政策一般に對して有つ大なる意義に就て述べた。

彼は講演の結果に於て、國家勞働者は、國民の爲に名譽の奉仕を爲すが故に、其の衣服、其の勞働奉仕着を須らく誇りを以て着用す可しと、新に聲を高くして要求するところがあつた。

此の講演の終語は次の如くである。

「斯くの如き新事業は、其の小兒病の數々を先づ體驗しなければならず、最初は仔細の點で、多くの缺陷失策を見るであらうし、吾等は先づ經驗から學ぶと同時にそれ相當の犧牲を拂はなければならぬ、是は勿論のことである。又、本事業妨害の目的を以て、內外の敵が計畫する陰謀は、勿論計算中に入れなければならぬ。併し、是等すべての障害困難は、事業に對する確乎たる信念と、何事にも屈せざる强靱なる意志に依つて、早晩克服することが出來る。時は來れり——吾等は實行を欲するのみ！」

以上は、一九三二年五月二十三日に於けるヒールルの言葉である。其れより一年經過したる後に於て、同書記長はアードルフ・ヒツトラーの國民社會主義的國家の勞働奉仕國家指導の先頭に立つて、勞働奉仕國立敎育所の創立（一九三三年五月十五日）に際しては、其の演說の中で、勞働

奉仕の指導に當る人々に、次の要求を爲した。

「勞働奉仕の思想は、既に他の機會に詳述せるが如く、大戰中に誕生し、一九三三年獨逸革命中、卍の記號の下に輝しくも擡頭せる政治社會的一新思想の最も適切なる表現である。

獨逸革命の精神、從つて國家社會主義的國民運動の精神は、勞働奉仕の上に立つ可き精神から、如何なることがあつても切り離すことは出來ない。

國民社會主義的精神は、獨逸魂を、最も徹底的に、又時代に卽して最も適切に表現したるものである。本精神は、勞働奉仕指導者各人の中に、活潑に生きて居なければならぬ。本精神は、黨員教程の呈示や、徽章の帶用を以て證明されるものではない。是は問題と成らず、吾人は衣服を視すして、衣服を貫いて心臟を視んとするものである。

同局長は更に指導者候補者に向つて次の如く言葉を續けた。

「――指導者たるには、正しき獨逸人的見解だけでは、猶充分ではない。指導者は、己が活動分野の中に於ては、絶對的に意志を遂行し得る完全なる男一匹でなければならぬ。勞働奉仕指導者は、義務完成のまことの信徒でなければならぬが、このことは、唯に部下に對し命令する場合のみならず、就中またコレ自身の模範に就ても要求されることである。眞の指導者は、指導さるゝ者の意志のみならずその心情に對しても亦權限を有す、何故なれば、指導者は國民教育者であり、獨逸社會主義、卽ち眞の獨逸國民團結に至らしめる教育者でなければならぬからである。

いさゝかなりとも階級的高慢の跡を留むる者、誠實なる勞働の全部を尊敬せざる者、人間を區別するに人格價値と業蹟を以てせざる者、頽廢的市民時代の不實にして欺瞞多き社會觀よりまだ全く啓蒙されざる者、此の若き時代に於て、若き心を有せざる者、其等の人々は、正しき勞働奉仕指導者たることは出來ない。

先づ第一に、勞働奉仕指導者を形成するものは、斯くして、見解及人格的價値であるが、更に是に加はるのは、職業能力である。其の場合にして始めて、己れに課せられた課題を遺憾なく果たし、且つ、自分の職務を理解する場合始めて、部下の尊敬と信頼を獲得することが出來よう。

勞働奉仕指導者は、安逸なる生活に惠まれず、富を蓄積する機會を有せず、自分の心の滿足を、頗る偉大な、頗る困難な、併しまた頗る麗しき課題の遂行に見出す。何となれば、國民に對する其の課題の意義は恐らくは、後世に成つて始めて、充分に評價されるであらうから。

同志諸君、此の意に於て、各自の仕事に赴かれたい。」

勞働奉仕の總指揮者ヒールル書記長は、一九三三年七月二十七日ナウエン近郊キーンベルク野營に於ける印刷物受取りに際して、今一度根本的意見を述べ、次の如く宣言した。

「……勞働奉仕は、吾國民の經濟的及社會的困窮に對する闘爭から出發した。世界大戰の結果及其れより來る諸現象は、獨逸の經濟的情勢に大變化を齎した。

獨逸は、最早、曾つて二千萬人の生計を支へ得る收益を有したるが如き世界的大輸出商館たる事は出來ない。吾等の國民經濟は、主として國內經濟でなければならぬ。吾等の將來は、海上にあるのではなくして、獨逸自身の耕地に根ざすのである。而して此の耕地の大部分は、ヴエルサイユの決議に依り、吾等より奪ひ去られてしまつた。

若しも吾等が、最も貴重なる同胞の大部分を、國外移住の爲、永久に國より失ふことをせず、或は、產兒制限に依つて、國民に自殺の處置を强ふる事を欲せぬならば、吾等は吾等に猶殘されたる獨逸人の生存區域を、出來得る限り利用しなければならぬ。獨逸に於て猶可能である土地改良工事を以て、毎年二十億マルクの增放を農林業の範圍に於て見ることが出來るであらう。

獨逸の地面は斯くして、猶多くを產出することが出來る。そして、改良土木工事の爲に必要なる過剩勞働力をも吾等は有し、一定の期間の間、維持することが出來よう。何故なれば、假令、吾國の手工業及大工業の復活を兼ねて要望するとは雖、此の方法を以て失業軍を全く吸收し盡すことは出來ない。併し、獨逸に於て可能なる土地改良工事を以てすれば、毎年五十萬乃至百萬の勞働者に、十年乃至二十年の期間の間、職を與へることが出來るであらう。

獨逸青年の勞働奉仕を共に加へたる眞に大規模な土地改良綱領は、吾國民の非常に重要な、場所及職業上の交代に利することが大きからう、卽ち、彼の致命的都會集中を避けしめ、既に過去と成れる時代に於て、餘りに榮え過ぎたる大工業より解放し、再び耕作栽培に立歸らしむるに役立つであらう。勞働奉仕は、健全なる構造を有する大規模植

民に、その前提を授けるものである。

併し、すべて是等にまして重要なことは、吾國青年教育所としての勞働奉仕である勞働奉仕は、吾國青年を、身心共に煩はすことの大きい失業の呪咀より解放す可きであり、又青年をして、勞働の道德價値、勞働の名譽を高度に把握せしめねばならぬ。且又、手工業にもそれ相應の尊嚴を授け、「勞働者」の名稱を、各獨逸人にとりて、一個の尊號たらしめねばならないのである。

勞働奉仕に於ては、若き頭腦と腕の勞働者が相互に相識り、尊敬することを學ばねばならぬ。獨逸鄕土の土で、共同に汗を流すことに依り、彼等を土地に依り結ばれたる獨逸國民の結束に導かねばならぬ。

國家社會主義が、國民革新の大課題を遂行せんとすれば獨逸社會主義の大なる國民教育所として、勞働奉仕を到底缺くことは出來ない。

すべての個人及すべての國民と等しく、獨逸國民も亦、勞働に對する權利を有す而して獨逸國民は自由なる自己決定に於て、自己の能力と必要に應じて、勞働供給を規定する權利を有す。吾等は此の權利を如何なる時に於ても斷念することはないであらう。吾等獨逸人の如き事情にあつては勞働奉仕は一個の必要事である。

勞働奉仕は、內外平和の一事業であり、最高位の文化事業である。それはまた、歷史的新時代の精神を表現するものである。

ヒールル氏の言葉は以上に留まるが、吾人は猶、勞働大臣兼勞働奉仕國家委員ゼルテ氏が、ノルウエー記者の照會を受けたる際、是に答へたる言葉を附記しよう。

「……勞働奉仕は、勞働青年に有用なる勞働とパンを授けて來た。勞働奉仕は、無用と自棄の感情を鎭壓し、斯くして、絕望に陷らんとする獨逸青年に再び新なる生活感情と價値感情を授けた、且つ又、彼等をして再び自然に近づけしめたのである。右の事實を超越して見るときには、更に朋輩と團結の强い感情が生れて居る。勞働奉仕の中には國民各層の若き獨逸人と、樣々なる集團に屬する人々が、國民と國家に對する奉仕を目的とする共同勞働の爲に一括し込まれる。此の共同勞働からして、獨逸國民非常團結の新精神が進展し、是はまた、勞働奉仕完了後も、必ずや充分なる成果を齎すであらうし、斯くして、國民生活と國家

生活再建の爲め、顯著なる役割を果すのである。此の事に依つて、吾國民に宿る階級鬪爭の思想を撲滅する最も有效なる方法の一つでもあつた」

斯くして、ゼルテ及ヒールル兩氏は、勞働奉仕に與へられたる輪廓を、ヒットラーの定めたところに順じて、描いたのである。猶此の畫像を完了する爲めには獨逸勞働奉仕に於て、決定的影響を與へて居る二氏の說明を補充として述べねばならぬ。其處で、先づ第一に、勞働奉仕國家指導に於ける專門委員ドクトル・シュテルレヒト氏が、國立教育所創設に際して爲したる演說を繰り返さねばならぬ、中でも彼は次の如く言つて居る。

「……吾等は勞働奉仕に依つて、新規なる或物を創らんと欲する。吾等は、旣に示せるが如く、此の源泉より流れ集まる新しき人間型を、卽ち、眞の意味に於て獨逸的にして其の見解は、今日、國家社會主義と銘うたれる一個の人間型を創り出さんと欲する。吾等は、此の人間型を創り出すのに、それの如く先づ實地に生きるより他に途なきを知つて居る。吾等は、是を敎授することは出來ない。寧ろ、それを時代の精神的源泉より降下せしめ、且つその指導者として實踐し、何者に其の最高の表現を見出し得るかを示すことに依つて、始めて此の人間型を養成し得るのである。吾等は此の人間型を、吾が勞働奉仕に於て國家政治的敎授を以て訓練し、彼等に知識には非ずして、考へ方、卽ち、獨逸男子として有せねばならぬ考へ方を授けんと欲するものである。併し、吾等は此の新なる人間型を創造する爲には猶別の或物が必要である。ことを知つて居る、新しき指導者型、卽ち是である。

……吾等が勞働奉仕に於て創造する新指導者型は、封建時代の最後の殘滓を一掃しなければならぬ。是は旣に世界大戰中、塹壕將校として知られたところの指導者型である。卽ち、己が部下と最も密に相親しみ、部下と共に同じ避難所に眠り、部下と共に食し、部下と共に塹壕の塵芥を分ち、だが一旦危險の場合に到れば部下全員の視線が其の上に集まると云ふ、かの指導者型に他ならない。此の指導者型の存した場合には、一九一八年に於てすら、戰員は、歸鄕に際しての規律に服して、歸鄕して來て居るのである。同志諸君、吾人が原則に於て欲するところのものは、二十世紀の新しき人間を創造することだ。是は敎育上の大

問題である、そして吾等は吾等の青春を贈ける場合に於てまことに偉大なる一つの合言葉をそれに與へねばならぬ。吾等が自らの青春に向つて、汝は教育を受けん爲、勞働奉仕に編入せらる可し、告とげるだけでは足りない。否、吾等は、青春卽ち青春の精力をそれに費すことが貴重である爲めに、青春に對して何物かを提供しなければならない。突擊隊は闘爭を以て獨逸の街を自由にしたそれは獨逸自由の第一軍であつた。

吾等は、吾等に獨逸の生存自由を取り戻すところの、獨逸自由の第二軍創造しなければならない。是が、青春を賭するに價する合言葉であるので、決して運動場敷設や散歩道敷設等々に從事することであつてはいけないのだ。——獨逸の生存自由はあらゆる自由の前提である。是を吾等は勞働奉仕をもつて獲得せんと欲するのである」

そして、最後に勞働奉仕教育所、國家政治科指導者ドクトル・デツカー氏は次の如く述べて居る。

「……吾等は、遺言狀を帶びて居る。輓近十四箇年は、まだ抹殺されたのではない。吾等は新しき發展の初頭にある。千軍萬馬裡に老ひた大戰勇士二百萬は、猶吾等を期待して居る。褐シヤツの同志四百が、吾等が自らの勞働を以て飾らんとする。第三帝國の爲に、生命を賭した彼等は、決して外面的な物の爲に死んだのでもなければ、過去の或物の爲に死んだのでもない。實に彼等は偉大なる犧牲よりして始めて展開する一將來の爲に死んだのである。其故にこそ、勞働奉仕は、吾人が決定し、吾人が形成しなければならない處の、現代の新現象でなければならぬ。何となれば、此の新なる物は、其の恒久性と、國民及國土の爲の祝福の點で、一過去が　未來に對して拂へる犧牲に對する正義觀に從屬せることを、今日吾人は知つて居るからである。然るが故に、吾等は、新しき獨逸の未來の革命家たるに變りがあつてはいけないであらう。

吾人は、造型の意圖を有す。其の對象と成るものは、先づ第一に新しき人間である而して、吾等は、各個人が、自身を祖國奉仕◉負擔者と實感する場合、其の意志より何を生むことが出來るかを、觀んとするのである。「余は然る意志あり」と曾つて言へる男があつた。卽ち、アドルフ・ヒツトラー其の人である。吾等は、彼等の味方と成つて戰ひそして、曾つて彼の味方として戰つたこと無き人々と雖も

今日、彼に吾等の宰相と指導者を見て居ることに就て、喜ぶものである。其の故に、吾等は新しき課題の負擔者として、次の如く叫ぶ。「吾等は、獨逸人として勞働せよ」と、吾等の宰相、アドルフ・ヒツトヲーの訓へるが如く、吾等の事業を擔當するのである。即ち、汝は無にして、國家がすべてなり！　と叫べる彼の言葉に從つて」。

斯くして吾等は、テンペルホーフ廣場に於けるヒツトラーの宣言より、ヒールル及ゼルテを經てシュテルレヒト及デツカーに到る右の叙述を以て、勞働奉仕の課題として規定されたるものゝ概略を知ることが出來る。

2、勞働奉仕制度の先驅者

獨逸勞働奉仕が——今日の時代に、未聞の革新として適用されて、其れ自體として、疑ひもなく、一個の革命的存在である。——全然傳統なしとしない事を想起することは有益と思はれる。勞働奉仕は、獨逸史中に其の先驅者を有するのである——中世に於て、西部及南部ヨーロツパの騎士及農夫が、東方に移住して來たそして、ブランデンブルクやポンメルン、又シレジヤや東西プロシヤに開拓の犁を加へ、村落や都會を建設した時　、それは眞の勞働奉仕に他ならなかつた。此の事實をシュテルレヒト氏は、既に引用せる其の演說に於て次の如く言ひ表して居る。

「(祖國)……獨逸人は此の言葉の意味を闘爭と勞働に於て創造されたる祖先の國土と解釋し、合せて祖先が太古の絕えざる正面闘爭に於て流したる血潮を以て土地を肥やし、吾が戰死者の死灰を以て種蒔かれ、或は獨逸人にして始めて成り得る神々を求めつゝ、伽藍の尖塔と成つて天空に迫る有樣を想起する。(祖國！)吾等は此の言葉を口にすることを喜ばぬ、何故なれば、それは吾等にとりて餘りにも淸淨なる、餘りにも神聖なる言葉であるからだ。

獨逸祖國は如何に成つたか。

獨逸遠征軍は、ライン河畔で方向を轉じ、再び東へと進んだ。十字軍の混亂の後に、皇帝の伊太利出帥の後に、新しき獨逸の道が始まつた。シュタイフエル家の勢力と共に、獨逸帝國が幾世紀に亘つて崩壞した其の一瞬間に、獨逸國民は其の事業を吾身に背負つた。王侯に依る植民は、ドーナウの流れに沿ふて進み、獨逸文化を遙か東方に運んで行

つた。市民に依る植民は、オーデルを溯つて、再び領有したスラヴの地に、都市文明の花環を授けた。そして、騎士に依る植民は、懷しきプロシヤの湖沼、原始林の中に、最も困難なる途を辿つて行つたのである。其の樣は、まさに一大意志が無意識のうちに各個人の全部を支配したるが如き觀を呈する。恰も、目標を意識せる縱隊の如く、獨逸の植民軍は、新天地の中に突進し、ボヘミヤ地方、ドーナウ・オーデル兩河の中間地の如きは、殆ど一日の行軍を以て連結を遂げて居た。――而して其以後七百年間、此の一晝夜行軍は最早行はれなかつた。併し、假令、空間的に境界が存して居やうとも、獨逸の政治生活は幾世紀を通じて、此の植民各地より實り出たのである。ハープスブルグ王朝が數世紀の間、ドーナウ河畔の植民地ウイーンに鎭座し、然る後に帝權はプロシヤ植民地に於けるホーエンツオレルン家に讓られ、シレジヤ植民地が猛烈なる鬪爭の對象として其の間に介在しなければならなかつたことは、決して偶然ではなかつた同時に看過出來ないのは、政治的に無力な老朽國である。

假令それが、人と文化を繰り返し繰り返し植民各地に送り込んでも、新に獲得された土地に於ては、即ち、あらゆる獨逸民族が、共同の鬪爭と勞働に結束したる彼所には新しき獨逸の政治生活があつたのである。

プロシアは、全獨逸人の政治的故鄕と成つた。

東部には、新しき組織、新しき文明が發生した。テンペルー騎士團の規則に從つて、獨逸騎士團は其處に一國家を創造した。是即ち、獨逸史最初の、顯著なる社會主義である。絕對的服從、最も嚴格なる義務の遂行、最も質朴なる日常生活、其の上には、唯己れの國家第一の僕たる騎士團長。斯くして、彼等はプロシヤ文化とその國家に根柢を與へ、其處からして獨逸の地盤が生れたのである。――社會主義として獨逸國家內に存する。すべてのものは、此處に其の出發點を有するのである。中世紀の共同時代は、此處からまことに凄じき作用を成して、吾が現代に到り、今日吾人の中に於て、獨逸騎士團の黃金時代が復活して、國民社會主義的國家の中に、其の再生を見出し、吾等が勞働奉仕なる言葉を以て稱するところのもの、中に、最高の發現を見出し、斯くして、解決如何に依りては吾が國民の生死が支配される程に逼迫せる現代に於て、其の課題を見出すのである。

である。」

シュテルレヒト氏の言葉は是だけに留める。

扨て、吾等は時折ポーランドの政治家及新聞記者等の口から、勞働騎士團と其の農民がまことに苛酷な好戰的輩であつて、哀なポーランド人の土地を奪ひ、彼等を無慘にも壓迫したとの言說を聞く。從つて、著者が先般「國民及鄕土に對する獨逸勞働奉仕」中に於て決定したるところのものを、再び此處にも繰り返して置くことは、恐らく時機を得たことゝ思はれる。

「……ポーランドの學者フラデイロヴイツチが、(社會及經濟史に關する研究)の第十二冊に於て(ランベルク大學教授ブヤツクリルヴオヴ編)決定の必要を見たるところのものを一論攻の範圍內で決定せんとすることは、不可能の業である。此處では彼の研究結果より、僅かを拔萃するにとゞめる。

先づ第一に興味深きことは、西部ポーランド(ネツツエ及ワルテ地帶並にポーゼン地方)の植民は、就中獨逸人に負ふところ多しと、フラデイロヴイツチが說明しなければならなかつた一事である。『年月が經過するにつれて』、と其のポーランドの研究家は述べて居る『人口の自然的增加と獨逸人移住の結果、植民狀態は益々密と成り、且つ其の農業は、十三及十四世紀に於ける三度耕耘法輸入と共に、著しく優勢と成つた。』併し、誰が其の三度耕耘法なるものをポーランドの地に齎したか。扨て、それが獨逸人なのだ！

又、彼のポーランド碩學は明瞭に次の如く告白した。『植民に原動力を與へたところのものは、西部ヨーロツパの數多き寺院であつた。是等の寺院は、既にポーランドの地に定着して居て、先づ其の莊園に、獨逸、フランドル及和蘭より農民を誘致せんと努めたからである。』と。以上の如く其の著の五十三頁に記され、且又、數頁前に於ては『十三及十四世紀、獨逸法律に依る猛烈なる植民運動に依つて』始めて、其の頃迄は猶開拓されざる大森林地帶であつた『西部、北部及南部大ポーランド』の扉が開かれたのである、と認めて居る。更に、フラデイロヴイツチは、獨逸人の植民が行はれた西部ポーランド各地の郡縣を實地に調査し、仔細に亘つて精密なる報告を爲したが、斯くして彼はポーランド王權の確立と獨逸騎士團の衰微と共に、文化上

の有望なる發展は全部停止した。然り實に慘な破目に立ち到つたといふ結論を下さなければならなかつたのである。例へば、ポーゼン郡に於ては、一三〇〇年より一八〇〇年の間、實に百九十二箇所の植民地が、荒廢に歸して居ると推定しなければならなかつた。然るに、他の地方に於ては衰微期はそれよりも短く、一五〇〇年より一六〇〇年迄の約百年である。全地に原始林が再び繁茂し、植民は衰微し森林の爲に食ひ取られてしまつた。『吾人は卽ち、曾つて植民され、耕作されたる地方が荒廢に歸し、森林に包まれてしまつた、と云ふ極めて珍しくない現象を見る譯である』と、其のポーランドの碩學は云つて居る。

此の原始林中に衰滅し行く過程を救はんと、振起つ場合には、獨逸人召喚より他途無きを知つて居る。『和蘭人植民なる概念のもとに、ニーデルサクソニヤ人、フランドル人、和蘭人、アルトマルク人及バンベルク人等が國内に誘致され、斯くして約一六二五年頃より、ポーゼンやネツツエ＝ワルテ各地に於ては、ポーランド人自身の意圖と召喚に係る新しき獨逸農民の植民が發生したのである。フラデイロヴイツチに依れば、此の方法で西部ポーランドでは、

ポーランド自身に依つて惹き起され、指導された第二次的植民時代に於て、七百八十八箇所の植民地が發生したと云はれ、其のうちの四百三十箇所は、間違ひなく純獨逸的特色を有すと、主張して居るのである。

最後に、此のポーランドの學者の他の一つの認定を述べき置きたい。彼は、クルシュヴイツツ郡に於ては十六箇所の荒廢地、ポーゼン郡に於ては驚く勿れ、實に百六十一箇所の荒廢地が算へられると認定したる後に、クルシュヴイツツ、ポーゼン及コステン諸郡に於ける植民發展を考察するに當り、九十一頁に次の如く記して居る。『北部地方ワルテ河畔砂地及森林地帶には、著しい變化が發生したが、是は十七世紀の『和蘭』植民、更に十九世紀のプロシヤ專制に依つて開發されたる結果である』

『獨逸人』なる言葉を避ける爲、彼は常に『和蘭人』なる言葉を開いて居る。併しながら彼は、獨逸の和蘭植民と『プロシヤ專制』が、ポーランド人自ら荒廢に歸せしめた國土の文化を再び隆盛ならしめた事を告白しなければならなかつたのである。是を換言すれば、獨逸人なくして波蘭人は其の半開化の域より脫することは出來なかつたらうと謂ふに等しい。ポーランド人は、其の文化的事業能力の三分の一を獨逸人に負ふ——其の故にこそ吾等は今日、何の能力も無く、實際の業蹟ある者に單なる嫉みから敵對して其の片手を妨害する凡庸者の憎惡を見るのである。』

ネツツエル、ヴアイクセルワルテ三河畔地方に於ける、全然平和的規範に依る植民に就ては、是以上詳說しない。ポーランド文化發展史上に於ける獨逸の影響が如何に大であるか、ポーランド人が文化的に獨逸人に負ふ處が如何に多きかは、中世紀、獨逸法律がポーランドに於て得たる勝利の事實からしても認めることが出來るのである。何故なれば、植民を獨逸法律に從つて、プリペート沼澤地迄延長して行つたのは、藩主並にポーランド王侯に他ならず、又ポーランド貴族に依つて、ポーランド中心地方に、幾百の植民地が獨逸の法規に從つて開拓されて居るからである。又獨逸の僧侶や、獨逸の農夫職工をポーランドの國土に招いて、彼等に植民地と村落建設の勞力を取らしめたのも、ポーランドの僧正並にポーランド公であつた。ミーチスロース公は一一三九年、ライン河畔ケルン近郊のアルテンベルク寺院より僧侶を招聘し、彼等をして、レクノ寺院を建立せしめ、其處よりして、四十箇の寺院村落が生れたのである。また、同じくケルンのシトー教團の僧侶達に依つて、十六の村落を有するラート寺院が建立せられ、更に六箇の村落を有するオーブラ寺院が建立された。卽ち一ポーランド公の英斷に依つて、ポーランド國内に六十二の村落が獨逸人の手を以て開拓された譯である。是ぞポーランド自身の意圖に依り、ポーランド國内に生れた平和的獨逸植民に他ならない。人と國土の幸福の爲に獨逸人の果せる勞働奉仕に非ずして何ぞやである。

更に吾々が想起せねばならぬのは、十七世紀の末り十八世紀の初葉にかけて、ステフアン王冠の地をトルコの專制より解放せんが爲に惹き起されたシュワーベン人及サクソニヤ人のジーベンビュルゲン及バナト遠征である——卽ち、大規模の獨逸勞働植民奉仕の一業績、獨逸國民の不俱戴天の敵と雖も承認せざるを得ない程、其の文化的影響顯著なる獨逸農民職人等の果せる純平和的特色を有する一業績を想起しなければならぬ。

扨て、猶此處に唯に偉大なる將軍並に政治家であるのみならず、又、まことに偉大なる勞働奉仕指導者であつたと

ころの、老フリツツの大業績に就て二三述べて置きたい。何となれば、彼のプロシヤ大王の植民事業は、最後に於て勞働奉仕に他ならぬからである。七年戰爭が終りを告げた頃、プロシヤの經濟狀態は疲弊のどん底に沈んだ。王國の殆ど全部が、直接其の戰禍を蒙つた。ロシヤ軍、オーストリー軍、フランス軍及王國軍が國土を蹂躙し、物資を徵發し、且つ掠奪を恣にした。農業は殆んど全く行はれず、手工業は停止し、商業は不振を極めた。多くの村落は灰塵に歸し、數多の都市が攻略放火の結果、廢址と化した。フリードリツヒは自國の狀態を次の言葉で言ひ表して居る。

「貴族、商人、小作人、勞働者、工場主——是等のすべてが競つて彼等の日用品と商品の價格を騰貴せしめ、唯お互の破滅を目指して勞働して居るかの如き觀を呈した。」

其の一例として此處で觸れて置きたいのは、シレジヤの都會に於て、四千八百の農場附屬建築物と家屋、同州の田舍では八千九百が燒失した事實である。

扨て、そこで大王はメスを加へる——(吾等の指導者並に宰相ヒツトラーが、獨逸の困難を救はんが爲に、採つたところのものと等しき處置が當時諸般を支配せんとしたフリードリツヒの方策であつた)最も重要なる處置の一つは植民である。一七七三年に王はシレジヤに二百の村落の建設を命じ、四年以後に於ては、既に百七十四の新村落が勃興した。總じて是を觀るならば七年戰爭後、シレジヤにはフリードリツヒ大王に依り七〇、〇〇〇の植民群が植民されたのである!

フリードリツヒ政策の影響は更につぎの事實を示して居る。七年戰爭勃發の頃にはポンメルンは三七〇、〇〇〇の人口を算した。戰爭の終りには二九八・〇〇〇迄低下した。一七七四年にはそれにも拘らず三八五・〇〇〇の人口を算した。即ち戰爭勃發の頃よりも一五・〇〇〇の增加を見た譯である!

ロシヤ軍に依つて、見る影も無き荒廢の狀態に置かれたノイマルクでは、戰爭後百五十二の新村落が發生し、一七七七年には、戰爭勃發當時よりも三〇、〇〇〇の人口增加を示して居るのである。

人口の增加、農民階級の地位改善、製造工業の奬勵と其の全國配置、現存地面の根本的利用——そして、沼澤の大規模利用是等がフリードリツヒ復興政策の處置であつたのだ。

一七六七年にはネツツェルワルテ沼澤の干拓作業が開始され、一七七三年大體の終結を告げて居る。又三・五〇〇の家族が植民された。次にポンメルンのマデユー湖排水作業が開始され、是はまた四〇〇の家族の植民を可能ならしめた。アルトマルクのドロエムリンク山は、九〇、〇〇〇モルゲンの新開地を供給した。「すべてのものが畑地若しくは草地に利用されねばならぬ、そして、其の爲に利用されざるもの、即ち純然たる砂地の上には、樹木が植えられなければならぬ」と、王は命令を下したが、彼は又、一つの穗が生長する場所には其の二つを生長せしめよ、此の事が適へばそれは戰の勝利よりも遙に貴重である、との言葉をも述べて居る。

此處では一七六八年、フリードリツヒ大王の「一般原則」から二三の箇所を拔萃するに止める。即ち「二つの方法が存する。第一は、すべての耕作可能の地を開墾し、植民を計る事である。第二には工場を增加することである。余は此の兩方策を用ひてオーデル、ネツツェ及ワルテ河畔に村落を設置し、東プロシヤの沼澤を埋めて開墾地と成し、大抵の小作地を村落に變じて、低地に見られざる羊毛紡績工場の大多數を設けん爲には如何なる費用をも辭せないのである。」そして獨逸に取り戻された西プロシヤ——ポーゼン!此の土地が如何なる狀態でフリードリツヒに歸屬したか。「地方の賤民にはパンと云ふものが殆ど知られず、或る村落にあつては、パン燒竈や紡車も知られて居なかつた……それは、紀律なく、法律なく、君主なく、全く見棄てられた國土であつた。六〇〇平方哩には五〇〇、〇〇〇の人口が、棲息するに過ぎず、一哩に就き未だ八五〇も算しなかつた。」フリードリツヒは勞働奉仕と植民を用ひて、荒地より數年ならずして一つの繁榮せる土地を作り上げたのである。英吉利の史家、カーライルがフリードリツヒ大王に關する其の大著述中に云へる處のものを聞かれたい。特に植民地開拓、水道設備、築防、荒地開墾を斟酌しての產業事項が大王業績中顯著なる一部を形成して居た。——それが如何に偉大にして、絕え間なき勞働であつたかを讀者は殆ど想ひ見ることが出來ないだらう。最も意を用ひる自作農さへも、己が農場に就て勞する熱心さはフリードリツヒが其の全王國の爲に捧げたる精勵に勝るまい。」而して是は英

人の言である！

大元帥フォン・ヒンデンブルグが大戰中に唱へた救濟方策も、純然たる勞働奉仕と成つて居たであらうが、故國の主權者等が其の思想を頭から改竄してしまつた。

以上を以て勞働奉仕なるものが、獨逸歴史中に於て模範や傳統が無いでもないといふ事を、證明することが出來たと思ふ。

3、ヴェルサイユ

メルラーヴアンデンブルツクは其の偉大なる著作「第三帝國中に云つた。

「空間は獨裁的である。空間は神の如し……空間は『留まり』、時間は『逃げる』。そして發生が可能である空間にあつてのみ、あらゆる出來事の聯絡を保證する連結と云ふことがまた可能なのである」

是等の言葉に介在する深遠な眞理を理解せる者は、次に叙述せんとする事實が獨逸國民にとりて如何に恐る可きことであるかを認識するであらうが、又、吾等に殘されたる空間からして、獨逸の將來に對する力が形成されねばならぬと云ふ信念を得るであらう。

ヴェルサイユは、ヨーロッパの吾等より（即ち植民地を除いて）九・五パーセントの人口、東部國境地方だけでも住民の六・四パーセントを奪つた。のみならず、又、ヴェルサイユは、ヨーロッパの吾等より國土面積の一三パーセント、うち東部地方に於てだけでも九・五パーセントを奪つた。即ち、國土損失は本質的に見て人口損失よりも大きい。それが何を意味するかは、戰前吾國が人口過剩國であつた事を念頭に置けば容易に認識することが出來やう。即ち、次の事實を思ひ浮べるとき、始めて明瞭と成る。

凡そ文明國民にして其の活動の自由少きこと、ヴェルサイユに依り植民地を奪はれる獨逸國民に及ぶものはない。現今吾等は次の如き實狀に直面して居る。

國別	人口（植民地ヲ含ム）百萬	面積 百萬平方キロ	一平方キロニ於ケル人口（密度）
露西亞	一四五	二一・〇	七・〇
佛蘭西	一〇〇	一一・〇	八・七
英國	四六〇	三九・五	一二・〇
合衆國	一三五	八・〇	一五・〇
獨逸	六五	〇・四七	一三五・〇

元來、是等の數字がすべてを語るのであるが、事態を全く明瞭に認識出來んが爲、更に多くを指摘しなければならない。

ヴェルサイユに依る獨逸の國土損失の結果、麵麭穀物取入れ高の三〇パーセント及農業面積の二七パーセントが吾國より奪はれた。西プロシヤ及ポーゼンの讓渡のみでも裸麥栽培地の一七パーセント、小麥栽培地の一四パーセント及馬鈴薯栽培地の一四パーセントの喪失に價したのである。

食料地盤と食料貯藏の損失は、斯くして本來人口損失よりも遙に大きな譯である。そして、此處に於て吾等は、吾等の念頭より失することなく、明瞭に認識しなければならぬ恐る可き一事實に直面する。彼の十一月組織の政府が犯せる罪は、此の事實を國民に隱蔽したことである。該政府の誤謬は輸出工業の方策を以て、是等の事實の恐る可き結果より脫することが出來るなぞと、國民を瞞着したことである。彼等は一九二五年以來、國家及經濟界の責任者に對して、口を酸くして警告して來たものを一向に承認しやうとはしなかつた。即ち大戰が意味する變革は經濟界をも顚倒せしめ、斯くして戰前獨逸、英吉利、合衆國の工業生産物の顧客であつた。諸國民は既にして獨自の工業を營めるが故に、戰前の御手本に從つて再び世界經濟を運轉せんとすることの不可能なることを一向に承認しやうとはしなかつたのである。

次いで一九三〇年には、吾等の主張の正確を明瞭に立證する一統計が公にされた。此統計より今次の數字を拔萃する。

銑鐵生産高の減少國

獨逸	一九三年一九、〇〇〇、〇〇〇噸より一九二九年一三、〇〇〇、〇〇〇噸に及ぶ
英吉利	一九三年一〇、〇〇〇、〇〇〇噸……一九二九年八、〇〇〇、〇〇〇噸

銑鐵生産高の增加國

英領印度	一九三年　二〇〇、〇〇〇噸より一九二九年　一、四〇〇、〇〇〇噸
日本	一九三年　二四〇、〇〇〇噸……一九二九年　一、五〇〇、〇〇〇噸
オーストラリヤ	一九三年　五〇、〇〇〇噸……一九二九年　二四〇、〇〇〇噸

ヨーロッパ及合衆國に於ては一九一三年より一九三〇年に至る間、木綿の紡錘數は僅に三パーセントの增加を見たるに過ぎざるも、アジヤに於ては一二五パーセント、ブラジ

ルに於ては一二〇パーセントの増加に達した。

又、木綿織機の數はヨーロッパに於て、同じ期間に二パーセントの増加を見たるに過ぎず、合衆國に於ては概して増加を見ざるも、支那に於ては五〇〇パーセント、日本に於ては三〇〇パーセント、印度に於ては一〇〇パーセント、ブラジルに於ては六〇パーセントの激増に達した。

合衆國、英吉利及獨逸に於ける不況が莫大な範圍に亘つて居る際、獨逸の失業者群實に七百萬と稱せられたのは、決して異とす可きではない。何故なれば此の不況に加へてヴエルサイユ貢税政策の恐る可き鞭が獨逸國民の上に加へられたからである。然り、是は決して不思議ではない。不思議なのは唯、十一月組織代表者等の愚劣である。彼等代表者等は次の事實を理解しなかつた。――一概に現實に即する能力を有つて居らぬが、　　また理解しやうとする意志もなかつた。即ち、あらゆる國民的存在の根底に立ち歸ること、鄉土と其の生産物の尊敬、鄉土愛それから鄉土の手入を、即ち耕作の勞を託せられた階級の安定等々に再び立ち歸ること、唯是一つが吾等を破滅より救ふことが出來るといふことを、彼等は理解しなかつたのである。彼等はまた斯くすることに依つてのみ、勞働者が悲慘のどん底より救はれることが出來るといふことも理解出來なかつた。斯くして彼等が置き棄てにした血路開拓の手段こそ、實は困窮の吾等に與へられたる唯一のものであり、此の危急存亡の際、此の手段を講ずることこそ最も神聖なる義務でなければならぬ。

4、勞働奉仕度制の國民經濟的課題

吾等が今日猶意のまゝにすることが出來る方策が、如何に多く吾等獨逸の國土に殘されて居るかを說くドクトル・シュテルレヒトが多くの讀者を有つのも理である。其の著「獨逸勞働奉仕」中に於て、個別的に證明して居る是等に就て詳細な調査を試みる事は、今の課題ではない。更に立ち入つて研究したい方は、直接シュテルレヒトの著作を手にされたい。此の箇所では唯二三の本質的な問題に觸れて置けば足りるのである。

（註）1、伯林ミットラー父子出版

2、土地改善の必要に就ては、既に數年前、獨逸全國農業者組合に依つて公にされ、講演中に取扱はれた。（トーレンス大尉）

吾等はフリードリッヒ大王崩御とともに中絶の止むなきに至つた處より開始しなければならぬことを既に指摘した。此の主張が決して正鵠を失せぬ理由は、次の事實を以て證明することが出來る。現今獨逸は農業地二九、〇〇〇、〇〇〇ヘクターを有するが、其のうち八、五〇〇、〇〇〇ヘクターが水氣過剩の有用地である。是を以て見るとき、吾國農業用地の丸三分の一が水氣過剩にして、然る可き、狀態に置かれさへすれば、當然生産し得るだけの收益を齎して居らぬことが解るのである。是等の土地を、其の正しき、狀態に齎すことが出來るのは排水であるが、此の方法の結果、八、五〇〇、〇〇〇ヘクターに亘る地面の收獲高は本質的増加を見るであらう。併し此の排水作業は、其の費用、農場經營者にとりて到底支辨を許さざるが故に、自由經濟の範圍に於て實行することは困難である。此の作業を果すことが出來るものは、唯、獨逸勞働奉仕あるのみで、このものが目下其の最も重要なる課題の一つに直面せる所以である。此の事をよく認識して、計畫的な處置を適宜に取つて來たことは、勞働奉仕國家指導の功績である。此の事に就ては、後に立ち歸つて論述するであらう。

獨逸の有用面積の三分の一が、水氣過剩であると云ふ事實が一方に於て存するならば、他方に於て、獨逸の或る地方は水氣缺乏の爲、當然達し得る收益能率を示して居ないと云ふ事實を看過してはならないのである。例へば、ヴュルテンベルクに於ては有用地の一五パーセントが乾燥に過ぎ、サクソニヤに於ては猶二五パーセントの多きに上る。此の場合でも亦、眞に有效な救濟法と見られるのは、勞働奉仕だけである。更に又、

未開墾の沼地二、一〇〇、〇〇〇ヘクターのうち、少くとも一、〇〇〇、〇〇〇ヘクターは耕作可能と成すことが出來る。一、二〇〇、〇〇〇ヘクターからは其の六〇〇、〇〇〇ヘクターを耕作地に、六〇〇、〇〇〇ヘクターを林産地に變ずることが出來る。更に吾等は是に加へて、防備工事を施さねばならぬ一、〇〇〇、〇〇〇ヘクターの氾濫地帶を國内に有するのである。

最後に吾等は、埋立事業（フリースラント諸島、フリッシエスハフ、クーリッシエスハフ）を以て少くとも一、五〇

〇、〇〇〇ヘクターの新地を獲得することが出來る。

荒地沼地開墾、及埋立事業を以てすれば、少く見積つても二〇〇、〇〇〇戸の有望なる農家を建造することが出來る。更に吾等は東部地方の農民植民に依つて、他に二〇〇、〇〇〇戸の農家を建造することが出來る。是を要するに、以上は一、五〇〇、〇〇〇人の植民を意味するもので、而も其の際大いに可能なる都會郊外地植民と云ふことは、算中にない譯である。

假令、以上の最も僅かが實行されねばならぬ場合に於ても、勞働奉仕が常に條件を與へねばならぬ。換言すれば、自由經濟を以て實行せんとする時、經費多額に過ぎ、到底責任を以て着手することが出來ない爲に實現困難な、樣々の工事を引受けねばならないのである。勞働青年が勞働奉仕を再生せしめた時、それを以て獨逸非常時打開の武器を國民に授け、未曾有の大事業が掌中に委ねられて居るといふ事に、よもや氣付かなかつたであらう。

扨て、獨逸勞働奉仕は「勞働奉仕國家指導」なるものがヒールル書記長に依り國家政府の監督官廳として設立された御蔭を以て、それ本來の勞働分野、即ち國民經濟上貴重なる勞働へ如何に迅速に導かれて行つたかを、今根本的に說明しなければならぬ。ヒールル書記長指揮に依る國家指導設定前に於ては、如何なる勞働が奉仕支持者（國民社會黨改革訓練聯盟、鐵兜團、新敎及舊敎聯盟、獨逸少年團等）に指定されるかは、勞働支持者（州、地方官廳、郡、市町村、組合等）の自由な見積りに委せられて居た樣な狀態であつた。其の結果は往々にして、勞働支持者の大部分就中市町村が、勞働奉仕をして、全然其の任務範圍に屬しない勞働を實行せしめるといふ惡弊を招いたのである。

（註）現今に於ては唯一つの奉仕支持者があるのみで、それは國民社會黨「獨逸勞働奉仕全國聯盟」である。かの鐵兜も今は此の聯盟の中に編入されて居る。

例へば、勞働奉仕の許へ赴いて、裝飾用の庭園を建造せしめたり、運動場を設置せしめたり、散步道を開かしめたりしたものであつた。斯くの如き現象が發生するところでは、人々が勞働奉仕の眞の目的を理解して居なかつたのは明である。恐らくは、街道より失業青年の一部分を採へて、該都市の實利と歡樂の爲に「普段費用缺如せる整理を行はしめよう」と欲したのであつた。此の種類の活動が勞働奉仕の精神と意義に副はない事は、更に立ち入つて論ずる迄もない。さりとは雖も、勞働志願者を所謂公衆陣營、に編入し、即ち聯合に一括して、其等をして唯朝に勤務に就いて共同に食事せしめ、夕には再び家の「母親の許へ」送つて、午後六時より午前六時迄、任意の事をやらせる、と云ふことは、勞働奉仕思想の意義に副はないと云ふことをも、該當する箇所に闡明するのは、必ずしも容易の業ではないのである。

一九三二年八月には、全勞働志願者中三二パーセントが運動、遊戯場の建造、散步道や公園の敷設に從事して居たと云ふ事實が、事態の眞相を告げるものである。是に對して、農業有用土地の改善の爲には、僅々一六パーセントが向けられたに過ぎなかつた。尤も一九三二年に於ては、合理的な見地が實施されないでもなかつたが、眞に計畫的な勞働は、勞働奉仕國家指導の設定とともに始まるのである。本官廳の活動は、事態を速かに導いて、一九三三年七月には、既に次の事實を確定し得たのである。

全志願者中四四パーセントは地面改良の工事、即ち農業有用地改良に從事す。

全志願者中二三パーセントは、專ら植民目的の爲に、道路工事及交通改善（此の場合、專門技術を要する街道敷設は除く）つまり、土地の開發に從事す。

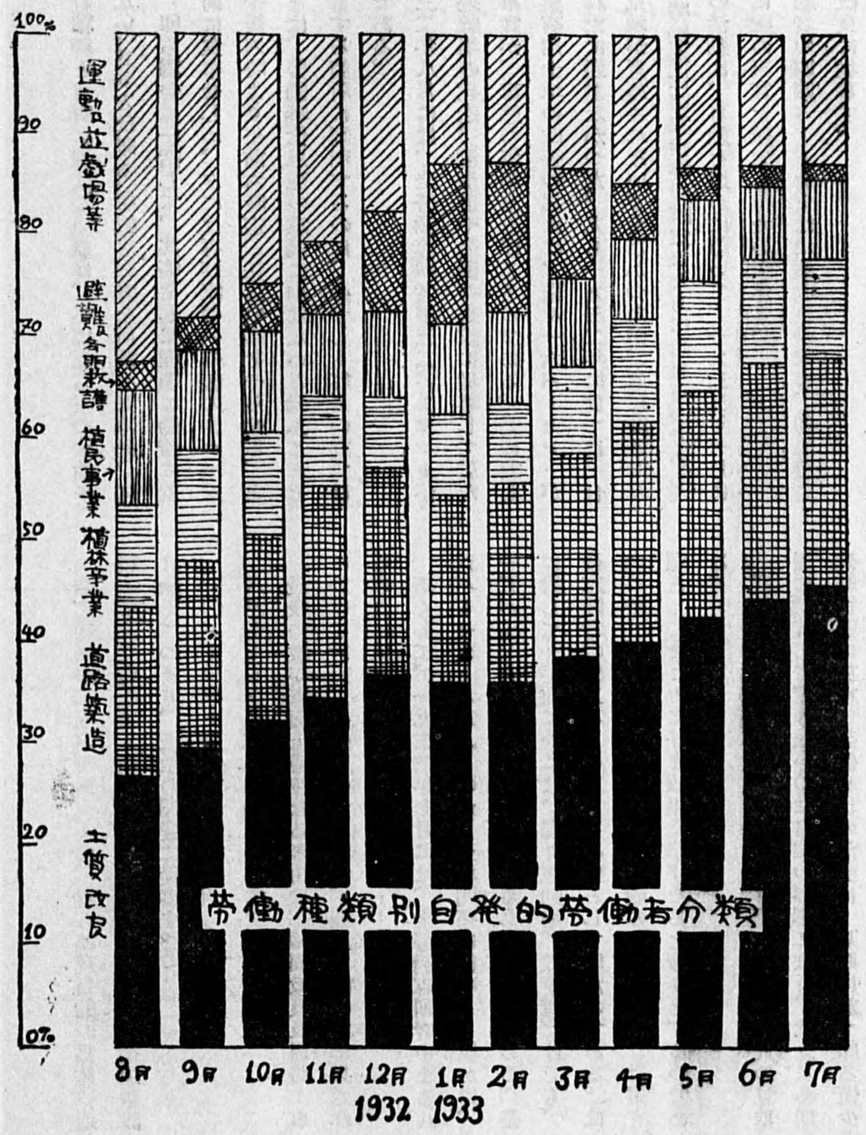
一〇パーセントは林業に從事す。

八パーセントは植民勞働に從事す。

最後の數が表面上僅少なる理由は、地面改良及道路工事に於ける計畫（勞働）の大多數が、植民目的の爲に果される事實に依る。

斯くして、一九三三年七月には、全勞働志願者中まる八五パーセントと云ふものが、土地開拓に從事し、僅かに、一五パーセントが爾餘の任務に從事して居た譯である。是に對して一年前に於ては、獨り運動場、散步道だけでも、全志願者の三二パーセントを必要として居たのである。此處に於て國家指導はトーレンス大尉の指揮に依り、計畫官廳としてまことに好き效果を擧げたるを誇りとするのである。

詳細の點は、次の見取圖より御一覽ありたい。此の見取圖に附言して置きたいのは自然の影響に依り、危急及冬期補助行動に於ける勞働奉仕の活動は、夏期に於て頗る僅少



であり、それに對し冬期に於ては、目ぼしい範圍に亘るといふことである。此の見取圖が示す勞働の種類の動搖は、從つて全然天然的のものであり常に現れるであらう。

植民の勞働分野に於ける減退は、既に前述の如く、此處に包含さる可き勞働の大部分が土地改善及道路工事の方に算入された結果である。

吾等は、更に出來得る限り完全を期する爲、一九三三年一月より七月に至る期間に於て、志願者が土地開拓勞働種目に就て如何に分割されるかを、數を以て決定して置きたいと思ふ。

一九三三

		土地改善	交通	林業	植民
一	月	六三〇九	三三〇五	一三八三〇	一四九四一
二	月	六九八七八	三七五四三	一五四四六	一四九一四
三	月	八三三五九	四三九九三	一八三五七	一八九九六
四	月	九三四二三	五〇九四六	二四八八七	一七九八九
五	月	一〇一〇三一	五四四五〇	二六八七八	一九〇六三
六	月	一一〇八六六	五九一一一	二六二八〇	一八三四四
七	月	一二〇一〇六	五八七四一	二六〇三六	二〇六八四

勞働奉仕局長及其の國家指導は、眞面目な教育事業をことごとに根底から不可能ならしめる公衆陣營の防止の爲に更に鋭く活動して居る冗論を避ける爲に、一九三三年に於ける事態の一大變化を示す一つの見取圖を今此處に記載しようと思ふ。當年の初めに於て、猶半以上が、特設陣營でなかつたとすれば、一九三三年の中葉には、殆ど全部の公衆陣營が姿を消すに至つたのである。

二八頁の見取圖は、更に猶、一九三三年一月より七月に至る迄の、勞働奉仕志願者一ヶ月の人數を示すものである。

勞働奉仕の業績は次の數字を示して居る。獨逸勞働奉仕に於て、一九三三年十月三十一日迄に果されたる規範の數は、

土地改善の分野に於て、二三、一八〇、四三〇日の工事に依り、四六六三件

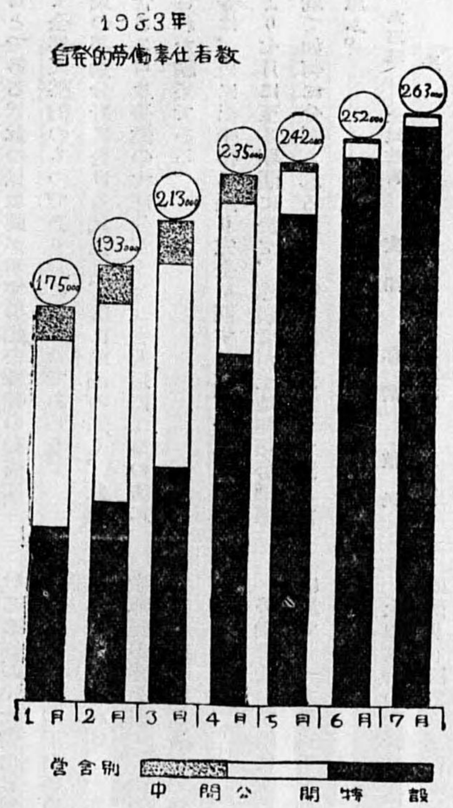
道路工事の分野に於て、一三、八二五、一四五日の仕事に依り、三八四五件

林産業の分野に於て、五、三三一、七四四日の仕事に依り、一二八三件

一九三三年七月三十一日に、獨逸勞働奉仕が果したところの内容は、

土地改善の分野に於て、一七四八件

道路工事の分野に於て、一〇四四件
林産業の分野に於て、四〇二件
一九三三年七月三十一日に準備に中なりしものは、
土地改善の分野に於て、四一六件
道路工事の分野に於て、二三八件



林産業の分野に於て、七五件
である。

猶、本稿締切間際、一九三三年八月に本狀況に就て著者の許に到着した二三の數字を擧ぐ。

一九三三年八月には、特設陣營の數、既に九八、八パーセントを算して居た、公衆陣營は斯くして、殆んど全く姿を消したと云つても差し支へないのである。

一九三三年八月三十一日には、勞働奉仕は四三四八件の規範を包含し、其等のうち四四、三パーセントは土地改善二一パーセントは交通改善、一〇、三パーセントは林務工事、九、八パーセントは純植民工事、の順に分割される全部の八五、三パーセントが國民經濟上極めて貴重な工事と謂ふことが出來るのである。

一九三三年三月には、九五、一八〇、〇〇〇日の工事が果されて居ることが確定され、同六月には、果された是の數は、六、〇五四、〇〇〇を算したが、一九三三年八月には、六、八三四、六七九に上昇した。斯くして實際の能率は、勞働志願者數よりも、遙かに激增したが、是はヒールル書記長の目的を意識した指揮に依つて、勞働奉仕が、愈其の效驗を現して來たといふ一つの證據である。

今、任意に實例を取つて、勞働奉仕の果せる勞働の國民經濟的價値を詳細に亘つて指摘すれば、

ドロエームリンク河畔、オエービスフエルデ近郊のブライテンローデに於ける農夫達は、一つの用水組合を結んだ動因は、土壤惡しく地下水の位置高き爲である、必要なる改良工事は、二〇〇モルゲンの面積を含む。土木局は、缺陷排除の費用を三五六、八〇〇マルクに見積り、うち六〇、〇〇〇マルクは、組合自身是を負擔す。殘額は、國家が勞働奉仕の形で用立てる。從來、一一〇〇モルゲンの大草原地が、雜草全く酸味を帶び家畜に有害な爲、殆ど何等の實用にも適しなかつた。穀類の耕作を試みんとすれば、結果は天然收益の半ばにも達しなかつた。今や、勞働奉仕は其の勞働に依つて、來年より土地灌漑の結果五〇〇〇乃至六〇〇〇リツトルのミルク收益と、耕作畑地の天然收穫を期待せしめる程の功績を擧げることが出來たのである。又ドロエームリンク地方の他の場所では、一九三二年十月三日に顯著な沼地より成立する三〇ヘクターの土地に着手した。一三、五〇〇日の作業の後、該地は耕作の目的に向けられたが、一九三三年七月には、畑の上には既に最初の收穫が見受けられた。(圖の一より四までを參照)

第三の箇所に就ては、一九三三年八月三十一日にザクセン縣の某新聞が、次の如く報告した。

「ドロエームリンク地方沼地の一部分に於ける土地改善事業は、既に見事な結果を産んで居る。勞働奉仕が先づ始められたのは、何の役にも立たない籔や、腕程の細さの樹幹が泥地の上に繁つて居るに過ぎないラントハーゲン地方であつた。先づ其の土地からは、立木や木の根が除き去られ、次に氾濫防備の溝や、排水溝が設けられた。自發的勞働奉仕に依つて、地主の負擔は、各モルゲンに就き、四〇マルクに過ぎなかつたが、是が若し請負仕事であつたならば、

恐らく其の拾倍を調達しなければならなかつたと思はれる。以前は、せいぜい焚木の用にしか立たなかつた無用の叢が繁り合つて居た場所に、現今では穀物が豊かに實つて居る。農夫等は、勞働奉仕の功績に對し、熱烈なる謝意を表して居る。」

更に、行政區域オーデル河畔フランクフールトを包含するオストマルクよりの報告を、述ぶれば、其處のミュンヘブルク――フュルステンワルデ地方に於ては、一九三三年七月に、規範四件が土地改善の分野に、同じく二件が道路工事の分野に、そして一件が林產業の分野に實施された。グーベン附近では、勞働奉仕は三箇所で河流調節事業に從事した。フュルステンベルグでは三箇所に於て道路工事、一箇所に於て河流調節に從事し、ベツツに於ては四箇所で土地改善等に從事した。

予の手許に達した一評算に依れば、該郡は　一箇年のうちに（一九三二年の夏より一九三三年の夏に至る）自力を以て果せる勞働を以て、二百萬マルクに達する國民經濟的價値を新に創出して居るのである。其の際、宿泊所建造、食料、衣服等の費用の爲に、各商工業方面に對して

支出した金額は、二、五〇〇〇〇〇マルクであるが、是だけの額が獨逸の財政に給せられた譯である。國家及市町村は、該郡に依つて、失業救濟費等に、六一五〇〇〇マルクを節約した。

該郡の最後決算は、該郡だけでも僅々一箇年中に、獨逸の國資を、一、〇一七、一七七マルクだけ增大せしめたと云ふ事實を示して居る。

此の機會に於て更に吾々はオーデル河畔ブランクフールト市の政府土木技師コニーツニー博士が、一九三三年八月一八日、「オーデル新聞」に於て、中部オストマルクの勞働奉仕に如何なる大任務が課せられたかを述べたる後に、論述した處のものを再錄して置きたいと思ふ。

土地改善事業の實施に依つて惹き起された收穫激增の爲に、地方住民の購買力が高まつたことは、更に又、新規なる永續的勞働を生む因とも成つた。何となれば、此の土地產業の收穫增加は、再轉して農工、商業、及交通等に作用するからである。

更に立ち入つた調査の結果は、該地農產額を基礎として全般に亘る實業生產並に、商業交通行政諸事業の收益が本來の評價の約二倍に相當する高度に達したと云ふ事實が認定されるのである。斯く、獨り比較的狹小の吾が行政區に取つてだけでも、幾百萬日分の永續的勞働が新たに惠まれ、職業と云ふ職業に景氣をそへる結果に成るであらうと云ふことは、明かに土地改善事業の實施が國民經濟に與へた影響と見る可きである。斯くして、農產額增加に附屬して、現時特に高く評價しなければならぬ。收穫安定が保證される計りではない。如何なる失業救濟案と雖も招來し得ぬ範圍に亘る連續作用をも獲得することが出來るのである」。

更に、二三の報告としては、一九三三年七月三十一日、バワリヤ勞働志願者に依り實施中の土地改善案は、一四七件、完了案は三三五件、準備中のものは三四件であつた。道路工事の狀態は、完了せるもの三三三件、實施中のもの一二三件、準備中のもの三一件であつた。林產業の範圍では、完了案一四件、實施案四件、準備案四件。

同州ベルナウの北方、ランケ近郊に實施された一案は、別して外國識者の興味をひいた。

當地、ブランデンブルグ郡ランケ近郊には、丁度三キロに亘る堆石谷と、三二モルゲン（八ヘクター）の沼澤地があつて、何等の實用にも適しない。一九三三年五月、當地に全員八〇名の勞働奉仕が開始されたが、其の後速かに工事捗取り、九月現在では、來る十月竣工を見ん迄に至つて居る。明年度には、勞働奉仕の手に依つて耕作狀態に置かれた此の三二モルゲンの地面からは、八〇〇乃至一〇〇〇ツェントナーの牧草が收穫されると豫測されて居る。國外の名士にして、若き勞働志願者八十名の此の偉業に親しく接する者、いづれも驚愕と畏敬の念に充たされたのであつた。今だに一米人は次の如く語つて居る「御身等獨逸人の手に掛つて、物に成らないものはない。」

ヘツセンの勞働區から、勞働奉仕の功業をよく知らしめる一報告が手許に達して居る。今、其の報告を全部繰り返すことは、不要に亘るかとも思はれるので、多くの事實の中より、此處に二三を引例するに止めようと思ふ。

グロースレヒテンバツハ村――勞働奉仕に依つて、四〇〇〇米の延長に亘る蘆を繁茂せしめた六ヘクターの畑地、整理さる。從來は、唯燕麥とつめ草の栽培のみが可能なりしも、現今では如何なる穀類をも栽培さるゝに至つた。從來の收益は、四〇ツェントナーの牧草、卽ち六〇〇マルク

と見積られて居るが、現收は、穀物三〇ツェントナー、即ち一二六〇マルクである即ち、勞働奉仕の功績に依つて二倍の收益を見るに至つた譯である。

ヴェスターノーエ村――村内に於て勞働奉仕は四四ヘクターの土地を開墾したが、　此の土地は、從來何の用にも立たずにあつたものである。今や此の土地は勞働奉仕のお蔭で畑地と成り、今後一ヘクターに付き麥作二〇ツェントナーを下らぬであらう。

ワイデルバハ村――採伐森林地一七ヘクターが開墾され畑地牧場に變ぜられた。變形された地面の上には、既に第一年目に馬鈴薯の植付を見た。今日迄の採伐林收益に比すれば、其の增收四八九〇マルクと見積られる樣々の小所有者より成る當地の住民の貧困を識る者は、斯くの如き土地改善の該地に對する大なる意義を想像するであらう。一二四頁第五圖の前景には、ワイデルバハ採伐林地の最初の馬鈴薯栽培が見受けられ、其の背景として幽かに見えるのは未だ勞働奉仕に依つて耕地に開墾されない採伐林である。（各寫眞省略す）

吾等は勞働奉仕の猶數頁に亘る前に「國家指導部内、立案指揮者トーレンス大尉が、先般新聞紙上で行つた詳論を述べて置きたいと思ふが、同論を機會として、氏は、勞働奉仕の問題を資本主義の營利的尺度を以て視んとするところの誤謬なるを說いて居られるのである。即ち同指揮者トーレンス氏は、一九三三年九月十七日の「國民觀測者（フェルキッシェンベオバハター）」紙上に次の如く述べた。

「（勞働奉仕の借方貸方）なる像を、今簡略に描いて見ようと思ふが、以前、勞働奉仕の經濟性と云ふことに就て一般に行はれて居た見解を其の背景として述べて置かなければ却つて其の目的を誤る結果に成るだらう。何故なら、假令今日、思想上立派に克服されて居るにも拘らず、國家社會主義なるものを從來單に外的現象としか考へて居ない輩に對して、此の前言なくしては、所詮何事をも納得することが出來まいからである。

此の見解を最も適切に表現する爲には、近々一年前に當時の勞働奉仕指導者が此の見地に就て表明した處を今一度繰り返して置くのに限ると思はれる。

「勞働志願者の人員費用は、一人に就き月々八〇マルクと見積られて居る。是等の費用に就ては、國家は各勞働志願者に依り、失業救濟の形で月々三〇マルクだけ輕減されると云ふ事實に依り、實際は月に五〇マルク内外にしか成らないのである。併し、決定的な費用は此の人件費ではない。重要視されねばならぬのは、寧ろ必要なる材料、機械、專門勞働者等に對して加はる處の物件費であつて、前例に依れば人件費の少くとも二倍に達して居る。即ち、奉仕志願者一人に依つて、月々人件費八〇マルク（内三〇マルク差引）が國家に負擔さるゝのみならず、是に對して更に月々一六〇マルクの物件費が加はる譯である。尤も、是等の物件費からは、失業救濟の形で再び多少の額が節約されるのであるが、それでも奉仕志願者一人に就き費用總額は、二〇〇マルクを降らぬであらう。」

「扨て是等の費用が河流調節、新植民地開拓、道路修理等の形態に於て、國民經濟的價値と對立するものであることを看過してはならないが、唯此の價値は、產業促進の效果は諒とす可きも、決して生活に必須のものではないのである。」

「右を以て明かな通り、年々幾十萬の奉仕志願者に、今幾億マルクを支出しなければならぬとするならば、此の經濟非常の折から到底責任を保證される業ではないのである。更に、此の金額の調達が、別の箇所に於て失業增加を將來せねばならぬことを顧るとき、益々此の憂慮を探らうとする次第である。」

今、以上に再錄したところのものが「勞働奉仕の借方貸方」なる像の背景たる目的を充たす爲めには、此の像を以上の見解に、其の儘連結するのが最良の方法と思はれる。

本論攻の出發點が「國家財政ではなく、吾國民の產業であることは勿論である。何となれば、吾等の生計の基礎は吾國產業の生產物を措いて他にないからである。又、國家財政と雖も、其の成立に必要なる條件は悉く是を吾國產業に負ふ。

「勞働奉仕の借方貸方」の僞らぬ形像を得る爲には、吾國產業が勞働奉仕の爲に果たす費用と、勞働奉仕が吾國產業に返還する勞働收益とを對比しなければならぬ。

然る時、吾等の形像は次の如く現れるのである。

吾國產業が勞働奉仕に對して行ふ支出は、失業の存する限り、常に生活費として要する以上の金額に達する。何となれば、最少限度の生活費は、如何なる場合でも缺ぐこと

は出來ないからである。併し、是だけとして見ても、既に一人宛約五〇〇マルクと概算される程の費用を要する、だが、是を老人子供を含めた我國民一人宛の消費額、年に就き約七〇〇マルクに達することよりして見れば、此の爲に當てらるゝ費用は最も僅少と謂はねばならぬ。其れ故、勞働奉仕に於て、食料、衣服、暖房、電燈を含めての宿泊、小使等併せて養成教育等是等に要する一人宛平均費用は、年に八〇〇マルクに及ぶとすれば、勞働奉仕は年に就き約三〇〇マルクを追加的意味で國内産業に負擔せしめて居ると謂ふに過ぎないのである。

吾等は右の費用に對して、勞働奉仕が産業に返還する勞働收益を比較して見なければならぬ。今此處に一年一人宛の其の成績が果して六〇〇マルクか八〇〇マルクか、それとも一〇〇〇マルクかを立證せんとするのは、正當でなからう。何となれば、よし六〇〇マルクの年收を以てしても勞働奉仕志願者は、失業の存する限り、追加的に産業に負擔せしめた二倍を、既にして返還して居る譯である。重要なのはそれ故、勞働奉仕の成し遂げた價値は、吾等の生活にとつても、將又吾國産業の建直しの爲にも、最も必須なるものに他ならず、此の意味で前に行はれた見解と相反することを證明することでなければならない。

此の箇處では、自由主義的見解と相反して、猶「人と人力こそ、國家の富なり」としたフリートリツヒ大王の言葉を述べて置くのが有效と思はれる。蓋し、其の言葉を以て吾等の立證は、僅々數行に一括されるからである。大王はオーデル、ネツツエ、ワルテ三河畔崩壞地、エルベ低地、ドロエームリンク地方、其他の諸地方に於て營まれた處の土地開拓事業を顧みて、次の如く言つた。

「曾つて、一本の莖が生えて居た所に、其の二本を生長せしめた者は、國民に對する功績、大戰役に勝利を博した將帥よりも、大なるものが有らう。」

曾つて一本の莖が生えて居た所に其の二本を成長せしめる、是こそ勞働奉仕の大任務でなければならぬ。

生産上缺陷多き狀態にある畑地牧場の收益を土地手入れの結果增大せしめ、而も折角の收穫を水泡に歸せしめる氾濫に對して防備を施し、或は痕跡だに留めぬ村道を修理復舊せしむる等々の工事の中に、大分の實味を有つ是等勞働が實に莫大なる効果を揚げ得ることは次の事實の示す通りである。

是等の勞働は、吾等獨逸の國土をして、少くとも人口半數分の割合を以て、該事業實施に要せられた分量以上の食料を出産せしめることが出來ることに成るであらう。即ち假りに人員五〇〇、〇〇〇人の勞働奉仕團が一ヶ年引續き其の勞働に專心したとするならば、該區域農産額は、人員二五〇、〇〇〇人分に必要なるだけの今後永續的に示すであらう。從つて、例へば四箇年同一條件の勞働奉仕が繼續されたとするならば、獨逸國内に於て壹百萬人分の食料が增える譯である。

吾國農産額は、國民全部の腹を充たさんとすれば、僅かに全人口の四分の三にしか達しない。と云ふ事實に當面せる吾等は以上を以て、勞働奉仕の果せる功績が國民生存の問題として、如何に意義深きかを充分示し得たと思ふ。

同樣の事はまた、前述の見解に依れば、　斯る非常時に於て到底支辨の限りでないとされた、かの爾餘の物件費（材料、機械費、專門勞働者給料等）に就ても當嵌まる。蓋し、是等物件費と雖も、所詮、報酬賃金其他の所得過ぎぬからである。此の方とても亦、全部費用中ほんの一部を國家財寶に負ふに過ぎず、同時に豊富なる收益を兼有するのである。

併しながら追加として殘る是等負擔と雖も、失業の存する限り、何は兎もあれ、決して負擔ではあり得ない是等は勞働を憧憬し、勞働無くしては破滅に瀕する人間に取りて正に一箇の勞働に他ならない。斯くして、それは精神と肉體の困窮より解放することである。即ち、決して負擔ではなく、寧ろ一つの負擔輕減である。

「勞働奉仕の借方、貸方」の眞形像は、正に是以外にあり得ないのだ。

然るにも不拘、依然として視るに目無き者の多きことである。從つて彼等は、　決定的なるものは、國家財政に非ずして國内産業であることを知らぬのである。

右の故に、吾が指導者の言「幾拾億時間の勞働を等閑に附することは、唯に狂氣の沙汰であるのみならず、全人類に貧困を齎す犯罪である」をして、其れ本然の意味に於て、實踐の規範たらしめんが爲に、吾人は孜々として怠る

ところ無からんとす」。以上を以て、トーレン大尉の論述を終る。

國家指導、行政及財政部指揮者ドクトル、シュマイトラーが「世界經濟」誌上に於て行へる詳論を以て、吾等は此の章を終りたい。

「勞働奉仕の國民經濟的課題は三重のものである。先づ、志願者の勞働作業に依り、直接土地改善工事、新地開拓、林務並に道路工事を通して國民經濟的價値が生ずる現今、獨逸に於て吾等は猶、八百萬ヘクター以上の排水を必要とする地面と、約四百萬ヘクターの沼澤地及荒地を有するが取り分け後者よりは、開墾に依つて約二百萬乃至二百五拾萬ヘクターの新地を獲得することが出來る。是等の數を現時農業に使用さるゝ約二千九百四拾萬ヘクターの地面と比較して見るとき、勞働奉仕が「國土に餘地無き我國民」に對して何を盡し得るか明かであらう。同時に必ず繰り返して置かねばならぬのは、勞働に於て肝要なことは、仕事を「造る」ことではなく、寧ろ現存せる有力なる勞働を正しく分割することである、と云ふ一事である。

緊密なる國家制定と、純誠なる指導幹部の設立に依り、若しも勞働奉仕が吾人の望むが如く、奉仕義務なる形式を有する一機械と成り、斯くして、促進さる可き勞働事業を計畫的に遂行し得るに至る其の場合こそ、共に吾等は獨逸生計の自由を獲得し、夥しき國民經濟的實益を達し得るのみならず、兼ねて教育的見地から視ても、豫測し難き思想上の價値を青年と國民に植付けることが出來るであらう。

第二の國民經濟的課題は、工業、商業及手工業の振興から生ずるが、是とても勞働奉仕に對し決して無緣のものではない。衣服、賄ひ、宿舍及器具類の各物件に亘つて、必要なる調達を行ふ結果、大規模の注文が產業界に殺到すると云ふことは、更に說明を要しない。勞働奉仕が其の緊密なる國營形式に移さるゝことの程度と速度に正比例して、すべて是等の注文も愈々計畫的に又當然の途を辿つて、待望せる工場、手工業者及商人等の手に流れて行く次第である。

又、然る場合に於ては、財政の運用も亦、現時に增して計畫的に且つ大規模に實行される。勞働奉仕の爲に作成され、志願者並に指導者の給食、宿泊、衣服及報酬賃銀等の各費用に向けられる豫算は實に絕ゆる間もなく、且つ會計年度內に於てすらも、再び產業界に流れて行くのである

以上に述べたる事業奬勵に必要なる條件が、現在吾等の獻身的努力の甲斐あつて、一旦充たされたる曉には、國家合法的興信組合の貸付に依つて調達される勞働自身の物件費に必要なる資力は、一般に信ぜらるゝよりも短時間に利子を生ずるであらう。勞働奉仕に於て活躍する青年は、同時に又、產業界に於てすらも年長既婚の勞働力に充分餘地を與へるものであるが、他方に於ては、彼等自身が他日勞働奉仕より身を引きたる際、產業界の就職を容易ならしめる諸條件を敎育、體力、及知識の諸點に亘つて、獲得することが出來るのである。

現今殆どあらゆる國家が、吾等の自發的勞働奉仕を學び其等の國體に該當する樣々の形式で模倣せんとして居ることは、明かに勞働奉仕に夥しき價値の存することを認識しての所爲である。恐らく此の事實は、永久に猜疑深くしてあら探しに專心する一部の同胞 をも、深く沈思せしむるであらう。

何は兎もあれ、吾等が、純然たる國民及勞働結束の勞働奉仕に依つて、最後に、あらゆる階級的高慢や階級的憎惡より遙かに遠く離れた一獨逸青年を創造し、此の青年は、獨逸の國土に對する名譽の奉仕に依り、全國民に勸んで奉仕せんとする內的覺悟の必要なるを尊嚴なる態度で理解し、斯くして其の焰が鬱勃と燃えるであらう、と云ふ事實の中にこそ、青年及全獨逸國民に對する利得にして、冷い打算を以てしては到底把捉出來ないものが存するであらうと、吾人は信ずる。否信ずる計りではない、吾人は是を知るのである。

5、獨逸勞働奉仕制度の市民的特色に就て

過般ヂュネーヴに於ける佛蘭西代表が、實行委員會に於て獨逸に對し、一般勞働奉仕義務の採用を禁ぜしむる一案を通過せしめたことは、人も知る通りである。該案の根據は、勞働奉仕は一軍務事項なりと主張するにあつた。

扨て吾等は、勞働奉仕の目標と意義を說明することを以て、佛蘭西國民を納得しようと望んではいけない。斯くの如き期待は、既に根底より地盤を缺くのである。何となれば

勞働一般、取り分け肉體勞働の中に、觀念的基本を有する何物かを看取することは、明白に佛蘭西人の思考と感情を以てして掴み得ぬものと見られるからだ。勞働の倫理、是は佛蘭西人の一概に理解し得ぬところのものである。勞働の神聖化、是は佛蘭西人の思考の外に立つ事柄である。鍬や斧の肉體勞働が名譽ある　任務たり得、鄉土の此種勞働は、働く者の品位を高めるとするが如き考方は、佛蘭西人よりも遙かに遠く、是等を敷衍する事を以て、說得を計らうと望んではいけない程である。　今日猶然るが如き、　假りにも勞働を知れりとすればまことに辛くして出來得る限り速く始末を着けねばならぬ必要事としてに他ならぬ。該國民は「顏に汗して、汝のパンを食せよ」なる舊約聖書の視角より勞働を見るに過ぎざるも、而も是は、賦役思想の意味に於てであつて、決して敎育價値の意味に於てではない。

佛蘭西人に事態を闡明して、勞働奉仕が一軍務　事項に非ざる事を知らしめんと欲せば、問題自身に横倒る赤裸々の事實を以て、彼等に肉迫して行かねばならないのである。今、是を試みんとする。

扨て取り敢えず此處に頗る重要な問題がある。果して、佛蘭西人の主張するが如く、獨逸勞働奉仕が一軍務事項であるならば、獨逸勞働奉仕の指導者達は、特に軍部より編成され、佛蘭西人の見解に依る勞働奉仕の軍務的課題を果す可きである。然るにも不拘、今勞働奉仕指導者編成に一瞥を投ずるとき、事實は正に其の反であることが分る。

勞働奉仕國家指導卽ち、三十名より成る局長、報告者の最高幹部のうち、僅かに半數が退役將校で、其のうち一九一八年以後に現役にある者は三名に過ぎないが、今此の事實を全く除外視すれば、勞働奉仕指導に取つて決定的職權卽ち奉仕局は現役でもなければ退役でもない某氏の双手にあるのである（ドクトル、シュテルレヒト）。其の代表は大學敎授（ドクトル、ヘンリーツイー）且又、法政局も文官を以て當てられて居る（參事官フオンフンケ）。既に强調せるが如く、國家指導部内に於ける前現役將校の數は極めて僅少であつて、此の事よりして見ても軍務官廳なぞ話にも成らない事が明確である。

右の事實が事態の眞相を明白に語るとすれば、更に又、勞働奉仕指導部なるものは國家勞働大臣に從屬し、國防大臣及國軍に對しては、如何なる服務上の關係をも有しないといふ事實も亦、同樣を語るのである。國内に於て、勞働奉仕は軍隊と如何なる關係をも有せず、全國に亘つて、勞働區及勞働各局と官衙的連結を結んで居ると云ふことは、多少なりとも事態を明晰に批判せんとする者には、事、純然たる文務事項に關はることを適確に證明する一事實である。何となれば、恐らく獨逸に於て指導諸官廳程極めて文務的にして、あらゆる軍事より遙かに遠き特色を有する行政官衙は存しないからである。

扨て次に第三の事實に移るが、此の事實は既に確定し陣營指導者をも包含して全勞働指導者の僅か七、七パーセントが曾つて現役將校であつたに過ぎぬ事を統計を以て明瞭に示すことが出來る。全指導者のうち一六パーセントは世界大戰に官位無き一兵卒として從軍せるも、一九一八年以來軍隊と何等の關係をも有せず、從つて彼等は近代兵學的意味に於て、訓練されたる者と見做すことは出來ないのである。然るに、全指導者中四六・四パーセントは綜じて兵役に服したる體驗なく、何等軍隊の敎育を有しない。吾等は斯くして、勞働奉仕指導者中六〇パーセントは、軍事的訓練を受けず、或は最早受けたる事と稱し得ぬ事實に當面するのである。此の簡單明瞭なる事實の前には、獨逸勞働奉仕の軍務的特色云々を唱へる佛蘭西の主張も、敢なく瓦解してしまふのである。最後に吾等が見のがしたくい一つの事實がある。獨逸に於ける勞働志願者は一般に六時間に亘る激しい肉體勞働を爲さねばならぬ。更に又、其の仕事場に達する迄には、殆ど到る所で早朝半時間の步行を爲し勞働終了後には再び同一里程の歸途に就かねばならぬ。其の仕事場が遙かに遠い場合には、自轉車を以て通勤される。一概に獨逸内の陣營で是等往復時間の寡少なものは極めて稀で、時としては本質的に更に多くの時間が要せられる。卽ち僅かに日曜祭日を例外として、純勞働時間でさへも日々七時間に亘るのみならず、往復時間も相當に加はる譯である。勞働が終へて歸宅してからは、食事が行はれ、次いで、規則としていづれの陣營にも指定されて居る二時間のベット休息が行はれる。

早朝仕事場へ通勤の途に就く前に、器具なしで筋肉を訓練せんが爲に、約三十分の體操が志願者に課せられる。

右に依れば、日に就き丸九時間半が此處にも規定される

譯である。又更に謂へば、週に少くとも六時間が政治學の授業に捧げられる。勞働奉仕に身を置く者は、いづれも、是等の六時間が絶對的に必要のものであり、而も必須のものに決して充分の程度でないことを知つて居るのである。更に是に加へて、無條件に必要な精神訓練とスポーツの爲に、少くとも一週六時間を考慮に入れなければならない。

此處で予が問ひたいのは、少くとも實用に適すだけの軍隊教育なぞの爲、一體何處に時間と可能性があるのかと云ふ事だ。

此の問に對して軍人自身が答へるだらう、それぢや時間はまるでない、と。

是を以て實行委員會が獨逸勞働奉仕に對して行へる行爲全體、即ち故意の色最も鮮かにして、獨逸內政的復舊を妨害せんとの意圖より發生したに過ぎぬ　行爲の始末は着けられた譯である。

國家勞働大臣ゼルテ氏は主に國外へ向つて發行されたる一論文中に、佛蘭西に由來する此の怠業に就き以下の意見を述べて居る。

「……さきに、軍備縮少會議ジュネーヴ執行委員會が、獨逸青年の道德的救濟の爲、吾等にとつて絶對に必要である勞働奉仕の設置に對し、敵對的言明を爲したと云ふことは吾等獨逸人の理解に苦しむと同時に、異とする處である。如何んとなれば勞働奉仕の主要任務は教育的、道德的、取り分けまた社會的分野に存するからである。是等の根本思想が外國中でも佛蘭西に於て、如何にして斯く樣々に誤解され得るか、獨逸國內の吾等は、まるつきり理解することが出來ぬ。獨逸政府は勞働奉仕に依つて、青年の軍事訓練を行はんとするが如き聊かの意圖をも有するものでない。獨逸勞働陣營の必ず必要なる訓練が軍事上の目的に關らずして、勞働教育を目的として居ることを知らんが爲には、一度陣營の中を見渡して見れば充分である。勞働奉仕は斯くの如き底意より發したるには非ずして、職を有たぬ青年の面倒を見て、獨逸國民の將來を荒廢に歸せしめぬやうに專心して居るのである。

吾等は獨逸の勞働奉仕の中に於て、自然吾國青年の特質と國民性に一致する方策に從はねばならぬは勿論である。今日、勞働奉仕の思想が津々浦々の國民に至る迄行渡り殆ど全國民の共同財產と成つて居る時、吾等は獨逸青年將來

に對する希望の光を認めて意を强うする次第である。世界の何人と雖も吾等より此の希望を水泡に歸せしむる道德的權利を有しない。」

更にヒールル書記長は或る會見に於て、かのジュネーヴの件に就き、極めて簡明に次の如く意見を述べて居る。

「執行委員會の見解は誤つて居る。佛蘭西提議者は該案の提出を爲した際、獨逸勞働奉仕なるものに就き、何等愼重なる認識を行つて居なかつたことは明かである。彼等は勞働奉仕が獨逸の國民教育及國民經濟的事項であり、且又諸外國が獨逸の例にならつて、勞働奉仕なるものを養成せんとして居ることを知らなかつたのは明かである。」

6、勞働奉仕制度の教育的課題

一見して、最も目に着き難い勞働奉仕の側面は、同奉仕に委ねられた青年の、國家社會主義的教育である。十一月組織は十四ヶ年に亘つて、獨逸青年を國粹政治の方へ指導する機會を有したが、幾拾萬の青年等が此の誤れる指導の犧牲と成つたのである。行はれ來つたところの罪惡が國家社會主義的革命に依り悉く除去されたと信じ得る者あらばそれは單なる空想家に過ぎない。國家社會主義が其の果斷政略を以て自身の負ふに至つた重大責任を意識する者なら十四箇年に亘る邪道の事實を愼重に考慮し、剩へ幾拾萬の獨逸青年等が十一月組織の「教育法」の結果、國民の偉大なる過去に對する敬愛の念なく、責任感と秩序力なく、將又獨逸國民生活必須條件に對する理解もなく、斯る狀態で實社會に投げ込まれたと云ふ事實を着過することは出來ないだらう。今日、十四歲より二十八歲迄の年齡を包含する是等青年の大部分は、該教育の禍を受けて、放恣、あらゆる崇高偉大なる事物の輕視、規律紊亂、粗暴なる利己主義等の結果に陷つた。

吾等が明白に見なければならぬのは、S、A、S、S、及鐵兜團に赴き其處で祖國史に對し敬度の念に充たされつゝ、獻身友情信義其他丈夫の德に教育された處の青年は全く一部に過ぎぬと云ふこと――各學年所屬綜數と比較してさへも小部の青年に過ぎぬと云ふことである。

吾が後進の心情を數年に亘り荒廢せしめたる禍は、數箇月を以て驅逐し得ぬ所以を考慮し、察照するならば、吾等

は事態の重大を充分知ることが出來よう。更に又、父兄教師自身の大部分すら、猶國粹思想教育、即ち眞の轉向を必要とする事實を看過し得ぬ時、益々以て事態を輕視することは出來まい。尤も國民の最大部分が今日國家社會主義國粹政策の諸觀念を承認せんとして居ることは事實で吾人は是に對し充分謝意を表するものである。併しながら――是等父兄等の或一部のみが、過去の事物思想感情より脱却して居るに過ぎない――從つて、唯此の一部のみが實際の獲得として見なされるに過ぎない。爾餘の人々は猶精神的に圓熟せしめねばならぬ。而も先づ着目しなければならないのは其等の子弟である。

青年國家指導並にSA、指導の偉大にして充分認識されたる課題が此處に存することは誰しも否認しないであらう――まして吾等に於てをやである。併しながら、、自發的志願者の指導なるが故に、SA指導及青年指導は、青年の全部を含まず、大部分は其の感化より身を引き、此の事が時としては公然と意識的に行はれるのを見るのである。此處に獨逸勞働奉仕の道德的大任務が存するのであるが、其の意義に就ては勞働奉仕指導部は充分心得て居るのである。

國家指導は此の任務を唯に認識して居るのみならず、又充分責任を以て着手して居る。該指導部が教育任務を如何なる見地のもとに視て居るかは、國家指導部教課區分掛長クレッチマン　　が以下の如くに述べて居る。

「……必須の副科をも含めて、行政科の授業を施行することは、蓋し目下の急務である。何となれば、青年は先づ挽近數十年の思想界、即ち唯物的國家觀の『主我時代』より脱却して、汝は無にして國家がすべてなり、復興せる新『協力思想』に、其の有爲なる一員として教育されねばならぬからである。『勞働は、人の品位を高む』なる勞働奉仕根本思想は、教授の出發點を成す。勞働は、何人にとつても共有であり、何人にも理解され得るものである。勞働なる概念を理想化して、灰色の日常より倫理的　概念として摘出することこそ、教師並に勞働奉仕各指導者の課題である。

其故、青年を此の意味に於て教育する第一の條件は、適當なる指導者である。此の指導者は勿論理想家でなければならぬが、反面また、然る可き目標として青年に示されるものを、充分現實に即して實踐して見せることが出來ねば

ならぬ。

郡部の勞働は勞働服務者をして、始めて鄉土に接近せしむる場合が多い。此の感情を覺醒し、深めることは、鄉土科に授けられたる任務である。蓋し鄉土科は時として該當する郡部に適應しより大なる獨逸への橋梁を成す場合が多いからである。

現今、政治時事問題に大なる關心を有する青年等に、更に歴史に對する理解が授けられる。歴史科は綜じての教案のうちで恐らく顯著なる地位を占めることに成らう。蓋し是は從來人の識れる歴史科には非ずして、即ち死せる數字名稱の暗記ではなくして（是は一般に授業が知識の注入、精神の重荷であつてはいけないのと同樣である）傳達されたる知識より、國民及國家の諸々の關係を識別せしむることでなければならぬからである。斯くして吾等の歴史科は歴史は曾つて往時の政治であり、現今の政治は『生成しつゝある歴史』であることを教ふるものである。

斯くの如き知識は政治自治問題に正しき立脚點を與へる。歴史は將來の爲の教師と成り、歴史科は祖國教育の最も重要なる方策と成る。

歴史の偉大なる模範たる大政治家、將軍、獨逸の精神財寶の創造者たる詩人、發明家等は、偉人及同胞として二重の價値を有つに至る。歴史過程に於て行はるゝ戰鬪は、忠誠と統帥獨逸信仰と獨逸國權を物語るものである。併しまた反面には、是等純獨逸式根本思想の沒却に依つて、將又其の擬造と異國の影響に依つて、如何に獨逸の生存權が縮められたかをも物語るものである。

斯くして此の生存權、鄉土、血と國土の爲の鬪爭の圖面が生れる。

家庭學及種族論に關する民族學的教課は――至極平易に講義されるものである――此の際、大なる關係を有つであらうと思はれる。健全なる家族は健全なる國家の原細胞である所以が明示さるゝと同時に遺傳衛生學も亦然る可き分野を占めるであらう。

道德的國家觀念の根底の上に築かれた公民學は政治並に經濟の相互關係に對する理解を青年に授ける。國民經濟學の科目は生命のない數字や無味乾燥な統計を有つた教課とは成らずして、經濟は其れ自身目的に非ず、國民の僕であり、仲介者でなければならぬとの認識を授くるものである。

大都市及工場地帶より遙かに遠く離れた、坦々たる平地で勞働すると云ふことは、農民階級に對する正しき見地を服務者に與へる。服務者は鄉土の土壤を相手に勞働を營むことの如何に困難であり、孜々たる奮勵努力に依つてのみ、成果を揚げ所得を成し得る事を日毎に實感するのである。今此處に於て、補充の意味で編入されるのが獨逸農民狀態に關する一科である。是を以て靑年等は、農民階級が健全なる國民の經濟的細胞にして、從つて國家は此の生産階級に對し、全國民利害のもとに、絶えず保護を加へなければならぬことを理解するように學ばねばならぬ。更に勞働奉仕服務者は、鄉土の土壤を相手に營む此の勞働が、曾つては獨逸所有思想の根本概念を成したと云ふことを、經濟的に知るのである。「勞働所得を造る」の思想は、再び彼等に獨逸的權利の概念と成り、此種私有財産の保護に依存する吾等の國家論を、充分理解せしむるに至る。更に服務者は畑地で土を相手に手自ら勞働することに依り、何故一箇の生活力豊かなる國民が――必要とあれば最後の手段に訴へてさへも――其の生存自由、並に政治的自由に向つて努力するか、其の理由を知るであらう。若しも、其の後に於

て、授業中に屈辱的條約、獨逸生存區域の縮少等が明示さるゝ場合には――若も國境地方の勞働陣營に於て、ヴェルサイユ國境決定の無意義なることが、日々直截に現れる場名には、或は又獨逸の他の部分に於て、手許に地圖を持ちながら、奪はれた地方が指摘さるゝ場合には――國民解放運動に與らんとする決意を服務者の胸中に强固ならしむることが出來る次第である。――若しも、鋤を手に持つ平和的勞作の結果、不毛の地が豐饒の田畑と化す場合には、獨逸は軍事的若しくは帝國主義的に世界に領土を要求するものに非ずして、獨逸國民は住むに餘地無き一國民として、既に幾多史上に行はれしが如く、唯一途に己が權利のみを求めて止まないといふことを、獨逸靑年は日毎に學ぶ譯である。」

如何にも其の通りだ。吾等は唯、國粹教育の點で猶多くのものが着手狀態にあることを知つて居る。だが、止むを得ない。何故と云ふに勞働奉仕は未だ若く、先づ其の第一期の發展段階を脫したのみであるからだ。併し事態を遺憾なからしめんとする吾等の鬱勃たる熱意は、目指す目標に到達する力をも與へることを信じて疑はない。其の目標とは何か。

苟も獨逸勞働奉仕の隊伍に列した者は、國家社會主義思想の意識的信奉者、吾が指導者宰相の國家社會主義的國粹思想の意識的信奉者に訓練されねばならぬと云ふ、即ち是である。

此目標を達成する爲には、至高至難の責任を進んで負ひ、大なる獻身の覺悟を有する！一箇の指導部を必要とする。勞働奉仕指導者たり得る者は、唯に該當する專門事項に通曉する許りでなく、又、無條件に指導者と國粹政治的意志に赴く者でなければならぬ。是等を果し得ざる者は、其の發展活躍のあれや是やの段階で挫折すること蓋し必定であらう。

右が事態の至難を語ることは、吾等は百も承知して居る併し事態其者を陰蔽するのは、甲斐なき業である。須らく國民は、本問題に關し、勞働奉仕指導部には、事態を然る可き方向に導かんとする明晰にして確固たる意志の存することを知らねばならぬ。是は必要の問題でもあれば當然の問題でもある。此處に於て國家指導部人事掛長フォンギエンナー氏は、頗る責任重き任務を有する譯である。

× × × ×

最後に臨みヒールル書記長の宣言に從つて、以下の決定が爲されねばならぬ。

目下、自發的勞働奉仕の力に依つて、充分時局打開の功を擧ぐることが出來、又擧げねばならぬと雖、勞働奉仕の直面せる國民經濟的大課題並に當奉仕の國民教育的大課題が永久に充たさるる爲には、奉仕義務を是非必要とする、と云ふことは、苟くも問題を愼重に考慮せんとする部局並に場所にあつて、更に疑を挾み得ぬことであらう。更に、現今勞働奉仕の第一線に立つ者は、吾國靑年の最も優秀なる部分であることを看過してはならないが、其等は全く自發的に當奉仕へ馳せ參じた純然たる若年の丈夫である。即ち勞働奉仕が教育として施さねばならぬところのものを、既にのて、幾分でも持參して居る靑年等である。

是に對し、教育を最も必要とする處の勞働忌避者や、お坊つちやん達、即ち、勞働奉仕に依り教育さるゝ事の最も必要な一部の靑年等は、現在、勞働奉仕内に見受けることは出來ない。

志願制度は、是を永久に保つことは出來ない。是は、獨

逸に於て、二樣の階級、卽ち旣に勞働奉仕を果せる者と、勞働奉仕より遁れて、寧ろ是より個人的利得を汲まんとする者との二樣の階級が、復しても、形成さるゝ危險の存する事態よりしても、旣に然りと謂はねばならぬ。併しながら、國家社會主義は、斯くの如き一部の國民に妥協することは出來ない。其故、吾等は、當然の必要を以て、早晩、一般勞働奉仕義務の制定に至らなければならない。

結語

吾等勞働奉仕の丈夫等は、卷頭に述べた指導者宰相アードルフ・ヒツトラーの言葉に存する吾等の任務を果たさんとする確固たる意志を有す。

此の義務遂行の意志は、唯に、國家非常の認識より出發するのみならず、勞働奉仕の體驗を根柢とするのである。田畑、牧場、森林、溝渠等あらゆる露天のもとに、勞働に就く吾等若き同志の姿に接する者、又、彼等が歌聲高らかに、喜びに輝く眼を以て、時としては至難と思はるれる勞働を果して居る有樣に接する者、或は又、何の爲に斯る苦役に服するか、驚き反問する異國人等に對して「御國の奉仕の爲に」、或は「吾が獨逸の爲に」、或は「指導者の意志に依り」、或は「吾等全部の幸福の爲に」と答へる彼等の、あの光り輝く眼に接する者は、何人と雖も勞働奉仕の何たるやを知り、此の勞働奉仕こそ——如何にも、新興獨逸の最も革命的なる一形態である——而も同時に、新獨逸の最も貴重なる一業績であることを、深く信ずるであらう。

獨逸の名譽を憶ふ者は、此の奉仕を肯定する筈だ。

附

ドクトル、ヘルムート、シュテルレヒト氏の講演より（勞働指導二十一、十月一日以降）

「勞働奉仕は、失業を以て已が運命を信ずることの出來ぬ青年等に依つて產み出された　運動である。併し、是は、單に失業に對する危急と絕望に對する鬪爭のみではない。それは又、青年等の把捉せる新しき見解である。現今幾多の學生が失業無產者とともに志願服務して、　勞働者とともゝ〳〵に獨逸の國土を相手に奉仕すると云ふことは、驚く可き變遷ではあるまいか。

我が時代は、プロシヤ獨逸魂の根源、卽ちシユペングラーが「プロシヤ魂と社會主義」に於て述懷したところの獨逸生活感情に立ち歸るものである。當時、皇帝衰滅に瀕し獨逸は世界舞臺より推除けられて、途を東方に辿つた時、新開拓の領土より、當時のあらゆる階級とあらゆる獨逸種族を包含する騎士國家が發生し、兼ねて又、社會主義的なるプロシヤ獨逸生活感情が生れたのである。該國家では、「我等」が「私」よりも前に立つて居た。國家が常に前景に立ち、それに各國民は一齊に組織されて、其の第一の僕として國王があつたのである。『一度び、プロシヤの國旗に誓言を爲せる者は何物も個人に歸屬するものを有せず』」

吾等の時代は、再び此のプロシヤ騎士國の思想に立歸る。獨逸は世界大戰に依り、再び世界の舞臺の外に投げ出された。獨逸は其の最後の植民迄、是を失ふに至つた。獨逸は己が國民の爲に、復しても必要なる生活條件を求めばならぬ國の思想と、全く類似せる事情より、獨逸に　運動が發生し、當時の騎士團と類似の目標を達成せんとして居ることは、何等偶然のことではない。此の　運動こそ、勞働奉仕そのものである。勞働奉仕は、併しながら、最早獨逸國境外に進出を求めんとして居るのではなくして、獨逸が自國內で勝手をつけ、すべての獨逸人に、國產のパンを供給し、出來るだけ多數の者に、農業國土を開拓せんとする一つの組織である。然るが故に、如何なる時代に於ても、勞働奉仕程、平和的な運動は無かつた譯である。

勞働奉仕の課題は、出來るだけ自由經濟と競爭しない樣な策で選定されねばならない。取り分け、是は、獨逸に取つて猶缺如せるパンと耕作地を與ふるを目的とする土地開墾事業に就て言つて、大いに然りである。其の際の大任務は、獨逸耕作地の三分の一を排水して、三十パーセントの增益を達成することである。勿論問題は、裸麥と馬鈴薯に適するに過ぎざる砂地だけではなくして、獨逸に於て缺如せる小麥其他の生產を供給する豐饒なる畑地に就ても矢張り同樣である。獨逸沼澤地の面積は、約二百ヘクターに上る。彼の和蘭は、沼澤地より豐饒なる耕作地を作り上げた和蘭の果し得たることを、獨逸の出來ぬ筈はない。此爲の方策としては、造林、林道、農道の敷設、氾濫堤防、海岸埋立、及、國內工業の及ばざる範圍で、村道溝渠の工事等

々の如き事項が擧げられる。是等の作業の範圍は、極めて廣く、獨逸國内に於て拾年の期間、壹百萬の人間に職を給することが出來る程である。是等　の勞働力が、從來用ひられずに放置されたと云ふことは、等しく吾人の痛恨する處である。

經濟課題と相俟つて存するのは、教育上のそれである。勞働奉仕に於ては、都會集中の焦熱より遠く離れ、土を相手に耕作し、眞に社會主義的結束を結ぶ事に依つて、獨逸が二十世紀に其の任務を果たす爲必要とするが如き獨逸人　が生れるのである。此の人間は、國土を勞作の問題に就き、今一度熟慮する。彼は己が奉仕する國土に、新な條件を有する。此の獨逸　を作るに至つた自然と風景は、再び其の上に影響を及ぼす。彼は、都會放浪の後始めて祖國なるものを有つことが出來、――而も――持たねばならぬと云ふ事を知るのである。

併し、第二の課題は、國民的ならざる獨自の道を歩いた獨逸の一階級を、對國民の任務に赴かしむること是である謂ふ處の一階級とは、勞働階級に他ならない。勞働階級は獨逸國民生活の中に置かれて、他の諸階級と同權にされねばならぬ。是には、思想の轉換を必要とする。勞働階級をして己れと比し、第二次的のものと成す思想を、あらゆる爾餘の階級から斷然一掃せねばならぬ。そして勞働階級自身の中に於ても、既に植付けられた自己卑下を、優越の感情に、勞働階級として、大なる國民的任務を有すと云ふ意識に變更されねばならぬ。此の爲には、一人一人の國民を生涯の一定　期間　勞働者――獨り自身の爲の勞働者のみならず、全般の爲の、獨逸の爲に精神上でも勞働せんとする勞働者たらしむるより他に、優れたる方法はあり得ない。

獨逸勞働奉仕は、世界中獨逸の卒先に關る一運動であり、今や他の世界の注目を一齊に喚起する一行動である。併しながら、勞働奉仕は、本來純然たる獨逸の運動として、解釋されねばならぬ。何となれば、此の運動は、獨逸内情の深奥より發生して、國民が、危急と死、悲慘と絶望より血路を得て、より良き時代へ、假令地上の樂園には非ずとも、猶、勞働と名譽の中で再び生活することが出來る　獨逸へ到達せんとする意志を知らしむところのものである。

――了――

昭和九年十二月十八日印刷
昭和九年十二月二十日發行

非賣品
代謄寫

東京府學務部社會課

印刷所　東京市深川區牡丹町一ノ七
今井印刷所

印刷人　東京市深川區牡丹町一ノ七
今井彦太郎

終